カクレアソビ

――――――いつまで、いつまで

荘厳な鐘の音に似た声。

白昼夢に沈みかけた私を、現実の陽射しの元へと引き上げた。

匣の様なバスに、ぐらぐらと揺れて運ばれる。

雲を毟りとったような白々しい陽射しが、車窓から入り込んでは空気を溶かし汚す。

匣の中には四人。

私は最後尾の長椅子に座っていた。隣には私に寄り添い、うたた寝を続ける少女。前の席に和服の男性。後は寡黙な運転手。

私の曖昧な意識は、これから向かう死地への憂鬱さでいっそうと摩耗しては砂糖のように脆くなっていた。

声が聞こえる。

前の席に座っている黒い着流しに深紫の羽織を纏った老人が、俯きながら、何かに話しかけていた。

小さく、掠れた声。

「いつまで――――――」

聞き取れたのは、その一言。

老人は誰かと話しをしている。隣には誰もいない。老人の声は、私にはもちろん、私の隣で眠っている少女にも、運転手にも明瞭には届くはずはないのに、囁き、話かけている。

私は、不思議に思い、身体を少し傾けて見た。

匣があった。

老人の膝の上に、深く赤黒い匣があった。

あの匣はなんだ……。

何が入っているのだろう……。

匣は、好奇心をかき立てる色をしていた。

私は前屈みになり、匣の中を覗き込もうとした。

すると、老人は私に気づき振り返った。

覗き込もうとした不躾を叱られる思い、私は逃げるように身を退こうとした。けれど老人は、不思議な笑みを浮かべて、こう言った。

「知りたいかね」

匣の中身を見てみたいか、と老人が問う。

私は真っ白になってしまった頭を置き去りにし、頷いた。

「匣というものは隠すものだ。匣には”穢れ“が隠されている。見てはいけないものが隠されている。それでも、君は知りたいかね」

嗄(しが)れた深く不気味な声は、まるで呪いのように頭に響く。
その声、老人の深すぎる黒檀(こくたん)の瞳の視線が恐ろしかった。
けれど、私の知りたいという気持ちは、萎える事なく躯(からだ)を蝕み、
浸食するように支配する。
老人が皺(しわ)だらけの手で、私を招く。
霞(かすみ)のように汚濁(おだく)した陽射しの中、老人の手がまるで鳥が羽ばたく
ように、ゆらゆらと震え、私を魔境へと誘い、導こうとしていた。
「――――さぁ、匣を開けよう」
匣が開かれる。
眼球が軋(きし)みをあげて麻痺(まひ)していく。
赤黒い匣。
蓋(ふた)が開く。
封印が解かれるように、厳(おごそ)かに露(あら)わになった。
その瞬間、私は何もかも忘れてしまった。
匣の中に、ヒトが入っていた。
淡い赤色の水に浸った顔。外界を直視している。
遠くから鳥の鳴き声が聞こえてくる。
金切り大気切り裂く鋭い鳴き声を、そのヒトも聞いたのだろうか。
飛び出しかけている眼球が、鈍く動いて私を見た。
幼い顔だ。
まだ少女の面影が強く残った顔が、浮かんでいたのだ。
鳥が鳴く。
匣の中で、囀(さえず)るように唇が揺れる。
鳴き声が、聞こえる。
それは遠くから、けれどずっと近くからも。
泣き声が聞こえる。
恐ろしかった。でも、怖くはなかった。
骨が軋むように幽かな鳥の鳴き声。
繰り返し、繰り返し、響く、姿無き声。
繰り返し、繰り返し、鳴く、声無き人。
いつまでも、いつまでも、見ていたい。
「聞こえるのかね」
突然、老人は僕を見た。
「これは、秘密だ」
匣は閉じられた。
それでも私には、
いつまでも、いつまでも、
鳴き声が、匣の中から、
遠くの方から、
鳥のように、鋭い響きで、

私を呼びかける。
これは何かと、私は尋ねた。
すると老人は、瞳を鴉(からす)のように濃い紫色に鈍く輝かせ、嗄れた声で云った。
「ケガレたヤタガラスだ」
鳥が鳴いている。
いつまでも、匣の中から、
いつまでも、幽(かす)かな処で、
いつまでも、哭(な)いている。
隠れたまま、誰にも知られず、
いつまでも、鳴き続けていた。
一九九九年、玄(くろ)い冬が来ようとしていた秋の終わり。
それを思い出すと今もなお、その鳴き声は聞こえてくる。
いつまでも、いつまでも、鳴き続けているのだろう。
穢れの意味をしらず、私は、憎いほど羨ましかった。
鳥になりたい。
誰にも見つかることなく、誰にでも聞こえる声で鳴き続ける。
その穢れた鳥が、羨ましかった。
ひどく、羨ましかった。
ただ、羨ましかった。

第一幕　赤い祟り

１／九月十四日（火）

小鳥の淑やかな囀りが聞こえる。

「あやめ起きなさい。学校遅れるわよ！」

一階からお母さんの声が、ベッドの中で、まだ寝ていたいよと甘える私を布団から引き離すように半ば強引に起床させる。

カーテン越しに、低い位置から差し込む陽射しが部屋を暖める。

「うん。今日も良い天気」

眠気覚ましにそんな事を呟きながら、それでもたったそれだけで今日一日がとても良い日になったらいいなと毎日繰り返している。ジンクスみたいなもの。星よりも太陽に願いを祈った方が叶うような気がする。だって、大きいから。

またお母さんの声が聞こえて来る前に急いで着替えて、鏡の前で髪を整える。何度もクシで梱ても捻くれた寝癖は落ち着いてくれない。寝癖と格闘しているとお母さんの声が聞こえてきた。

仕方ないから、本当に仕方ないから一階のリビングに下りる。

その前にもう一度鏡を見て微笑み運動。うん、今日も笑顔だ。

リビングに入ると、テレビが独り言のようにニュースを流していた。キッチン前のテーブルでパパが新聞を読みながらコーヒーを飲んでいる。お母さんはキッチンで洗い物。

「おはよう」

パパの向かい側に座ると、パパは新聞を下ろして微笑みを浮かべた。

「おはよう、あやめちゃん」

パパはいつも子供のように微笑む。そして、もう高校二年生にもなった娘を小さな子供のように、ちゃん付けで呼ぶ。ちょっと恥ずかしい気がするけど、パパが言うと違和感がない。どちらかといえば、嬉しいかな。

「あやめ。また遅くまでテレビ観てたでしょ、あなた」

「違うよ。友達から借りた映画のビデオ観てたんだよ」

テレビじゃないよね、とパパに助けを求めると、そうだね、と笑った。

「同じ事でしょ。あまり夜更かしし過ぎると肌が荒れてニキビも出来て、不細工なって総一郎さんに嫌われるわよ。そうなっても、お母さんは知りませんからね」

お皿をテーブルに置くと、澄ました顔でお母さんが言う。

「えぇー。そんなことないよね、パパ」
パパは声を出して笑った。そして寝癖が直ってない私の頭を、大きな手で優しく撫でた。
「もちろんだよ。あやめちゃんは、可愛い娘なんだから。嫌いになるはずがないだろ。でもね、夜更かしはほどほどにしなさい。でないと毎日怒るお母さんの方が、ね」
「私がなんですって？」
「あ、いや、……。あやめちゃん、どんな映画観たの？」
「総一郎さん！」
お母さんの恥ずかしそうに怒鳴る。
お母さんは今でもパパの事を名前で呼ぶ。再婚して二年になるのに、だからなのかな、いつも喧嘩しているようで、すごく仲良く見える。
パパと昨日見た映画の話をしながら朝食を食べて、寝癖を直したくてもう一度部屋に戻るために階段を上がろうとしたら、廊下の奥の和室から呼び止められた。
「あやめちゃん」
「あ。おはよう、おばあちゃん」
「はい、おはよう。あやめちゃん、ちょっとこっちにおいで。髪、といであげるから」
おおばあちゃんが小さな手でゆっくり手招きする。
すごいよね、一目で私が今なにに悩んでるのか分かっちゃうんだから。
私は、駆けっておばあちゃんの部屋に向かった。
取り替えたばかりの真新しい畳の匂い。小さな和室の隅に置いてある三面鏡の前に私は座る。おばあちゃんが後ろに座って、優しく髪をといてくれる。
「あやめちゃんの髪は、黒くて綺麗な髪だね」
おばあちゃんはクシで、私の髪を撫でるように梳きながら、いつも髪を褒めてくれる。黒くて細い、柔らかい髪だって。
「お母さんに似たのかな」
「あぁ、そうだね、きっと」
おばあちゃんが、綾取りをするように私の髪を両側でお団子みたいに束ねて、ツインテールに結んでくれた。
「おばあちゃん、リボンもね」
「はいはい」
赤いリボンを渡すと、おばあちゃんは、あっという間にリボンを結んでくれた。きっと、私だけじゃなくて、お母さんも子供頃はこうして、おばあちゃんに髪を結ってもらってんだろうなと、ふと瞬きをしながら感じた。

「はい終わり。どう、あやめちゃん」
「うん。ありがと、おばあちゃん」
もう一度三面鏡を眺めてみると、鏡に映った壁時計がそろそろ出ないと遅刻しそうな時間を示していた。
私は慌てて立ち上がって、
「それじゃあ、行ってくるね」
和室を出ようとしたら、おばあちゃんに呼び止められた。
「あやめちゃん、ちょっと待って。ほら、神様に手を合わせていきなさい」
「え…、でも、遅れちゃうよ」
「少しだから、ね。お願いだから」
髪を梳いてもらったから、どうも断りにくいな。仕方ないから、少し手を合わせることにした。
神棚がある。白っぽい木で作られたミニチュアの神社みたいな飾り物。その下には木彫りの鳥が置いてある。翼を広げた鷹みたいで、その前にはいつも小さな皿に盛られたご飯と塩がお供えされている。何かな神様なのかもしれない。
「ヤタガラス様、今日も家族をお守りください……」
おばあちゃんは毎日こうして神棚の前でお祈りをしている。
私もたまに一緒にお祈りするから、二礼二拍手一礼の作法を覚えてしまった。
「おばあちゃん。私、そろそろ行くね。絵馬ちゃんが待ってるから」
「あぁ、はいはい。神社に行くんだね。はい、いってらっしゃい」
おばあちゃんが小さな手をゆっくりと振るのを見届けて、私は和室を出た。玄関へ直行。リビングの前を通った時、お母さんの怒っているような声と、パパの笑い声が聴こえた。
家から出ると、少し肌寒く澄んだ空気。低い場所から注がれる朝陽がまるで、今日も晴れるよと云っているように眩しく町を照らしてくれる。深呼吸をして、一瞬呼吸を止めると、近所から賑やかな生活な音が聴こえてくる。楽しそうなマーチのような音楽に似ている。
閑散とした住宅街を抜けて小さな商店街を通る。まだ七時を少し過ぎた時間だから、シャッタが上がっているお店は疎らで人通りは少ない。電線の上の小鳥の鳴き声が、よく響く。
ここ伏木町は、大きな河があって、それを隔てて朽木村と伏糸村に分かれてる。学校は大橋を渡った伏糸村側。村といっても、駅もあるし繁華街も大きな病院もある一通りの施設はそろってる。私が住んでいる朽木村は、過疎が進んでいる様に寂れて、住宅街と小さな商店街以外は、どこまであるのか分からない樹海があるだけ。

学校とは反対のその樹海の方へ向かう。
商店街を過ぎてしばらく歩くと、アスファルトの道路から時代が停滞したような砂利道に。ここまで進むと、もう街でも村でもなく、森。
大きな大木、細い木々、竹林のトンネル。まだ青々とした緑葉の天蓋（てんがい）。古びた朱色の鳥居。末広がりの空洞。朽木村の樹海の入り口に神社がある。
鳥の森（とりのもり）神社。
参道を通って朱色の鳥居を潜って、見上げるほどの急勾配の石段をあがると大きな鳥居と、夜の静けさが残った境内。石段から拝殿（はいでん）まで石畳が真直ぐ敷かれて、その両脇には石灯籠。まわりは樹海と薄い朝霧。空気は瑞々しくて、吸い込むと汚れたコンタクトレンズをとったように目に映るものが鮮やかに見える。
毎朝見ている歴史積もる神社を眺めながら、回れ左して秘密の隠れ道へ向かう。
りん、と鈴の音。
歩き出した足が止まる。鈴の音が聞こえて拾うように森を見渡す。
朝霧の中を何かが動いた。影のように。白い影。幻のよう。
「なに？」
呟く間にもう影は見えなくなった。まるで、幽霊？
「うう……」忘れよう忘れよう、呪文を唱えて歩き出す。
境内を抜けて塀のような竹林の道をくだると、絵馬ちゃんの家の庭に到着。
竹林に囲まれた武家屋敷みたいな和風建築。私の家みたいな平凡な住宅とはひと味も一次元ぐらい違う。今にも和服を着た姐さんか武士が出てきそうだけど、チャイムを押してしばらくして出て来たのは、私と同じ制服を着た同い年の女の子。
「絵馬ちゃん、おっはよー」
「おは……。朝っぱらから元気ね、あやめは」
まだ寝足りなそうに目を瞑って手を振る奥津城（おくつき）絵馬（え ま）ちゃん。腰まである黒髪は、寝癖で少し逆立っているけど、お昼頃になると不思議と艶やかなストレートヘヤになる。羨ましいな。トレードマークのような浅栗色のウエスタンブーツと、セーラ服の組み合わせは、いつみても新鮮だ。
「眠そうだね」
「みりゃ分かるでしょ」
うん、毎朝見てるから分かるよ。
「また徹夜でゲーム？」
「いいえ。あ、うん。そうゲーム。ちょっとはってるの」
「いつもはってない？　ゲームに」

「そう、埋もれてるわね」
「助けて上げようか？」
「それにはおよばなくってよ」
絵馬ちゃんは、お得意のお嬢様口調で微笑んで、私と話している間に玄関の戸締まりを終え、紺色のバッグを肩にかけて、歩き出す。
正面玄関から伸びる、神社とは反対側の道を下る。そこを下るとバスの停留所がある大通りに出る。
「そういえば、神社っていつも綺麗だよね。絵馬ちゃんが掃除とかするの？」
「やんないよ」一言。きっぱりあっさり否定された。
「私ね、神社関係の事と一切関わらないって誓ってるの」
ちょっと怒っているような真剣な顔で言う。
その理由を、なんだかこれ以上追及しない方がいいような気がした。誰にだって触れられてく無い事ってあるもんね。うん、それぐらい分かるよ私にだって。だからこのお話は終わり。
私達が到着するのを待っていたようにバスが来て、乗り込む直前に独り言でも呟くように絵馬ちゃんは言った。
「神社の掃除はね、私がやらなくても、夜にやってくれるのよ」
「え、……誰が？」
「幽霊が」
悪戯っぽい笑みを浮かべながら絵馬ちゃんはバスに乗りこんだ。
「え……？」
幽霊ってあの、うらめしやー、の幽霊？　本当に？　え、あ、でも、まさかね。
いないよね。お化けなんていないさ、だよね。ね、嘘だよね。私、苦手なんだけど、お化けとか幽霊とかって。あ、でも、神社だし、居ても……。
「あやめ、乗らないの？」
「あっ、待って」
急いでバスに乗車。絵馬ちゃんの後をついて、後ろ側の席に着席。
ここからバスに乗って、学校まで三十分弱。乗客は私達と同じぐらいの年の学生とスーツ姿のサラリーマンらしき人と、お年寄りの数名。余裕で、席に座れる優良バス。
「ねぇ絵馬ちゃん。幽霊って嘘だよね」
「あやめ、幽霊とか嫌い？」
「うん。苦手」
「だったら、忠告しておいてあげる。夕方になったら神社には近づかない事。……出るわよ、幽霊。すごく出る」
朝は意地悪るな絵馬ちゃん。これは朝に弱いせいで、お昼になると優しい絵馬ちゃんに戻ってくれる。それまでの我慢だ。

「あ、そうだ。ついでにうちの神社の森って、妖怪が出るからね」
「いじわる！」
がんばれ、私。

◇

「あやめ、お昼食べるよ」
四時間目の授業が終わると、すぐに私の席に一之宮（いちのみや）さんがやってきた。隣にはさらさらのストレートヘアになった絵馬ちゃんがお弁当を持って立っている。
お弁当を持って、一之宮さんと絵馬ちゃんと一緒に屋上に上がった。そこが私達のいつもの昼食スポット。
屋上に出ると、視界が一瞬真っ白になるほど眩しい陽射しがお出迎え。空は青く、ロールパンみたいな雲は太陽の邪魔をしないように気を使って風にゆられて流れている。
まだ残暑が占拠しているけど、私達以外には誰もいない屋上はまだ、お昼を食べるにはちょうどいい場所。フェンスの前のブロックに座って、私達は並んでお弁当を食べる。

「なんだか、マンネリだよね」
ぽつりと箸をくわえたまま、一之宮さんが呟いた。
ショートヘヤと赤渕の眼鏡が知的な雰囲気を漂わせる。絵馬ちゃんがライバルと公言しているらしいけど、私は未だに何のライバルなのか分からない。少しミステリアスで、ちょっとオヤジが入ってるけど正真正銘の女子高生。
「なんか刺激が欲しいよね。刺激が。例えば……」
私に、意味深な視線を身を乗り出して向ける一之宮さん。まるで朝の絵馬ちゃんみたいに意地悪オーラを放っている。気を付けろ。
「鳥居（とりい）と神籬（ひもろぎ）でも誘う？」
「え、あ、ちょ、ちょっと……」
「あ、そっか。あやめ、礼慈（れいじ）の事が好きだもんね」
「絵馬ちゃんッ」
両側から意地悪攻撃。
意地悪な笑い声。
これって、もしかしてイジメ？　私、遊ばれてるの？
「ねぇ、あやめ」
茶色一色のお弁当箱に箸を突き立て、
「アイツのどこがいいの？　あの単純バカが」

絵馬ちゃんが大きな目をまんまる開けて珍獣を見るみたいに私を見た。もう一方から覗き込む様に一之宮さんも、私に視線を向けた。
見えない万力で締め付けられているような圧迫感。
「わ、私、別に鳥居君が好きなんて、一言も……」
言ってないよ、と云う前に絵馬ちゃんに遮られた。
「みりゃ分かるでしょ」
なんだか呆れた表情を浮かべて云われた。
一之宮さんは激しく同意するように頷いてる。
「あやめって顔に出やすいもんね、気持ちが。ま、それでもアイツは気づかないってのが、すごいけどさ。恐るべし、鈍感熱血バカ」
絵馬ちゃんが馬鹿にしている人の事を思い浮かべると、確かに、ほっぺたが熱くなるような…。
「あ、噂をすれば」
一之宮さんの声とほぼ同時、屋上のドアが閉まる大きな音がした。思わずそっちの方に視線を向けると、男子が二人、屋上に上がって来たのが目に入った。
「小夜子。やっぱりここに逃げてたのか」
善く通る声。いや、私はこの声だけはきっと聞き逃さない。
凛とした眼差し。陽射しに照らされて栗色に透ける短い髪。一歩一歩、力強く逞しく動く身体。何よりも、鮮明に見える人。
鳥居君が近づいてくる。
「ほら、顔に出てる」
横から絵馬ちゃんの意地悪な囁き声。
「居場所を当てたのはさ、オレだけどな」
鳥居君の横にもう一人。背が高くて細い、針金人形みたいな体型。長髪を後ろで束ねている神籬君。
二人は、一之宮さんの横で立ち止まった。
「あら、何か用かしら？　私達、暇じゃなくってよ」
二人から一番遠い場所に居る絵馬ちゃんが、得意のお嬢様口調で尋ねると、鳥居君は一瞥しただけで、一之宮さんに向かって手を伸ばした。
「小夜子。先週貸した古文の辞書」
それを返せ、と云う意味で手を差し出しているよう。
「っあれー。借りたっけ？」
一之宮さんが、事情を知らない私でも分かるほど露骨にとぼけた。そんなの当事者の鳥居君は当然見抜いている。だから、半ば呆れた表情を浮かべてる。
「先週金曜、五時限目の前に俺の教室にまできて借りて行っただろ。神籬が証人だ。いいかげん返せよ。次の授業で使うんだ」

「はいはい。わかりました。返せばよろしいんでしょ。私の机の上に置いておいたから、勝手にどうぞ。他のものは触らないでよ」
「……分かった。いい加減、自分で返しにこいよ」
そう云うと、鳥居君は踵を返した。
「だってね、コンビニエンスな礼慈ちゃんだもん」
見送りの言葉代わりに、一之宮さんが高い声で云うと、鳥居君は一瞥しただけで何も言わなかった。隣にいる神籬くんは、笑い声を押さえている様に肩を震わせていた。
「相変わらず無愛想だよね、あいつら」
絵馬ちゃんは、まだ鳥居君達がいるのに、そんな事を云った。しかも二人に聞こえるぐらいの音量で。
私は、鳥居君の背中を視線で追っていた。陽射しに当たって微かに光沢が浮かぶ黒い制服。陸上部の鳥居君の背中は、とても硬くて逞しく観えた。
ドアを開けて、屋上から出て行く間際。鳥居君が振り返った。何か云うのかと見ていると、一瞬、目が合った。
刺々しい熱が胸を刺す。
びっくりして慌てて視線を逸らした。
ゆっくり、視線を戻した頃には、ドアが閉まっていた。
「ホント、表情に出るよね」一之宮さんがあきれたような声で云う。
「まったくね。まるで中学生日記を見ているようで、こっちまで恥ずかしくなってしまいますわ」お嬢様絵馬ちゃんが合わせて云う。
「あ、借り物で思い出した。あやめ。……ちょっとあやめ！」
「っは、はいっ」
「いつまでも見とれてないの。ヨダレたてれてるよ」
「え、ホント？」慌ててて口元を拭く。
「嘘よ」
絵馬ちゃんが事務的な声が私を硬直させた。
お昼なのに、まだ意地悪絵馬ちゃん。
「もう、なんでそんなに意地悪なの？」
私はイジメ反対運動の一環として抗議した。けど、絵馬ちゃんはまったく悪びれることなく、髪をさらりと払って優しい口調で言い返してきた。
「それはね、あやめさん。貴女にお貸ししたビデオを、まだ返していただけないからよ。今日でしたよね、お約束の日は。持ってきていただけたかしら、ビデオテープ」
「あ、え、えぇっと……」
「まさか、お忘れだったのかしら」
慈悲に満ちあふれるマリア像のような微笑みを浮かべる絵馬ちゃん。
でも、その眼は、悪魔のように怖かった。

「ううん。忘れてなんか……、ないよ」
昨日の夜まで覚えてたんだよ。明日返さなきゃって。だから、徹夜して観たんだから。それで、寝不足のまま起きたから、きっと忘れちゃったんだ。うん、忘れてないよ、昨日の夜まで。
「放課後。返しに行くね」
「忘れないでね、今度は」
お見通し絵馬ちゃん。

◇

放課後。
クラブに入っていない帰宅部の私は、HRが終わるとすぐにバスに乗って帰宅した。
「ただいま、おばあちゃん」
「ああ。おかえり、あやめちゃん」
玄関前で草取りをしていたおばあちゃんは額の汗を拭い、小さな鎌を足下に置いて呪文のように、よいしょと呟きながら腰を上げた。
「あやめちゃん。お母さん、今買いものに行ってるから。居間に、おばあちゃんがおやつが買っておいたから、食べていいよ」
「うん。ありがと、おばあちゃん」
玄関を上がってリビングを覗くと、テーブルの上に新聞紙にくるまれた長方形の箱があった。開けてみると今川焼が四つ入っている。
一度自分の部屋に戻ってから着替えをして、鞄に絵馬ちゃんから借りたビデオと、今川焼を入れて玄関を出た。和室側の庭に移動していたおばあちゃんに一言声を掛けてから、私は絵馬ちゃんのお家へ向かった。
今朝と同じ道のりだけど、聴こえてくる音や見える景色は違う。人の話し声笑い声。自転車の鈴。鳥の鳴き声。傾いた陽射し。商店街では買い物をする人と店の人との話し声。どこかから、おいしそうな匂いが漂ってくる。
季節は秋に移ろうとしている。
鞄を胸に抱えると、ほんのり暖かい。
まだ緑の葉が沢山ある森の入り口から、緑葉の天蓋からこぼれ落ちた日と影で模様付いた絨毯が敷かれた石畳の道。
朱色の鳥居を潜って、息をきらしながら石段を登りって神社の境内にやっと到着。
神社を囲む木々の影が、境内を隠す様に落ち始めていた。

朝とはどこか雰囲気が違う神社の様子。いつもゴミ一つない参道。落ち葉の一つもない。まるで毎日誰かが掃除をしているように閑散と綺麗。

今朝の話を思い出した。幽霊が掃除をしているって。でも、なんで幽霊が掃除するんだろう。

「まさかね……」

想像を置き去りにするように呟いて、林道へ。

低くなった太陽の陽射しと影も濃くなって、万華鏡のような模様が青葉の隙間をぬって地面に落ちて、道標のように延々と続く。

風が吹いた。

きらりきらりと輝きが揺れる。

竹の葉音が、呪文を唱えているように、ふるえふるえ響き渡る。

その不気味な音の津波に、どきりと身体が微動した。

竹林の合唱が響く渡る。

その中、リンと鈴の音の高い乾いた音。

その音に誘われたように私は、樹海の方へ振り向いた。

掠れた陽射しの中に、鮮やかな純白を見つけた。

一瞬、何もかも忘れてそれを見ていた。

それは今朝みた幽霊だった。

一際強い風が吹くと白い幽霊は人で出くわした野生の動物のように遠ざかっていった。

「あ、待って！」

気づいたら私は呼び止めて、後を追いかけて森の中へ入ってた。

道なんてない草だらけの中。白い後ろ姿を追って走る。

「ねぇちょっと待って」

呼び止めるとその子はものすごい速さで姿を消した。

「え……」息を切らしながら、走るのを止めて、辺りを見渡しながら歩いてもいない。急に迷子になったような心細さに襲われた。

「うそ……もしかして」

本当に迷子になったかもしれない。

辺りは同じような木々しかなくて、道もないから、今自分が立っている場所さえどこだか検討がつかない。

樹海に入ったらダメっておばあちゃんが言ってた。それを思い出しと同時に、私は、そっか樹海に入っちゃったんだ、とぼんやりと気づいた。でも、そんなに深く入り込んでないから大丈夫だよね、と自分に言い聞かせて、辺りを見ていたら、建物を見つけた。

森の中に、白い小さな建物があった。

迷子の私はとりあえずそれに近づいてみると、それは土蔵。

なんでこんな所にあるんだろう、と思いながら眺めていたら。

また鈴の音が近くから聞こえた。
驚きながら、今度は慎重に音を辿って、土蔵の裏に回った。
すると、居た。
森の中に、ひとり、その子供が眠るように佇んでいた。
白い着物。細い帯だけが赤い。吹き付ける風に、無抵抗に揺れる裾と袖から覗く細い手足は、まるで日の光を浴びた事がないように白い。なびく夜闇のように黒い髪が、頬まで伸びて両目と耳を隠している。ように見えけど違っていた。光を遮るように両目は、白い包帯で覆われている。
悪い夢かと思ってしまう程現実味がない。
まるでテレビの向こうのお話のように朧げな存在だけど、確かに、私の前に、その白い幽霊は存在している。
「み――つけ、た」
小さな声。竹の葉音に掻き消されてしまうほど微かな声だったのに、白い幽霊はそれに気づいて、私の方に顔を向けた。
白い包帯に隠されているのに、私は見られているように感じた。
からん、からん、と乾いた音を響かせながら近づいてくる。
「あ、……ぁ――――」
今更になって怖くなって、逃げなきゃ、と思った。
だけど私は、その白い幽霊をじっと見つめたまま動けなかった。

髪の長さと幼い輪郭から性別はわからないけど、それはまだ子供。
私より年下かもしれない。小学生かな、なんて場違いな事を考えていると、白い幽霊はじっと私の方をむいたまま、一直線に近づいてくる。
流れる様に。体が宙に浮いているように軽やかなに。
「あ。ぁ、ぁ……」
私はただ、惚けたように声を漏らしていた。
その間にも近づいてくる。
無言のまま、十メートルぐらいまで近づいてきた。
白い幽霊が微笑み浮かべて、
「むぎゃッ」
――こけた。
沈黙。
静寂。
鴉の嘲笑い。
「え？　……はい？」
幽霊が転けた。鮮やかに転けた。
幽霊って、転けるんだ。へぇ、新発見だ。すごい。
「――って、違うっ」
私は、うつ伏せに倒れたままの幽霊に駆け寄った。

もう、怖くはなかった。倒れた幽霊が、道端に捨てられている可哀想な子犬と同じように見えてしまったから。

「あの……、大丈夫ですかー」屈んで声をかけてみた。

無反応。両手を投げ出して、降参ですとジェスチャしているみたいな状態のまま腐葉土に顔を埋めて硬直している。

「えぇっと、……生きてますかー？」

幽霊に生きてますかって尋ねるのも可笑しいなと、言って後で思ったけど、幽霊さんの状況は全然笑えない。

動かない。

まさかこのまのまま、ふわっと消えちゃったりしないかな。

恐る恐る、身体に触れてゆすってみた。

着物越しに感じた体温は、冷たかったけど温もりはある。そして、少し力を入れて揺らすと簡単に、寝返りをうつように仰向けになってしまうほど、軽かった。

仰向けになった顔を見ると、本当に子供の顔つきだった。でも、頬が痩けていて弱々しく見えた。少し埃を被った両目を覆う包帯のせいで、起きているのか気絶しているのか分からないけど、それでも、なぜか見られているような、強い視線を感じた。

「……お、……、おな…が……」

小さな唇が微かに動いた。擦れた声が、かすかに聴こえた。

耳を近づける。

すると、グウゥという音が聴こえた。声じゃない。これは虫の鳴き声だ。腹の虫の。

「お腹…、空いてるの？」

尋ねると、白い幽霊はバネ仕掛けの人形のように頷いた。

すごい。幽霊でもお腹を空かせて倒れるんだ。

へぇ、また新発見しちゃった。

「あの……さ、今川焼があるんだけど……食べる？」

「はい、是非」

即答した。しかも今度はハッキリと声で。

鞄から新聞紙に包まれた今川焼の箱を取り出すと、倒れていた幽霊は機敏に身体を起こして、私の方に振り向いた。

今川焼を一つ手渡すと、まるでリスがドングリを食べる様に少しづつ、だけどすごいペースで食べだした。それを横で屈んで眺めていると、なんだか可笑しくなって、つい笑ってしまった。

「どうか、しましたか？」

あっというまに食べ終えると、大人びた口調で首を傾げながら幽霊さんが私の方を向いた。

「ううん。おいしい？」

「はい。……好きです、甘いもの」

「そうなんだ。もう一つ、食べる？」
「……いただきます」
包帯で覆われて目が見えないはずなのに、今川焼を差し出すと、迷いもせずに受け取った。またリスみたいに、ぱくぱく美味しそうに食べる。そして結局、私が持って来た今川焼ぜんぶ食べてしまいました。
「ありがと……ございました」のんびりした口調。
糸が切れた人形のように頭を下げた。
「どういたしまして。すごくお腹が空いてたんだね」
「はい。……三日ぐらい何も食べていませんでしたから」
「えっ……どうして」
「……わかりません。あそこに居たから、ずっと」
そう言って幽霊さんが指差したのは、私の後ろにある竹林にどうかしたような白壁の土蔵だった。
「ずっと、あの中に居たの……？」
ちょっと信じられなかった。町外れの樹海の入り口にある。人気の無い神社の片隅。町の光が届かない竹林の中に居るなんて、私にはとても怖くて出来ない。だって幽霊とか出てきそうだもん。
って、そうか、この子。……幽霊じゃないよね。だとしたら、誰なのかな。この神社に居るってことは、絵馬ちゃんの弟？
でも絵馬ちゃん一人っ子だって前に言ってた。だとしたら、一体この子は何者なんだろう。
「君は――――誰？」
私は、白い子供に尋ねた。
すると投げ出された様に伸ばしていた細い足を、折り畳む様に抱えて座り直した。何かに怯える様にその膝を抱えて、私を見てる。瞳は見えないけど不思議と、引き込まれる様な視線を感じる。
今まで感じた事のない清涼な空気を漂わせ、
「はじめまして――――――シキです」
甘いお菓子を食べている様に、幸せそうに微笑んだ。
「し、き、君……？」
口に含んだ飴の甘さを確かめるように、言葉にした。
「シキ君って、絵馬ちゃんの……」
「奥津城絵馬は、僕の……」
微笑みが突然、まるで不治の病を宣告されたような憂鬱（ゆううつ）な表情になってしまった。続きを口にしようとして突然俯いて黙った。それでも私は黙って待っていると、顔を上げて口を動かした。
そして、シキ君が声を出そうとしてた瞬間、
「あやめ！」
悲鳴に似た叫び声が遮った。

声を辿って視線を移す。土蔵のそばに、絵馬ちゃんがいた。
制服にウエスタンブーツの見慣れた装いだけど、その表情は初めて見る。苛立ちを露(あらわ)にし、私達を威嚇している様に睨んでいる。
「え、ま……ちゃん？」
本当に絵馬ちゃんなのか疑ってしまうほど、別人のように怒りを露わにしている。
「お、姉ちゃん……」
「え、……」
シキ君のつぶやき声。それに気を取られてると、
「あやめ！」
絵馬ちゃんが走り出し、向かってきた。
見た事のない恐ろしい形相。
鬼気迫る眼光に睨まれて、私は動けず、
「離れて！」
助走の勢いをそのままぶつける様に、
絵馬ちゃんがシキ君を蹴り飛ばした。
突然の理不尽な暴力。
小さく細いシキ君の身体が、風に吹き飛ばされた枯葉のように、飛ばされ少し転がって停止。
「シキ君！」

金縛りが溶け、私は立ち上がってシキ君に駆けようとしたが腕を掴まれた。
「近づちゃダメ！」
子供を叱りつける母親のように、絵馬ちゃんが怒鳴る。
「でも…なんで？　どうして、あんなこと……」
「いいから。あやめ離れて」
強引に私の腕を引っぱって、私をこの場から連れ出そうとする。強く握られてた腕が痛かった。でも、それよりも絵馬ちゃんに蹴飛ばされて倒れたままのシキ君が心配だった。
「絵馬ちゃん……」
呼んでも振り向かってはくれない。
「ねぇ、絵馬ちゃん。シキ君が……」
何も言ってくれな。
長い黒髪がカーテンのように絵馬ちゃんの表情を隠す。でも苛立ちと憤りが、ひしひしと空気を媒体にして伝わってくる。
絵馬ちゃんは、怒ってる。
悪ふざけの延長みたいに怒っている様な表情を見た事があるけど、それはでも、こんなにも胸が締め付けられるような痛みをまき散らすほど、辛辣(しんらつ)なものじゃなかった。
「絵馬ちゃん！」

林道まで戻ると、私は腕を振りほどく。
絵馬ちゃんも立ち止まって振り返った。
「なに？」
絵馬ちゃんは無表情で、まるで何事も無かった様な口調で呟く。
それに驚かされて、混乱が一層膨れる。
「なにって……。どうしてあんな酷い事するの？　だってシキ君は、絵馬ちゃんの……弟じゃ、ないの？」
「私に弟なんていないわ」冷淡な声が昇る。
「でも！　さっきシキ君が、お姉ちゃんって……」
「弟なんていないわよ」
「でも！」
「あんな奴！　弟なんかじゃない！」
淡い夕日を切断するような甲高い叫び声が響き渡る。
その声に驚いたように、樹海の奥から無数の鳥の鳴き声があがる。
沈黙の中、どくん、と私の心臓が痙攣したように驚いた。
「絵馬、ちゃん……」
両手を握りしめて、淡い赤色に照らされた黒髪で表情を隠す絵馬ちゃんが、まるで私の知らない、絵馬ちゃんの姿をした別人に見えた。
「あやめ」

でも、その声は、まぎれもなく絵馬ちゃんだ。
「シキに関わらないで。お願いだから……」
顔を背ける一瞬、眩しい夕日に照らされて絵馬ちゃんの瞳が、深紅に煌めいた。妖しい色に、綺麗に煌めいた。
「どう……して？」
私を置いて歩き出す絵馬ちゃんに、すれ違う間際に私は尋ねた。
絵馬ちゃんは、足を止めゆっくりと振り返り、
「けがれるからよ」
そう、呪いを言い残した。
風が吹く。
ざわざわと不気味な樹海の呻き声にまぎれ、姿が見得ない鳥達の鳴き声と、その残響だけが、いつまでも響いているようだった。

## ２／九月十五日（水）

昨日は結局ビデオを返す事が出来なかった。それに気づいたのは家に帰ってからで、それまで、あの言葉の意味を考えていた。

絵馬ちゃんは、汚れると言った。思い出せばシキ君の白い着物は少し土や埃で汚れていた様に観えたけど、それでも、汚れるなんて酷いと思う。でも絵馬ちゃんはきっと本気だった。

翌朝、いつものようにお母さんに起こされて、いつものように、絵馬ちゃんの家へ向かった。

境内を抜ける時に、神社を見渡したけどシキ君の姿はなかった。強烈な蹴りを受けて、どうなってるか心配だった。

武家屋敷みたいな家の玄関で待っていると、寝癖がついたままの絵馬ちゃんが出て来て、おはようと云った。

それだけで、私は、すごく安心できた。

毎朝みている眠り足らなそうな表情で、ちょっと意地悪な絵馬ちゃんだったから、昨日の絵馬ちゃんの豹変が嘘のように思えた。きっと、魔が差しただけなんだろう。

お昼休み。いつものように、私と絵馬ちゃんが屋上でお弁当を食べていると、少し遅れて一之宮さんがやって来た。

昨日の事が脳裏から消えないままの少し苦しい沈黙を、一瞬で打ち壊す登場だった。

「わりぃね。こいつらに捕まってさ。ついでに連れて来たけど、良いよね」

豪快にドアを開け放たれて、まず一之宮さんが現れて、お姫様に従われた執事のように長いフランスパンを抱えた神籬君、そして鳥居くんが現れた。

思わず持ってた箸を落としかけて、つまんでいた卵を落とした。

「えぇ、構わなくてよ」絵馬ちゃんがお嬢様口調で手招きしながら、くすくすと小さく笑っている。

「だってさ。良かったな野郎ども。ほら、さっさと座りな。神籬はここ。礼慈ちゃんは、あやめの隣ね」

一之宮さんが半ば強引に、鳥居君を私の隣に座らせた。

私は半ば硬直して彼を見ていた。そして目が合う。

「悪いな。邪魔して」

鳥居君が困ったような表情で微笑んだ。

「つめ、めちょうもございませんっ」

呂律が回らず噛んでしまった。

鳥居くんがじっと私を見てる。

イヤ！　恥ずかしさに、思いっきり顔を背る。

絵馬ちゃんと一之宮さんの笑い声も聴こえた。そして神籬くんだけは、我関せずとフランスパンにかじりついていたのが、それはそれでまたすごく恥ずかしかった。

隣に鳥居君がいるせいで、ご飯が喉を通らないどころか、上手く箸が使えないほど緊張してしまった。そしてお弁当は半分近く残ってしまい、鳥居君とも話が全然出来なかった。

もしかしたら、無愛想な奴って思われたかもしれない。

だとしたら……どうしよう。

「良いじゃないの、別に。礼蕊だって寡黙純情バカなんだから」

放課後、ＨＲが終わっても机にうつぶせて悩んでいた私に、ものすごく軽い口調で絵馬ちゃんが言った。

「でも……私、黙ってると暗い人に見えるし」

「誰だってそうでしょ。それに結構喋ってたよ。下手な芸人より面白かったしさ」

「うーん、それはそれで嫌だよぅ」

「我が侭いわないの。そんなことで悩んでると日が暮れちゃって変態に襲われるわよ。小夜子がね、なんか最近変な人に付けられてる気がするとか言ってたし、多いみたいよ」

「えッ。ホント、それ？」

「さあね。私はそんな変態に関わるのゴメンだから、先に帰るね。小夜子と約束があるから」

絵馬ちゃんは鞄を担いで教室を出て行こうとする。

その前に、約束ってなに？　と尋ねたら顔だけ振り返って、人差し指を口元に添えた。

「ひ・み・ちゅ」

それだけ言い残して、教室を出て行ってしまった。

その直後に、ビデオを返さないといけない事を思い出して、急いで鞄から取り出して廊下に出ると、もう絵馬ちゃんの姿はなかった。

どんな約束があるのか分からないけど、私もビデオを返す約束をもう二日も遅れているから、学校帰りに絵馬ちゃんの家に行く事にした。

バスをつかわず散歩しながら朽木に戻って、今日はちゃんと正面から絵馬ちゃんの家を尋ねた。

いくら土地が余っている田舎だからって今時、時代劇の奉行所みたいな大きな門がある家なんて、多分ここしかないと思う。

圧倒されそうな分厚い木の門の横の勝手口から庭に入って、松の木や苔が生えた石など、純和風庭園を眺めながら正面玄関へ。

インターホンを押すと家の中から、なにかバタバタと慌て人が右往左往しているような音が聴こえた。

扉の向こうで、ひと際大きな転倒音が響いた。
「絵馬ちゃん？」
数秒待って、心配になってそっと、扉に手をかけた。
「あやめ？　ダメ！　開けちゃダメ！」
絵馬ちゃんの叫び声が私に届いた時、引き戸は滑らかに開いた。
そして扉を開くと、
「ほへぇ？」
武家屋敷にメイドがいた。
黒っぽいワンピースみたいな服の上に白いエプロン。谷間が見える程開いた胸元。フワフワに膨らんだミニスカート。頭には猫耳付きのカチューシャ。純和風住宅に不釣り合いな格好で、四つん這いになっているメイド絵馬ちゃん。
二秒。
私とメイドは視線を合わせて、沈黙。
私は扉をそっと、閉めた。
見なかったことにしよう……と。
「こら待て！　なに勝手に見なかったことにしようとしてんのよッ」
メイド絵馬ちゃんが扉をあけて出て来た。
「見たわね見たわね見たわね。見やがりましたわね、あやめさん」
赤面顔で目を見開いて、壊れかけたお嬢様口調で迫る絵馬ちゃん。
見えない拳銃を突き付けられた様に怖い。
「ご、ごめんなさい。あ、あの、ね。ビ、ビ、ビデオを、返そうとお、お、思ってわ、たし」
私は身分証明書のように慌てて鞄からビデオを取り出して提示した。決して妖しい者ではございません、と弁解する不審者みたいだ。
「ビデオに関しては、どうも。でも、この件に関しては、さて、どうしてくようか。ふふふっ……」
邪悪なオラー満ちあふれた笑みを浮けばて、十本の指を蛇のように動かして詰め寄る猫耳メイド。
メイドなのに全然お淑やかじゃない。
私の脳裏に『下克上』という文字が過った。
「あやめ。純潔を捨てる覚悟は出来ていて？」
迫る極悪メイドから、
「ごめんなさい！」
私は逃げ出した。
ダッシュ！
逃亡逃走脱兎の如し。
「ッあ、ちょっと待て！　このこと誰かに喋ったら、末代まで祟るからね！　分かった？　あやめ！」

背後からの叫び声。私は振り返る事無く、
「わっっかりました！」
叫び返して、庭を横切り竹林へ走って逃げた。
背後を気にしながら走るのを止めて、乱れた呼吸を整えていると、不意に風が吹いて竹林中にざらついた葉音と鳥の鳴き声が響いた。恐怖心を静かに引き出すような音に、また走って竹林を抜けようと足を踏み出すと、不意に、シキ君の顔が頭の中に浮かんだ。昨日、シキ君は、ここに居たと指さし言っていたのを思い出した。
進行方向を変えて竹林の奥へ、樹海の方へと歩いた。
道はない。獣道のように少し踏みならしたような道。迷わないようにあまり奥へは入らないように気をつけながら少し歩くと、白壁の土蔵が見えてきた。
近づいてよく見ると、土壁の壁には無数の亀裂が入っていた。所々剥がれた白壁。鉄の扉。錆ついた南京錠が落ちていた。私一人じゃとても開けられそうにないほど重厚な扉だけど、人一人が通り抜けられそうな隙間が開いていた。
隙間から中を覗く。中は廊下のような部屋。枯れたような空気。
見えるのは木の棚。山積みになって雪崩をおこしてる大量の本。朱色にそまった小さな神輿が入り口の近くの隅っこにあった。
高い所からの陽射しに照らされて姿を表している無数の埃。
まるでこの中だけ、何年も時間が止まっているような古ぼけた不思議な風景。何もかもが色褪せているようだった。
引き込まれる様に、扉の隙間から中に入る。
見上げるとロフトのような回廊があった。そこには神社の儀式で使う道具らしき細工が施された物が溢れてる。
見渡す限り新しい物がない。全てが何十年の歴史と埃を被っている。積み重なれている本は和書や巻物らしきものまである。
扉から道のように何も置かれていない場所を視線で辿ると、一番奥に色褪せた物ばかりの土蔵には異質なほどの白いソファが特別な存在のように置かれていた。そして、その上にダルマのように丸くなっている白い着物の子供がいた。
「シキ、君？」
静かに、この土蔵の色褪せた時間と共に眠っているようだった。
空白の床を通って近づく。シキ君はソファの上で体育座りをしている。何かに怯えている様に膝を抱きしめて、その間に顔を埋めてる。微かに呼吸の度に上下する肩。両目を包帯で覆われているせいで、眠っているのか起きているのか分からない。
ふと足下を見ると、白い着物の裾は擦れて汚れていた。
きっと昨日、絵馬ちゃんに蹴飛ばされた時に汚れたんだろう。
「……もしかして、昨日からずっとここに居たのかな」

そんな独り言に、
「はい、ずっと居ました」
突然シキ君が顔を上げた。
「きゃっ」ドタドタと音を立てて盛大に尻餅。
「大丈夫……ですか？」
「もー。起きてるなら言ってよ。ほんと、びっくりしたぁ」
「ごめんなさい。誰が入って来たのか分からなくて」
「あ、そうか。そうだよね。ごめんね、黙って入って」
「いえ。……怪我、ないですか？」
「ありがと、大丈夫」
私は、そのままシキ君の正面に座った。
シキ君はまったく動かずソファの上で体育座りのまま。
「いつ私だって分かったの？　声かけた時？」
「いいえ。足音と呼吸の音で分かりました」
「えっ。それだけで分かるの？」
「はい。でもそれよりも、匂いで分かりました」
「えっ……。私、そんなに……臭い？」
すごく恥ずかしくなって、自分の体臭や吐息を嗅いでみた。少し、うん、ほんの少し臭うかもしれないけど、臭くはないはず。もしかして体育で、汗をかいたからかな。

そんな乙女の体臭を気にしていたら、笑い声が聞こえた。
「いえ、とても甘い匂い。ふわふわした良い匂いです」
シキ君が、微かに顔を傾けて笑った。頭上から差し込めるキツネ色の陽射しに照らされた顔は、大人びた口調とは反対に、とても幼く写る。見ていると、つられて私までなんだか頬が緩んでしまう無垢な笑顔。こんな顔で笑えるこの子が、どうして汚れているなんて、言えるんだろう。
「ねぇ。シキ君は、どうして、ここに居るの？」
訊くと、シキ君の笑顔は消沈していくように無くなり、無表情になってしまった。悲しんでいるのか、それとも怒っているのか、それすらも、目が隠れてるだけで分からないなんて。
「それは、僕が……」
シキ君が口を開いた途端、聞き覚えのある虫の鳴き声が遮った。
「えぇっと……。お弁当の残りで良かったら、食べる？」
尋ねると、即答でシキ君は頷いた。
もしかして、昨日あげた今川焼以外なにも食べてないのかな、と思うほど素早い決断だった。
鞄（かばん）からお弁当箱を取り出して箸と一緒に渡すと、ぱくぱくと流し込む様に食べだした。何度か箸が空振りするけど、とても目が見えないとは思えないほぢ上手に食べている。

「ねぇ。もしかして目、見えてるの？」
その箸使いに感心しつつ、不思議に思って尋ねてみると、やっぱりシキ君は首を横に振った。
「心の眼です」
箸を止めてぽつりと平坦な口調で冗談か本気か分からないことを呟いた。あまり深く聞かない方が無難だと判断しよう。
「美味しい？」
忙しそうに箸を動かすシキ君は、頷いた。
「でも、嫌じゃない？　ひとの食べ残しを食べるのって…」
「嫌だったんですか？　……返しましょうか」
「ううん。私は嫌じゃないよ、いいよ食べて」
差し出した弁当箱を微笑みながら口元に戻した。
「私は嫌じゃないんだけどね。シキ君は嫌じゃない？　ほら、なんだか恥ずかしいでしょ、そういうの？」
リスみたいに頬に溜めこみ、それを一気に喉に飲み込んで、シキ君はゆっくり首を横に振った。
「恥ずかしい、事なんですか？」
「うぅん、あまりしたくないかな。みんなに何言われるか分からないもん」
「みんなって、誰ですか？」
「みんなって、それは……」
もしも、私が教室で今のシキ君みたいな事をしていたらと想像した。するとクラスメイトがこそこそと笑う声とひそひそと馬鹿にするような陰口が聴こえてきそう。
「クラスのみんな、かな……」
私は、多分そんな幾つもの小さな声にびくびくしながら生きているのかな。仲間はずれが怖いから、一人が怖いから、周りに合わせて足並みそろえなきゃ、きっとこんなにも平和な気持ちにはなれないほど私は弱い。
でも、
「僕にはいません。そのみんなが」
シキ君が、それは大した事じゃないよ言ってるように、びっくりするほど飄々（ひょうひょう）と、それでいて堂々としている。
「僕は、ここから出られませんから」
空っぽになったお弁当箱を差し出して、ありがとうと言うと、その自然さがまるで、今の言葉がシキ君にとって当たり前の事のように聴こえてしまう。だから、私には胸が痛くなるほど悲しく耳の奥に残ってしまう。
「どうして、出られないの？」
私の視線が、シキ君から離れない。

「僕にもよくわかりません。でも、僕は外に出てはいけない。だから、外に出たら駄目なのです。僕は……ケガれ、だから」
シキ君は、怯える様に膝を抱えて空に向かって呟いた。
とても無垢な音なのに、汚れてると言う。
とても無垢な微笑みを、汚れと彼は言う。
「どうして……？　シキ君、ぜんぜん汚れてないよ」
私はハッキリと教えてあげた。
私の目に写るシキ君は、純白の子供なんだから。
汚れてなんていない、そう教えてあげたかった。
汚れてるなんて、自分を貶して欲しくなかった。
「ありがとございます。でも、どんなに否定しても、無かった事になんかできない事もあります。運命……ともいうのかもしれないけど。ケガれる、それが僕の存在みたいなんです。だから……」
空に向いていた隠れた目が、私に向けられた瞬間、
「僕に関わると。あやめちゃん、ケガレちゃうよ」
悪い風邪にかかったような悪寒となって、私の全身をすり抜けた。
幼い声に、私の呼吸は、一瞬、止まった。
「今、怖いと思いましたね」
包帯に覆われた目で、私の心を見透かしように悪戯っぽい笑みを浮かべて呟く。
その表情は、まるで絵馬ちゃんみたいだった。
「ううん。怖く、ないよ」
裏返った声だけど、嘘なんかじゃない。
「だって、友達でしょ」
友達だから、怖いなんて思わない。
汚れるなんて思わない。
嫌いになるはずがない。
たった二日だけだけど私は、シキ君のこと、絵馬ちゃんと同じ様に友達だと思ってる。それも嘘じゃない。
「……また、友達が増えました」
シキ君の口元が微かに揺るんで、目線が私の頭上を通り抜ける。
私は、中腰になってシキ君の目線に合わせた。
「うん。私、友達を恐がったりしないよ。それに、何かあったら、大した事できないけど助けてあげる。あ、またお菓子、持って来てあげるね」
「本当ですか？」
「うん。友達は裏切りません。約束ね」
「はい。……約束、です」
シキ君が小指を差し出すように伸ばした。私も小指を伸ばして握手するように指切りをした。

指を離して一息するように見上げると、天井の小窓の向こうは暗くなり始めていた。あまり遅く帰るとお母さん達が心配するかもしれないから私は、また来るね、と言って蔵を出た。

扉の処で振り返ると、シキ君は立ち上がって手を振ってくれている。その画が、この土蔵だけが半世紀ぐらい時間が止まっているように思えるほど幻想的だった。

竹の笹の隙間から覗ける空は、淡い青紫のグラデーションに彩られ、これからこの竹林の闇と同化してしまうと感じた。

竹林を抜けて、神社の境内に出る。

するとそこに、絵馬ちゃんが仁王立ちで待ち伏せていた。

メイド服ではなくて半袖のラフな格好で、いつも履いているウエスタンブーツ。手には、箱らしきもの包みを持っていた。

表情が窺(うかが)えるほど近づくと、絵馬ちゃんは威嚇するように私を睨んでいるのが分かって、また怒鳴られると思って身構えてしまう。

「あやめ。シキと会ってたんでしょ」

口調は穏やか。でも、刺々しい声。

私は躊躇(ためら)いながら頷いた。

すると絵馬ちゃんは大きなため息をついて、呆れたと言っているような目で私を見た。

「昨日、私が言ったこと覚えてる？」

「覚えてる、よ……」

覚えてる、だから忘れられなかった。

どうして、あんなにまでシキ君に冷たくするのか。どうして、汚れてるなんて言えるのか。それが理解できなかったから、消化できずに覚えていた。

「ねぇ。なんで絵馬ちゃん、あんな事言ったの？　シキ君は、絵馬ちゃんの、おとう――――」

「違うわよ」

魔法のようにその他の音をかき消す攻撃的な声が遮った。

「これ以上アイツには関わらないで。あやめのためよ」

「なんで？　心配してくるのは嬉しいけど……、でもっ」

「あやめ」

今度は柔らかな声が遮った。

沈黙は、整われる前に破られる。

「忠告が分かり辛いならハッキリ言う。アイツはね――――」

冷たい風が迷い込んだ。

「シキは、人殺しなのよ」

冷たい声が突き刺さる。

たった一言の言葉を理解するのに酷く時間がかかった。
テレビの向こうでは聞き慣れた言葉。私の身近にはない言葉。その意味を飲み込んで理解するまでに、風は竹林を抜け乱雑な残響そのままに沈黙した。
自分の顔が弛緩してるのが分かった。
絵馬ちゃんの顔を見ると、今の言葉が嘘でも冗談でもないことは一目瞭然。鋭利な眼差しを私に向け、言葉通りの意味よと訴えているようだった。
「う・そ、だよね」
私は訊いてしまった。そうであって欲しいとお願いしたんだ。
でも、絵馬ちゃんは長い黒髪が乱れるほど首を横に振った。
「嘘じゃないわよ。シキは、人を殺しているの。シキが……、誰が望む望まない関係なくアイツは人を殺す。殺人鬼なのよ。生きているのなら誰であろうと殺しちゃう殺戮そのものが、シキよ。私のお母さんとお父さんはね、ずっと前に殺されてるのよ、アイツに」
絵馬ちゃんは、目を瞑るように俯いて、竹林の方へ顔を向けた。
「だから閉じこめてるの。ずっと、死ぬまで閉じこめておかないと、関わる人間すべて殺されちゃうのから。これ以上、誰も死なないように、誰も殺されないように、閉じこめて隠してるのよ」
詠うように葉音と共に漂う。

絵馬ちゃんの声は、まるで硬く結晶化されたように厳しかった。揺らぎなんて一切ない意思をそのまま、声にしたように悠然としている。
「そんな……。そんな、人殺しなんて、そんなのうそ……」
脳裏を過ぎる無垢な笑み。真似ができない、真似るなんて汚らわしいほどの純白な笑みを浮かべるシキ君の姿が浮かぶ。触れた小指の暖かさも残ってる。あの大人びた口調で話す幼い声が鼓膜に染みついている。温もりも一緒に残っている。白い子供。純白そのものの純粋で無邪気な子供。
それがどうして、人殺しなんて……、信じられない。
「あやめ。シキに関わると殺されるわよ」
それでもいいの、と絵馬ちゃんの険しい表情が悲しそうに萎んでいく。刺々しさなんてもうない。伝わってくるのは泣き声みたいな震える声。心配してくれてる、それが伝わってくる。感じられる。場違いなほど頬が緩んで、息が漏れる。
絵馬ちゃんは、友達だ。
互いに言葉にしなくても、感じられる。
それが嬉しくて、絵馬ちゃんの言葉を受け止めて答えたいと思う。
「でも、シキ君も友達だから」
だから、シキ君との約束も守りたい。

「ごめんね。でも、大丈夫だよ。だって絵馬ちゃんが心配してくれるから、私、絶対に死んだりしないよ。約束する」
シキ君の真似して、小指を突き出した。
絵馬ちゃんが呆れた様な溜息をついた。
「なんでこうも、我が侭馬鹿ばっかりのかしらね」
呆れはてて降参、と言いながら小指を結ぶ。
「もう良いよ。あやめの命だもん。好きにすると良いわ。でも、二つだけ約束して」
小指を絡ませたまま、絵馬ちゃんはゆっくりと言った。
「一つ。シキの事は他言無用。絶対に、誰にも話さない、誰にも聞かれたりしても駄目。それともう一つ。これはあやめの命に関わるからよく聴いて」
絵馬ちゃんの小指が、ぎゅっと私の小指を握る。
「シキの眼の包帯は、絶対に外さない。
シキの眼を見たら、死ぬわよ」
まるで呪文。
耳元で、鼓膜に刻み込む様に囁き。
「どれか一つでも破ったら、祟るからね」
一瞬過った巨大な影の中。
絵馬ちゃんは妖しく微笑んで、そっと指を離した。

儀式が終わった様に重苦しい沈黙だけを残して、絵馬ちゃんはざわめく竹林の中へと消えて行った。
樹海全体が揺れているような不気味な風の音。
まるで、立ち去れと忠告するような鴉の鳴き声。
急に悪寒がして、私は急いで神社を去った。
その前にもう一度、絵馬ちゃんが消えた竹林を見た。

◇

陽が落ち切る前に帰宅すると、玄関にはパパの靴があった。いつもはもっと遅くに帰ってくるのに、今日は珍しく早く帰っている。
こんな日は、お母さんの機嫌が良い。
リビングに入ろうとすると、廊下までテレビの音が漏れていた。
別段不思議な事じゃないから、私は気にせずにリビングに入った。
「ただいま」
言い慣れた言葉に、返ってくる言葉はなかった。
そして、次の言葉も出なかった。
その光景に口が閉じた。

『……妃真河村(ひまがむら)山中で、白骨死体が発見されました』
ソファに、お母さんとおばあちゃん座っていた。
食い入るようにテレビを見ている。
それは別段おかしくないし、特別な事じゃないけど、二人の表情は、何か怯えている様に顔を歪んでいた。
だから、私も気になってテレビの画面を覗き込んだ。
「白骨死体だって、怖いね。妃真河村って、近くだよね」
きっと、そのニュースが近隣の村で起きた事件を伝えているから、お母さんもお婆ちゃんも不安になってるだけだと思った。
私も死体とか殺人とか、そんなテレビで流れる事件は、遠く離れた所だけで起きているような気がしていたから、少し驚いた。
『死体は、鉄製の箱に入った状態で発見され、警察は身元の確認を急ぐと共に、死体遺棄と殺人についても捜査をする模様で……』
私もソファに座って、異様なニュースを聴いた。
「箱に入ってたなんて、なんでだろうね」
訊いてみたけど、お母さんは黙ってテレビを睨む様に見て、お婆ちゃんはずっと拝むように両手を合わせていた。
『なお、八年前に隣町の伏木町で起った”同時多発変死事件“との関連性についても捜査は……』
聞き慣れた町の名前と、見慣れない言葉の羅列がテレビ画面に写り、機械のようなアナウンサの声がそれを音にして、このリビングに響いた。
「伏木町って、ここだよね。でも、え、変死事件って……。お母さん、知ってる？」
お母さんは答えてくれない。黙ったままソファから立ち上がってキッチンへ歩いて行く。
お婆ちゃんは怯えた様子で手を合わせて頭を伏せて何かぶつぶつと呟いている。
「ねぇ、お婆ちゃん……」
テレビ画面は、もう賑やかな子供達の運動会の映像を流しているのに、それさえ恐ろしい映像の様に、お婆ちゃんは小さな体を丸めて、テレビを拝んでいる。
そして、ゆっくりと顔をあげて、
「――祟りじゃよ」
呪う様に呟いた。
「祟りじゃ。また、祟りが起るんだよ。……また、ヤタガラス様の祟りが起きる前兆(ぜんちょう)なんだよこれは……あぁぁぁっぁ」
呻(うめ)き声をあげながら、小さな身体を震わせながら、すり切れてしまいそうな程激しく両手を重ねて摩る。

「そんな……、祟りなんて。ある訳ない、よ」
そんなの迷信だもん。冗談でしかもう誰も言わないんだから、誰も信じてない。祟りなんてない。神様は人殺しなんてしない。神様って、人を守ってくれるものでしょ。
「祟りなんかじゃないよ」
少しでもお婆ちゃんの不安が拭えたらと思って、笑顔を浮かべながら優しく声をかけたら
「祟りなんじゃよ！」叫び声が拒絶した。
鼓膜を切り裂くような甲高い怒鳴り声。
いつも穏やかで優しいお婆ちゃんとは違う人の声のよう。すごい剣幕で、祟りんだよ、と私に泣き叫ぶ様に言う。
凍り付いた様な耳鳴。
「これは祟りんだよ！　祟りがあったんじゃよ！　また……、また、祟りが起るんだよ、あぁぁぁぁっぁぁぁ……。八年前にも、おじいさんや」
「母さん！」
お婆ちゃんの叫び声を、お母さんの悲鳴のような声が遮った。
耳鳴りを伴う沈黙。
私は口を開くことも出来ずただ座っているだけで、テレビから無神経なアナウンサの声だけが聴こえていた。

「あやめ。もうすぐ夕飯だから、宗一郎さん呼んで来てちょうだい」
平坦な口調でお母さんが言う。
「う、……うん。分かった……」
やっと声を出して、自分の心臓の鼓動が全身に響くほど動揺してたんだて気づいた。
私は言われるままに、二階のパパの部屋へ向かった。ドアをノックすると、パパが直ぐに部屋から出て来た。私はもうすぐご飯だよ、と伝えると、パパは頷いて私の顔をじっと見つめた。
「あやめちゃん、どうかした？　顔色悪いけど、気分でも悪い？」
「う、うん。……ちょっと、気持ち悪い、かな」
まだ心臓がどきどきしてる。声を出すたびに息苦しさを感じた。
「それはいけない。ちょっと待ってなさい」
パパはそう言って一度部屋に戻ると、小さなガラス瓶を手にもって出て来た。
「これは、気分が悪くなった時に飲むと、すぐによくなるから。毎日飲んでると嫌なことなんてなくなるよ。あやめちゃんにあげよう。実はパパもね、お母さんに怒られる度に飲んでいるんだよ」
パパは微笑んで、白いカプセルが入った瓶を私に渡した。
「飲んでみなさい。楽になるから」
私は直ぐに一錠取り出して、飲み込んだ。

「さぁ、行こうか」
そして、パパと一緒にリビングに戻った。
しばらくすると身体が、暖かくなる。ふわりと軽くなる。なんだか、どうしてだろう気持ちが纏まる。バラバラになった心が、整って広がっていく感じがする。
テレビの電源は切られて、いつもの明るい照明が灯る食卓が有った。お母さん、お婆ちゃん、パパ、私。家族が囲む暖かい料理から昇る湯気のように、何もないなかったんだろうと思えてしまう。
だって、平凡だけど幸せな家庭に、祟りや殺人なんて言葉は、テレビの向こうにしかないんだから。
きっと、時々悲しいこともあるけど幸せな家族でいられる、そう疑うことも信じることもしないほど、当たり前だと思う。

## 3／九月十六日（木）

「おはよう」
いつもより少し早く目が覚めた。睡眠の気怠さ残ったまま、習慣でベッドから這い出てなんとかリビングまで下りると、まだおばあちゃんが朝食を食べてる頃なのに、姿が見えなかった。
「早くから出かけていないわよ。あやめ、早く起きたなら、ちょっと手伝ってちょうだい」
「う……うん」
一日一善のつもりで寝たりない身体で手伝って、遅刻ギリギリの時に味わえない目玉焼きをゆっくりと平らげて、少し余裕をもって家を出ようとしたら、玄関でパパに呼び止められた。
「あやめちゃん。昨日あげた薬、ちゃんと持ってる？」
「え、あ、うん。持ってるよ」
昨日パパから貰った薬が入っているガラス瓶は鞄の中に入れている。そう、パパに言ったら、安堵したように頷いた。
「いいかい、少しでも気分が悪くなったら我慢せずに飲みなさい。飲み続けたら楽になるから。いいね」

言われたとおりに、薬を一錠飲み込んでから家を出て、代わり替えのしない風景と小鳥のさえずりを聴きながら、神社へ向かった。

まだ緑に染まっている木々のトンネルと鳥居を潜って、石段を登り切り直前、境内の様子が眼に入った途端、足がすくんだ。

突然飛び込んできた光景。知らない光景が広がっていた。

「え、……」

群がる人。

念仏のように連ねる呟き。

無人の拝殿の前で、皺に覆われた手を合わせ恐々と拝んでいる人の群れ。十人近くいる人の群れ。それはすべて、お年寄りばかり。

賽銭箱の前で、代わる代わるに鈴を慣らしては、柏手を打って何度も頭をさげて口々に「ヤタガラス様」と呟いては拝み続けている。

妄信的に熱心で、盲目的に我武者らに、見えない何かを恐れて、見えない何かを拝んでいた。

「なに、これ……？」

異様な光景に圧倒されて、すくんだ足は今にも崩れて後ろへ落ちてしまいそう。理性が総動員して冷静とバランスを保とうと躍起になって、それを他人事のように、あと数段残したまま階段の途中で足を止めたまま、息を呑んでそれを見ていた。

通い慣れた静かな神社が、なくなってしまっている。

まるで違う場所に迷い込んでしまった様な戸惑いが寒気を誘う。

そして境内の入り口で立ちすくんでいると、私の横を三人のお婆さんが通り抜けて行った。まるで私が存在していないかのように、一瞥もくれずに、いそいそと拝殿へ歩いていく。

気持ち悪い。

清々しく少し冷たい空気が、ここだけ淀んで汚れてしまっているかのような気がした。

私は、ぐっと身体に力を入れて、なるべくここの空気を吸わないように呼吸を止めた。そのまま、境内を走り抜けて竹林へ向かった。

途中、参拝者の中に、お婆ちゃんが居た様な気がしたけど振り返らない。

ねっとりとこびり着く陰湿な声。

竹林の中を走る。

頭上から鳥の羽ばたき。

耳鳴りに似た泣き声が、私を追いかけてくる。

呼吸する暇も惜しんで走った。

心細くて、早く、少しでも早く絵馬ちゃんに会って、そうすれば、きっと安心だと思って走った。

林道を走り抜けて、滑り込む様に庭に辿り着き、勢いを落とすことと無く玄関まで走った。そしてインターホンを鳴らした。

何度も鳴らした。
ボタンを押した。何度も押した。
硝子戸を叩いた。何度も叩いた。
「絵馬ちゃん！　絵馬ちゃん！」
何度も、何度も、叫んだ。
けど、家の中からはまったく音がしなかった。まるで、無人。
「うそ。なんで……」
泣きそうになりながらも、絵馬ちゃんを呼んだ。もしかして、まだ寝ているのかもしれないから、大きな声で呼んだ。
けど、絵馬ちゃんは出てこない。
竹林から聴こえてくる鳥の鳴き声。そして、鼓膜に厭(いや)らしく染み付いた陰湿な声が、私を追って来ているように聴こえる。
陰湿な音から逃げる様に、バス停へ走った。
絵馬ちゃんを置き去りにしてしまうような気がして胸が痛い。
ちょうどバスが来たから、それに駆け込む。それでようやく、鳥の鳴き声も神社からの声も聴こえなくなって、ほっとすると、涙が流れた。まるで、悪い夢を見ていた様に、神社の光景が瞼の裏に焼き付いて離れない。
学校に着く前に、私は人目をはばかって、少し、悪夢を洗い流す様に泣いた。

教室に入ると、絵馬ちゃんの席には鞄だけが置いてあって、持ち主の姿は無かった。授業開始寸前に教室に戻って来て、授業が終わると先生より早く教室を出て行ってしまう。なんだか、人を避けているように、誰かと話すのも目を合わすのも、頑に拒んでいるようだった。
お昼休みに、いつものように私と一之宮さんで、絵馬ちゃんを誘って屋上でお昼を食べた。声をかけた時、なんだか機嫌が悪そうだったけど、それを一之宮さんが力づくで屋上まで連れて来てくれた。
そのせいかもしれないけど、屋上でお弁当を食べる間、絵馬ちゃんは一言も喋らず、黙々と箸を動かしているばかり。一之宮さんが冗談を言っても、まったく笑いもせず、冷やかすこともない。
「あぁっもう！　暗い、ジメジメ暗い。何？　何かあったの？　今日の絵馬、すっごく暗いし、正直とっつきにくいよ！」
我慢の限界と、一之宮さんがふて腐れたように声を荒げて文句を言うと、絵馬ちゃんは黙ってまだ食べてる途中の弁当箱を閉じて、立ち上がった。
「うるさい……。ほっといて。私は独りになりたいのよ」
冷めた声を靡(なび)かせて、私達から離れて行く。
「何だよ。だったらずっと一人でいればいいじゃん！」
一之宮さんも立ち上がった。

それを無視するように絵馬ちゃんは、屋上から出て行った。
「絵馬なんか、独りぼっちになっちまえ！」
拗ねたような声も多分、聴こえているはずなのに、絵馬ちゃんは私達を避ける様に離れてしまった。
苛々をまき散らす程どうして不機嫌なのか分からないけど、その姿を見ていると、私まで独りぼっちになってしまうんじゃないかと、悲しくなってしまう。
だから、私は弁当を食べ終えると、直ぐに教室に戻った。
教室には幾つかなグループが出来て、話をしたり食事をしたりと残り少ない昼休みを潰していた。そして窓際の席で、絵馬ちゃんは独りで無愛想に頬杖をついて目を瞑っていた。クラス全体が、絵馬ちゃんを遠ざけているようにも観えた。ひそひそと声があちこちから聴こえる。どれも話のすべてを聞き取ることができない小さな声。
だけど『変死』『神社』『八年前』『箱』『祟り』という意味がわからない単語がはっきりと聴こえた。
小さな声で次々と、陰湿な音で流れる。
まるで絵馬ちゃんを呪っているみたいな声が漂う。
一瞬、今朝のことを思い出して、私は教室から逃げ出した。
授業が始まる直前に戻ると、そこはいつもの教室。
厭な声はもうなくて、知っている顔ばかりが同じ服で、決められて席について揃った様に同じ姿勢をしている。それでも、まるで絵馬ちゃんの席だけ切り取られた様に私には写った。
放課後、絵馬ちゃんの姿は気づいたらなかった。
誰だって機嫌が悪い日や苛々する時があるよね。それがずっと続くことなんてないから、きっと、明日になればいつもみたいに喋ったりできると期待しながら、私も帰ることにした。
校舎を出て校庭を通り抜けようとした時。
「待ってー。榊、ちょっと待ってー」
声に振り返ると、少し離れた場所から一之宮さんが駆け寄って来た。制服じゃなくて体操服姿。きっと部活の都中なんだろうな。陸上部のマネージャだってはず。
「榊、今から帰るの？」
走って来たのに、まったく息を切らさない一之宮さん。実はマネージャよりも選手の方が向いてるんじゃないかな。
「うん。そうだけど……。一之宮さんは、部活？」
「そう、部活。でね、でね。榊、いま暇？」
「別に忙しくはないけど……何？」
「実はね、ちょっと手を貸して欲しいなーって思って。お願い。ちょっとあれ運ぶの手伝って欲しいの」

一之宮さんが指差したのは、段ボールと赤いコーン。
「あれをね、倉庫に持って行って欲しいんだ。私、ちょっと先生に呼ばれてるからさ。ほら、神籬がいるでしょ。アイツに渡してくればいいから」
今度は、グランドの端にある倉庫を指差した。そこには細くて背の高い体操服姿の男子が、両脇に段ボールを抱えて倉庫に向かっていた。
「うん、いいけど……」
急いで帰る用事もないから引き受けると、一之宮さんは急いで校舎に入って行った。
そして私は、段ボールを持ち上げようとしたら、
「ぎゃっ！」
転びそうになった。
「何これ！　なにが入ってるの？」
見た目に騙された重さ。
段ボールの中身を確かめると、鉄の板がぎっしり詰まっていた。
さー・ぎー・だーッ。
「もうーこんなの持てっこないよ……って、あれ？　っは」
運搬先の体育倉庫を緊急確認。細身の神籬君は片手で、今度は鉄アレイがぎっしり詰まった籠を軽々と持って歩いている。
「す、すごい。見た目に騙されちゃダメだね」
今日の教訓だ。人も箱も、見た目じゃない。
「もー。無理だよ、こんなの運ぶなんてっ」
無理と分かっていても、何度か段ボールを持ち上げようと試みたけど、膝より上へは挙らない。手のひらが真っ赤になって、腕も痺れて、もう一度やって無理なら、諦めるぞと決めて力一杯段ボールを膝の辺りまで持ち上げて、硬直。
「う、うあ、ぁぁ……あっ」重さに堪えきれず、よろけた。
倒れると思った時、暖かくて柔らかい感触がして、急に身体が軽くなった。
「大丈夫か」
振り返り見上げると、鳥居君の顔が。
私の身体の中で、熱い火花が散った。
「俺が持つ」
それだけ言って、私の手から段ボールを受け取ると両手でがっしりと掴んで持ち上げた。私は、ぼんやりとその姿を見てただけ。
「悪いな。……手、平気か」
「う、うん。……大丈夫だよ。ありがと」
「いや……。元々、俺らがやる仕事だから」
顔を背けて素っ気なく言う鳥居君。

そして足早に段ボールを持って倉庫の方へ歩き出した。私は残った赤いコーンを抱えて、後を追いかけた。
もしかして……、やっぱり嫌われてるのかな。
鳥居君は倉庫に段ボールを置いて、私が抱えていたコーンも受け取るとテキパキとそれも倉庫の中にかたづけ、振り返って倉庫の外に突っ立てる私を見て「榊……」と名前を呼んだ。
ただけなのにどきりと驚いて、返事した声が裏返ってしまった。
「榊はさ……、どんな映画が好きなんだ？」
「え……？」
「……映画が好きだって聴いたから、どんなのが好きなのかなって」
「え、あ、わ、私は…、特別これっていうのは無いんだけど……。鳥居君は？　鳥居君は、映画とか好き？」
「うん。つまらない映画が好き、かな」
頬を指でかきながら、視線を落として呟くように言う鳥居君の表情は、いつも寡黙（かもく）でクールな印象より、少し可愛いく見えた。
「事件や奇蹟や、ドラマティックな出会いとかあっても、不幸や悲劇があるのが嫌いなんだ。つまらなくても、退屈でも、幸せな日常の方が、俺は好きだな。……いや、でも……ハッピーエンドで終わるなら、どんな不幸や悲惨なことがあっても、良いかもしれない」
照れくさそうに語る鳥居君の眼が、輝いて見えた。
「どんなに辛くて、たとえ、幸せなんてなくても、最後に、笑っていられるハッピーエンドがあるなら、その時は、きっと救いがあるような気がするんだ。だからそれまでは、がんばっていこうと思える。一所懸命がんばって幸せになれないなんて、嘘だろ」
初めて、こんなに沢山、鳥居君の声を聴いた気がした。
「うん。私も、ハッピーエンドの話が、好き」
どんなに悲しいことが有っても、こんな気持ちで終われるなら、その時はきっと、幸せだと思う。
「榊……」
倉庫から出て来て、私とすれ違う間際、
「だったら笑って帰ろうぜ。嫌なことがあってもさ」
目を合わせず、そっと私の頭を撫でた。
鳥居君の手の感触が、時差をもって全身に伝わって、頭の中が真っ白になった。そして慌てて振り返ると、走り去る鳥居君の後ろ姿が、遠ざかっていく。
低い位置からの西日に照らされて朧気な輪郭を纏う鳥居君の姿を見ていたら、不思議と身体の芯まで熱くなった。

◇

鳥居君と話せた。私のことを見ていてくれた。気づいてくれていた。それだけで、なんだか嬉しくなって、今日一日の嫌なことが帳消しになった気分になる。なんだか今朝からの嫌なことから、救われた気がした。やっと笑えることが、すごく嬉しかった。

身体が軽くなった錯覚。

熱い痺れが過った。

口を閉ざして、心の中で大声で叫んだ。言葉にできない声のまま、歓喜の叫びを世界中に響かせた。

今ならフルマラソンを世界新記録で完走できそうな気がして、スキップとダッシュの中間の歩調で学校を出た。

吹き刺す木枯らしの冷たさなんか寄せ付けない程暖かいこの気持ちが冷める前に、家に帰ってそれから……そうだ、シキ君の所に行こう。どんなお菓子を持っていこうかな、なんて考えると楽しくなって、足取りが軽くなる。

そのままステップするように玄関のドアを開け、家の中に入る。

「いい加減にしてください！」

お母さんの怒鳴り声が、私を家から押し出そうとした。

一気に熱が剥ぎ取られる。

息を呑んで、そっと玄関を上がった。

「祟りなんてある訳ないでしょ！」

また怒鳴り声が聴こえた。

そして、お母さんが和室から出て来た。疲れた表情を浮かべて項(うなじ)の辺りを押さえて、何か呟いていた。玄関にいる私に気づくと、「おかえり」とだけ言って、リビングに入っていた。

私も後を追いかける様にリビングに入った。お母さんはソファに座って、両手を組んでそこに頭を置いて溜息を突いていた。そして、俯き気味の視線の先には、テーブルに広げられた薄い夕刊が広げられておいてある。

そっと近づいて声をかけるのを躊躇(ためらい)い、その新聞を見下ろした。

『箱入りの死体が発見』

その一文が大きく載ってあった。それは昨日テレビのニュースで放送されていた事件のことだろうと、私は思った。でもその文の上には『連続殺人事件か』というやや小さな文もあった。

連続……、という単語に嫌な予感がした。

私はそっと新聞を手に取って、記事の初め当たりをざっと読んだ。すると、それが昨日の事件についての記事ではないことが、最初の一行で分かった。

『十月十四日　朝、伏木町の繁華街で、女性のバラバラ死体が入った箱が発見された』

殺人事件。

箱。

連続。

その単語が私の身体に入ってきた。

ぞっとして、汚い物のように新聞紙を放り投げ、離れた。

お母さんを見ると、額を冷やす様に手をあてて、私の方を見て、元気のない微笑みを浮かべた。

「心配ないわよ。私達には関係ないもの。ただ、今……、お婆ちゃんがちょっとおかしいけど、そっとしておいてあげなさい。……前にもあったの。だから、きっとショックで、それを思い出して怯えてるだけでしょ……」

まるで自分に言い聞かせているようだった。言い終えると、お母さんは立ち上がってキッチンへ向かった。

前にも有ったって、なんの事だろう。

私だけ知らないことが、知らないでいいと言われている様に納得されている。でも、私は納得できても心配だった。

リビングを出て、お婆ちゃんがいる和室を覗いた。

すると神棚の前で、お婆ちゃんが正座をしていた。物思いに耽るように、じっと座っていた。

その光景はどこもおかしくなんてない。

だから私は和室に入って声をかけた。

でも、振り返ったお婆ちゃんの目は、見たことがないほど血走っていた。

「ひゃっ」小さな悲鳴が漏れた。身体が反射的に退いた。

「お、おば、あ……ちゃん……」必死でいつもの振る舞いをしようと声を出そうとしても、呼吸が上手くできない。

「あぁ……あやめちゃん、おかえり」

にこやかに笑って、優しく声をかけてくれるお婆ちゃん。

よく見ると、白い札のようなものを両手で挟んでいる。

「どうしたの、あやめちゃん……」

お婆ちゃんがゆっくりと立ち上がる。

お札を両手で挟んだまま。

見開いた目は、赤い。

ゆっくりと、近づいてくる。

その時、私のこの部屋の空気が気持ち悪く感じた。

淀んでいる。

腐ったような臭い。

気分が、悪い。
「あやめちゃん。……なにか嫌なことでもあったんだね」
お婆ちゃんは皺が深く刻まれた顔を顰(ひそ)めて私を観る。それは、いつもの優しいお婆ちゃんと同じ表情で、同じ声、同じ姿なのに、私は、何も言えず震えるように首を横に揺るしかできない。
「そうかい、そうかい……。怖いんだね、あやめちゃんも」
そっと、お婆ちゃんの小さな手が私の手を握った。冷たい手が、包み込む様にそっと。
「怖かったね、怖かったね、怖かったね」
上目遣いで見上げながら、繰り返し言った。そして、もう大丈夫だよ、とゆっくりと云う。
「ヤタガラス様にちゃんとお祈りすれば、怖くないよ」
ぎゅっと、手が締め付けられる。
「ほら、一緒にお参りしよ。そうすれば、祟りが起きないから、ね。大丈夫だからね、あやめちゃん……」
私を引っぱる。
引き込もうとする。
嫌な空気が充満する部屋に。
腕を、
引っぱられる。

「い、いいよ、私、そういうの、好き、じゃない、し……」
拒む。
もがく様に、身を退く。
それでも、お婆ちゃんは私を引っぱる。
引き込む。
手を握る。潰されそう。
「お願いだから、お願いだから、ね。あやめちゃんも一緒に、お願いだから、一緒に、ヤタガラス様に、お願いだから！」
千切れかけの声が、私を引き込む。
飲み込まれそうな、空気。
気持ち悪い。
「お願いだから」
お婆ちゃんが、
「良い子だから、ね」
知らない人のように、
「あやめちゃん」
見えて、
「ヤタガラス様に」
嫌な空気と一緒に襲いかかってくる。
それが、とても、

「祟られるから！」
コワクて、
コワクて、
「いやぁ！」思わず叫んで、お婆ちゃんを突き飛ばした。
大きな音をたてて畳の上に倒れて小さな体が、うぅぅ、と声を漏らしながらジッと動かない。
罪悪感が、身体の中から私を突き刺す。
心臓の鼓動が、うるさいほど騒いでいる。
不意に手が痛くなった。見ると、赤くなっている。痺れて痛い。
お婆ちゃんを助けようと動いたとき、神棚の下で黒い木彫りの鳥が、恐ろしい目で私を睨んでいた。
そしてお婆ちゃんは倒れたまま呟いた。
「ヤタガラス様、ヤタガラス様、祟らないでください、祟らないであげてください、祟るならこの老いぼれを、この子は優しい良い子なんです、ヤタガラス様ヤタガラス様、どうか、どうか」
繰り返し繰り返し、その鳥に向かって呟いてた。
私は逃げ出した。
怖かった。
とても嫌な空気が、身体の中に入ってきそうで気持ち悪い。
この家にある空気が苦しい。息苦しい。
家を飛び出した。
そして玄関を出て、乱れた呼吸を落ち着かせながら、ポケットから小瓶を取り出して薬を一錠口にした。
深呼吸をして、そのまま足早に、家から離れる。
背後から、あの黒い鳥の羽音が聞こえるから。
急いで、家から離れた。
乱れる呼吸。
ざわつく鼓動。
頭の中の砂嵐が、ざーざーと耳鳴りになる。
傾く陽射しが、執拗に肌に突き刺さる。
走った。
商店街の中、行き交う人を障害物のように避けながら。
走った。
人の声が聴こえない場所まで。
走った。
頭上から、鳥の鳴き声がする。
走った。
走り続けると、道は狭まる。
どこへ行くのか、という選択がなくなる。
だんだんと、行く場所が決まってしまう。

果てが見えない樹海。
吸い込まれる様に木々が道を開けている。
朱色の鳥居。
石段を一気に駆け上がって、夕陽に照らされ、羊膜(ようまく)を被ったように曖昧な空間、時代に取り残されたような古い神社の境内に、私は飛び込んだ。
足を止めた途端、乱れた呼吸が身体を痛めつける。惰性(だせい)で、ゆっくりと拝殿まで繋がる石畳を歩いた。
無人。静か。風もない。停滞した空気。
反射的に今朝の異様な光景が脳裏に過るけど、それも現実味がないほど閑散として、ここそのものが、私が今までいた場所とは違う世界のように、現実味が欠けている。
人の気配がないけど、人が居た残留物のような雰囲気は、色濃く残っていた。石灯籠の間を抜けて、賽銭箱の前まで来ると、呼吸は落ち着いて少し蒸し暑く感じた。
賽銭箱の中を覗くと、千円札や一万円札が引っかかっていた。お供えものらしき物が、拝殿の階段に置かれている。
少し見上げて、柵状の戸窓から拝殿の中を覗いた。
暗い。天井しか見えない。

靴を脱いで階段を二三段昇って中を覗と、仄暗い箱部屋の奥に、幽かに差し込む夕陽に照らされて、焼けこげたような黒い色の大きな鳥が、あった。
どきり、と心臓が小さな悲鳴を上げる。
脳裏に点滅する和室の鳥。畳の上に倒れたお婆ちゃん。
じっと、箱の外を睨む大きな鳥。
「ぁ……」金縛りのように、じっと、私は箱の中を見つめていた。
それだけしか、言葉を出すことも、後退りすることも出来ずに、神殿の前で立ち尽くしていた。
「八咫烏(やたがらす)だよ。それは」
唐突に背後からの声が、私の金縛りを一瞬を振りほどいた。
振り返る。
真っ白の浴衣のような着物に白い下駄、帯だけが赤い。夕陽に照らされて栗色に透ける黒髪が、微かな風に靡(なび)く。両手を袖の中に入れて悠然と、幽霊の様な幽かな気配だけ漂わせて佇むシキ君がいた。
「こんばんは、あやめちゃん」
半分包帯で覆われた顔で微笑み。からんからん、と白い下駄を鳴らしながら、私の側まで近づいて来る。
「ヤタガラスって……、あの、鳥の名前？」
私は、目線をシキ君から動かさず指を拝殿の中をさした。

するとシキ君は、歩調に合わせるように頷いて、下駄を脱いで軽やかに階段をあがって拝殿の扉に手をかけた。
「沢山だ、お供え物が。どうしちゃったんだろうね」
独り言を呟く様に薄い木の扉を左右に開けて、シキ君は、床に置かれている一升瓶や紙袋、段ボール箱を取ろうと両手をセンサのように前後左右とかざす。
私は見かねて紙袋を一つ手渡すと、ありがとうと言って紙袋と、一升瓶を持って扉の向こうへ入ろうとした。
「ねぇ、それ、どうするの？」
「お供えするんだよ」
今日のシキ君、なんだか見た目相応の子供っぽい口調だな。
「手伝おうか？」
「うん。ありがとう」微笑んで拝殿の中へ入って行った。
私は近くにあった箱を二つ持って、後に続く。
拝殿の中は、ひんやりとして湿っぽく、年季がはいった埃の臭いが漂っていた。木造で床や壁、天井、柱の木々は煤を被った様に黒光りし、編み目状の窓から入り込む夕陽から逃れる様に闇が四隅に沈殿している。学校の教室ぐらいの広さがある。奥に、一段高い畳の床があった。
右隅に太鼓、正面には足の高い木造の棚が並んでいて、お正月に和室に干し柿やお米が乗せるような、空の赤い受け皿が幾つか置いてある。畳の中央には四角い畳の座布団があって、その向こうにはまた階段があり、小さな社が見えた。
そして、神殿と社へ続く階段を隔てるように硝子戸があって、その前の棚には、翼をたたんで正面を睨む三本足の黒くて大きな鳥の銅像が鎮座していた。
「ここは拝殿で、神事を執り行ったりする場所なのです。その奥にあるのが神殿といって、ご本尊が祀られています。神殿は、神職と氏子、あとお祓いを受ける人しか入ってはいけない、神聖な場所ですよ。もっとも、形式だけなんだけどね」
シキ君はすたすたと奥へ進み一段高い畳敷きの床に上がると、手に持ったお供え物を棚の上に置いて引き返して来た。
私も迷いながらも、そこに持っていたお供え物を置くと、シキ君は両手に紙袋や箱を抱えて戻って来て、それらも棚の上に置いた。それから、畳敷きの床に立ちつくしている私の方を向いて、口元だけで笑みを作った。
「出よ、外に」
シキ君は、少し見上げるように私の顔に向いて言って、出口の方へ歩き出した。

目が見えないとは思えないほど、しっかりとした足取り。
私も、少し後ろについて外に出た。
シキ君は拝殿の外廊に座り、怯えているように両ひざを抱えるように座ったから、私も隣に腰を下ろして、廊下に足を投げ出すように座った。
「ねぇ、シキ君。八咫烏って、どんな神様なの？」
シキ君の顔を覗き込みながら尋ねた。
今まで神様なんて関心なかったけど『ヤタガラス様』という言葉がきっと、昨日からの私の周囲で起きている異変の原因だと思う。
ヤタガラス様の祟りが原因で、お婆ちゃんはおかしくなったんだ。その神様の祟りを、お婆ちゃんも今朝ここにいたお年寄りの人たちは恐れていた。異様にまで怖がっていた。どんな恐ろしい神様なのか、ほんの少し知りたかった。
「八咫烏は、神様じゃないよ」
シキ君はあっさりと、幼い声でそう言った。
「え、で、でも……さっき祀られてたでしょ。あれがヤタガラス様じゃ、ないの？」
もう一度神殿の中の方を指さして言った。けど、シキ君にはその指さす方向は見えないのに気づいて腕をおろした。
「うん。八咫烏の像だよ。でもね、神様じゃないんだ。この鳥の森神社には、神様はいないよ」
少し首を傾けて、私の方を的確に見ている。
「で、でも……。だったら八咫烏ってなに。鳥のお化け？　妖怪なの？」
私がそう訊くと、シキ君はくすくすと小さく笑って、違うよと首を横に振った。
「妖怪は森の中にいるかもね。鵺に姑獲鳥や以津真天に青鷺火とかね。でもね、八咫烏は妖怪じゃなくてね、神様の使者なんだよ」
シキ君がよく分からない言葉を言って、最後辺りだけで、ヤタガラスは妖怪じゃないってのは分かった。けど神様の使者と妖怪の違いが私には分からなかった。そしてヤタガラスがなんなのかも、まったく分からないまま。
するとシキ君は、
「少し……、昔話をしましょうか」
幼く高い声で、聞き慣れた大人びた落ち着いた口調で話し出した。
「日本神話に神武東征という話があって、それは神倭伊波礼毘古命、後の神武天皇が日向国を立ち、大和を征服して橿原宮で即位するまでの話なのです」
まだ夏の思い出を残した湿った風が私たちの軽い装飾を靡かせた。

「八咫烏は、神武天皇が熊野から大和の宇陀までの案内として、高木神が遣わせた鴉とされています。なので、八咫烏は神様ではなく神様の遣い、使者のようなものです」

物語を詠うような流暢（りゅうちょう）な語りで、聞き慣れない言葉を口にするシキ君は、どこか遠く感じた。

「八咫烏の『咫』とは『あた』という長さの単位で、約十八センチメートルぐらいのことだけど『八咫』とは『大きい』という意味なんだよ。つまり『大きい鳥』なんだ。そして、現在では八咫烏の姿は、三本足の大鴉というのが定着しているみたいで、ここにある像も三本足だけど、古事記には三本足とは書かれていないのですよ」

一息間をおいて、拝殿の方を一瞥した。

私も釣られた見た。三本足の鴉を。

「……三本足となったのは、八咫烏が単なる鳥ではなく、太陽神を意味する象徴とされているからとされるから。これは中国の『日鳥』が起源だとおもうけど。中国では古来、太陽には鴉、月には兎またはヒキガエルが棲んでいるとされ、それぞれが象徴となっているんだって。そして足が三本なのは、中国では奇数が陽、偶数が陰を表しいて、太陽の象徴である鴉が偶数の二本足では、ずれが生じるため三本足になったのかもね」

隠すように笑みを零した。

「ギリシア神話でも、太陽神の遣いとして鴉が登場しているし、古い星座絵図の中に描かれているそれは三本足をしてるらしいよ。現在、この八咫烏をシンボルとする神社もあるみたいだけど、八咫烏そのものを祀る神社はないようです。この鳥の森神社も、八咫烏を祀っている訳ではないんだ。でも、八咫烏が棲むと爺様がいってた。それはこの神社ではなく、裏の深い森の中だけど……」

空を見上げながら語り終えると、シキ君は神社の裏手の樹海を眺めるように振り向いた。つられて私もそっちの方を見たけど、細い木々と、しなやかな竹が入り乱れた樹海の入り口辺りまでしか見えなかった。

背後から、きっと森から鳥の鳴き声が聞こえた。

姿は見えないけど、その独特の高い声と響きから鴉だと分かった。八咫烏という神様の遣いなのだろう。この立派な神社ではなく、果ての知れない暗い森に棲んでいると、白い少年は言う。

「でも、さ……シキ君」

シキ君が私の方に振り返ったのを見て、私はそれを思い出した。

「今朝、この神社に沢山の人がお参りしに来てたの。なんか、八咫烏様の祟りが、どうとか、っておそれ、て……」

声にしてしまってから、後悔に口を閉じた。

祟りなんて馬鹿なことを、この神社に住んでるシキ君に訊くなんて、まるで面と向かって悪口を言ってるようなものだ。そんなの、教室の隅で絵馬ちゃんの陰口をひそひそと言い合っていた人達と同じだ。

なんだか気持ち悪くなって、ごめんね、と口にしようとしたら。

「神様は祟らないよ、あやめちゃん」

シキ君は善く響く声で私の口を閉ざした。

不敵な微笑み。それはまるで意地悪して悪戯っぽく微笑む友達に似ていた。

「参拝に来られる方にとって、この神社は象徴のようなものなのでしょう。……神様は祟りません。神様はいないのだから、ここにも、どこにも……。だから、祟りを恐れることはないのにね」

シキ君は、なぜかな、って首をかしげた。

神社に住んでいるのに神様がいないなんて、きっぱり言い捨てる事さえ、それも大した事じゃないよ、まるで、そのせいで怖い思いをした私が、馬鹿みたいと感じるほど軽やかな声だった。

「でも……、でもね、シキ君はそう言うけど。世の中には、目に見えない力があって、それがいつ自分に襲いかかってくるか分からなくて怖いと思ってる人もいるんだよ。そういう人は、だから神様にお願いして、守って、くださ、い……って……」

まるでお婆ちゃんみたいな事を言っているのに、気づいてぞっとした。まるで私まで祟りを信じているみたい。

「なんでも目で見ようとして、自分の目で見たものが正しいと勘違いしてしまうから、見えないものが怖くなるんじゃないのかな」

優しく柔らかな声。シキ君の包帯で覆われた目が、力強く私を視ているような気がした。

「それに、目に見える力というもの方が、すごく希だと思うよ。たとえば、あやめちゃんは……、重力が見えますか？」

「重力って……。見えるよ、普通。だって、雨とか落ちてくるのも見えるし、高いところから物を落としたら、分かるもん」

シキ君が、それは違うよ、と即座に否定した。

「それは重力ではなく、重力が作用した物体の挙動です。重力は見えません。その力によって起こる現象の一部を見ているだけです。だから、重力そのものの姿というのは、想像するのです。でも、あやめちゃんは重力が怖いですか？　電磁波や引力、紫外線や赤外線、ほかにも眼力や魅力なんてもあるよね。それらは目に見えない力だけど、怖いと思う？」

「う、ううん。……でも、それと祟りとは関係ないんじゃ」

いいえ、と幼い声が一瞬荘厳な声になった。

「祟りも、目に見えないモノの力なのでしょ。その力によって、誰かが怪我をしてしまったとして、人が見ることができるのは、その人が怪我をしたという結果だけ。重力は見えないけど、人には雨粒が落ちるいう結果だけが見える。ほら、似てるでしょ？」

「でも、雨粒が落ちてくるのは重力だって分かるし、雨が降るのは雨雲があるからって、そんなの分かるけど……。祟りって、分からないでしょ」

「だから、想像するんだよ。シンボル、偶像を思い描くんだ」

まるで耳元で囁かれているように善く通る声で言うと、シキ君は、軽やかに階段から飛び降りて石畳の上に音もなく着地した。

「昔は、雨を降らすのは神の業とされていたんだよ。雨が少ない時に、雨乞(あまご)いをして神様に祈っていたのです。それは雨のメカニズムが解明され理解されていない頃の話だけど、現代でも、この雨のメカニズムを理解していない人にとっては、その理解度は、その当時に人と変わりありません。ただ固有名詞が違うだけで、雨雲と神様の違い。固有名詞をどれだけ知っているか、たったそれだけの違いなんだよ。」

空を仰ぐように見えげ、力強く降り注がれる日差しを受ける。

それは受け入れるのではなく、拒絶の姿勢に見えた。

「……見えない、理解できない現象に対して、名前を与え形を与えて、手近な理由を持たせて解釈して答えを出して、理解した気になる。それがその人にとっては、その現象に対する真実になるのです。

ある現象に対して『祟り』という名を与え『三本足の鴉』いう形を与え『八咫烏が怒ったから』という理由をつけて、だから『不幸が起こったんだ』という答えにして、理解した気になる。

そして、今度は祟りを鎮めるために、この……八咫烏が棲むという神社に参拝すれば鎮まると理屈を捏造して安心するのです。

正しい間違えではない、安心できるかどうかが、納得できるかどうかが支配的なのです。ここに八咫烏が居るかどうかなんて小事、祟りの正体なんて本当はどうでもいいのですよ」

静かに語り終えると、シキ君は下駄を履いて、私の方をじっと見た。首を少し傾けて、分かりましたか、と窺っているような仕草。

私は一言も漏らさずシキ君の言葉を拾った。でも、それを理解しようとしても、小学生ぐらいの小柄で細身の幼い子が、まるで説法を唱える仙人のような落ち着いて大人びた口調で語っているのに驚いて、あっけにとられてしまい中々頭が回らない。

まるで、私の方が子供で、シキ君が大人みたい。

「うん……。なんとなく分かった、ような……。つまり、やっぱり祟りなんかないってことだよね」

「ううん。祟りはありますよ」
シキ君にきっぱりと否定された。
「え！　でもシキ君、祟りなんてないって言ったでしょ」
思わず身を乗り出すと、それでもシキ君は飄々と佇んで微笑みを浮かべていた。
「え、え、どういうこと？　矛盾してない？　なんだか、それって詐欺っぽいよ」
それぐらいお姉さんだって分かりますよ、と言って階段を下りて、シキ君を問い詰めた。
「観測者の違いだよ」
シキ君は、にっこりと微笑んだ。
「もうっ、難しい事言っても、誤魔化されないからッ」
私は靴を履いて、シキ君の正面に立つ。
目が見えなくても音や気配でも分かるのか、シキ君は顔を少し見上げるようにして、私の顔の方を向いた。そして、口を三日月のようにゆるませて笑った。
「なんだか、今日のシキ君……、元気だね」
「はい。新しい着物きれました沢山寝ましたお腹も一杯です」
嬉しさが溢れ出るような早口で笑みを絶やさずにシキ君は言った。
でも、シキ君が幸せそうに言うそれらは、私にとって普通の生活にある当たり前のものだ。
シキ君は、普段どんな生活をしているのだろう。
「ねぇシキ君。絵馬ちゃんって、お姉さんなんだよね」
「うん、そうだよ」
満面の笑み、といっても顔半分は包帯で隠れてるけど本当に嬉しさを顔で表しているように笑って頷いた。
「だったら、一緒にあの大きな屋敷に住んでるんだよね。なのに、なんで、それぐらい……」
その先の言葉の選択を間違えた、と思った。
「一緒に住んでないよ」
視線をそらすと、飄々とした感じでシキ君は答えてくれた。
「僕は、ずっとあの蔵に住んでいます。昨日言ったよ。忘れちゃったの？」
「あ……う、ううん。忘れてないよ」
ただ信じられなかっただけ。
だって家族なのに、一人だけあんな暗い場所に閉じこめられ続けられるなんて、私には信じられなかった。絵馬ちゃんは、牢屋だと言っていた。

『人殺しなのよ』
絵馬ちゃんの声が脳裏に蘇る。
それを聞いた時、私は少し怖いと思った。でも、今それを思い出しても、怖いなんて思わない。だって、目の前で無垢な笑みを浮かべているシキ君が、いるんだもん。
「だったら、ご飯とどうしてるの？　それに、いつも何してるの？」
私は、絵馬ちゃんの言葉を振り払うよう訊いた。
「ご飯は、お姉ちゃんが持って気くれます……たまに」
うわ、なんだか可哀想なぐらい表情が曇っちゃった。
「いつも、日が沈む頃に起きて、神社の掃除したり、森で遊んだりしています」
「へぇ、夜型なんだね。森で遊ぶって樹海で？　怖くないの？」
「いいえ、小さな頃からずっとそこでしか遊べませんでしたから。もう木々の一本一本の位置が頭に入っています。それに蔵にいても本を読むぐらいだけど、本は一度読めば全部頭に入っているから、つまらないんです」
「うわ、すごいね。私なんて何回教科書読み直してもぜんぜん覚えられないんだよー。うらやましいな。……って、あれ、シキ君、本読めるの？」
「はい」
「え！　どうやって。目、見えないんでしょ」
真新しい真っ白の包帯をぐるぐる巻きにされた両目。
シキ君は、絵馬ちゃんにとても似た笑みを浮かべて言った。
「心の眼です」
その言葉は、シキ君のお気に入りのようだ。
「匣、ですね」
拝殿の方を向いて、それ全体、いえ、そこから始まる光景すべてを見据えるようにして、歌うように言った。
「どういう、意味？」
「祟りです」短くそれだけ言うと、シキ君は深く息を吐いた。
「もうすぐ暗くなります。夜の森は危ない。ほら、日が傾いてるでしょ？」
西日を指さしながら言った。
太陽はとろけてしまいそうなオレンジ色の足跡を残すように沈み、東の空は淡い水色が濃い藍色に飲まれ、もうじきそれらは闇に飲み込まれてしまうだった。
「分かるの？　まさか、それも心の眼？」
「いえ。肌で感じます。それと……音です」
「音？　音って、街から聞こえる音とか、鴉の鳴き声で？」

「ここからでは、街の音は微かにしか聞こえません。鳥は、確かに夜に活動するのは少ないですね。でも……昼の音、夜の音というのがあります。ずっと……眼を閉じていれば、夜の静けさの中に、ぞわぞわとした草木の息づかいも聞こえてくるのです。……鳴き声も、そう……夜鳥の鳴き声も、森から聞こえてきますね」

シキ君は、詩を朗読するように静かに語って、私の顔の方を向いた。

「夜の森では夜鳥……妖怪達に出会ってしまう。あやめちゃんは、妖怪は嫌い？」

「嫌いか好きかで言えば、嫌い、かな……。幽霊とかお化けとかって苦手」

「だったら、なおさらだ。ここは鳥の森。ここら一帯、樹海には八咫烏、鳥の妖怪達が棲まう森。森には鳴き声が響く。それを聴いてしまったら、妖怪が現れてしまうかもしれない。とり憑かれてしまうかもしれない。祟りが羽音とともに訪れるかもしれない。だからね、あやめちゃん――――」

スキップのように下駄をならし後ろに退いて、笑みをうかべ口元を下弦の月のように歪ませ囁いた。

「夜、ここに来ちゃダメだよ。鳥達に惑わされてしまうから」

聞こえた。

風が吹いていないのに確かに、私にも一瞬、聞こえた。

昼と夜の間際の静けさの中、

森が、ぞわぞわと無数の生き物が蠢くような、

不気味に音が、私にも聞こえた。

帰らなきゃ。

家に帰らなきゃ。

夜になる前に、帰らなきゃ、と。

私はまるで、シキ君に導かれるように思った。

帰らなきゃ、家に。

家族がいる、家に。

パパと、お母さんと、お婆ちゃん……が、いる家に。

私も帰らなきゃと思って、急に悲しくなった。

どうして……。分からないけど、家に帰る事が悲しかった。

それでも、私はシキ君に笑顔で、またね、と言った。

今度はちゃんと、お菓子持ってくるね、と約束した。

## ４／九月十七日（金）

昨日の夜、お婆ちゃんの姿は見なかった。ずっと和室にこもっていたらしい。夕食は私とお母さんの二人きり。パパはお仕事。

なんだかこの家にとても嫌な空気が混じっている違和感があった。それが、なんなのか分からない。姿が見えないものが、じわじわと、私の後ろを付けてきている、そんな錯覚がする。

朝、リビングに降りるとパパとお母さんがいた。それは毎日焼き回しのように見続けた日常の光景。なのに、音がなかった。見た目は同じなのに、とても、耳鳴りがするほど静かだった。

違和感。その違和感がなんなのか朝食を食べている時に気づいた。パパはいつも朝、食事をしながら新聞を読んでいる。でも、今朝はその新聞をテレビの前のテーブルにたたんでおいてあった。それからテレビがついていなかった事だった。出かける時、私はテレビとテーブルの間を横切る間際に、新聞の一面をチラリと見てしまった。

『連続箱入り殺人事件。二人目の犠牲者！』

太い黒字で大きく、それが書かれていた。

それと似た文字を昨日、夕刊で見た気がした。でも、あれには確か、連続なんて文字はなかったはず。

二人目？　また殺された？　誰が？　どこで、この街で？

一呼吸置いて目眩がよぎった。

それをパパにもお母さんにも気づかれないように足早にリビングを出たら、お経を唱えるお婆ちゃんの声が聞こえた。どくん、と昨日の嫌な事が頭の中に浮かび上がってこようとする。それを深呼吸して押さえ込んで、家を出た。

霞む朝陽。姿が見えないところから聞こえる音の数々。ずっと先になるがあるのか分からないほど、霧に蕩けてしまった道。でも、一歩一歩の先はまだ見える。一歩一歩進めば道がまだ続いてる。少し湿っぽい空気を飲み込んで、鳥の森神社へ今日も向かう。

神社の朱色の鳥居が見えて、足を止めた。昨日の光景が逆再生されて脳裏によぎる。夕方のシキ君とのお喋り、八咫烏と祟りの話、よく分からなかったけど、言葉は覚えてる。そして朝の光景。

私は近道の神社を避けるように、遠回りして絵馬ちゃんの家へ向うことにした。少し早めに歩いてバス停が見えてくると、そこに見慣れた後ろ姿を見つけた。

「絵馬ちゃん、おはよっ」

私が声をかけると、絵馬ちゃんは振り返って、一瞬顔をしかめて小さく舌打ちした。

「まったく。なんだってそう普通に来るかな……天然？　それともまさか、嫌がらせ？」

威嚇するような鋭い目つきで寝癖のない黒髪を払いながら、地面においていた鞄の紐をウエスタンブーツのかかとに引っかけ蹴り上げて手に引き寄せ、私に背中を向けた。
「ニュース観てなかったの。事件のこと知っても、いつもうどうりですか？　うんざりするわね」
突き放すように絵馬ちゃんは家の方へ歩き出した。
待って、と引き留めても、歩みは早まるばかり。
「絵馬ちゃん、待って！　どうしたの？　何があったの？　私……なにか絵馬ちゃんの嫌がること……したかな？」
くすぐったい冷気が、体の中、喉に突き刺さる。
絵馬ちゃんが、足を止めてゆっくりと、躊躇うようにゆっくりと振り返った。
「もう、近づかないで」
それは硬くて冷たい拒絶。
その冷たさに、どくんと心臓が小さな悲鳴をあげ、体が凝固してしまったように、私は声を出すことも手を伸ばして引き留めることもできなかった。
朝霧の中へ消えていく絵馬ちゃんの長い黒髪を、見ていることしかできなかった。
どうして、という疑問が爆発しそうなほどあふれてくる。
なんで、と訊きたい人が、見えなくなってからも。
私は、絵馬ちゃんに拒絶されてしまった。
何か大切な繋がりが一つ、切れた気がした。
それはとても暖かったのに、
途切れてしまったから、すごく寒いよ。
この冷たさは、どうすれば温もりに戻っていくの？
この湿った朝霧が晴れた？
太陽が高い、遥か高い場所まで昇ったら？
手をつないだら、元に戻るの？
どうしたら……、どうして、そんなに拒むの？

◇

一時間目の授業が終わった頃、それ見計らったように絵馬ちゃんはに教室に入ってきた。
その時、私は聴いた。
一瞬の耳鳴りがするほどの静けさの中、ぞわぞわとした胸騒ぎに似たざわめき。

その時、私は見えた。
絵馬ちゃんが私だけじゃなくて、周囲すべてを拒絶していて、クラス全体が絵馬ちゃんから離れて、硬くて冷たい壁を幾つも幾つも作っているのを。
まるで空気がギシギシと音をたてながら凝結しては、陽射しに晒されて淀んでしまっていくよう。教室に居るのが苦痛。水槽の中で窒息しそうな熱帯魚になったように、早く終わってと願いながら昼休みを待った。
そして、四時限目の授業が終わってお弁当を持って屋上へ行こうとしたら、担任の先生に日直の仕事を任されて、十分ぐらい休み時間が短くなってしまった。
購買部に群がる飢えた生徒達を横目に、屋上まで息を切らせながら階段を上る。賑やかで楽しそうな喧騒に耳を傾け、それが聞こえなくなると、鉄の扉が道をふさぐ。
息を整えながら、ドアを開けようとして、
「やめろ小夜子！」
打ち鳴らすような叫び声に、体が硬直した。
静寂。
そして、足音が近づき、ドアが開け放たれた。
一之宮さんが走って出てきた。
すれ違い様に見た一之宮さんは、頬を手で押さえながら、険しい表情をしているようだった。声をかけようとしたけど、まったく私の存在に気づくそぶりもなく、そのまま走って階段を駆け下りて言ってしまう。
開け放たれたドアから、一之宮さんを呼び止める男子の声が聞こえる。覗き込むように顔を出してみると、屋上に絵馬ちゃんと鳥居君がいた
鳥居君と眼が会った。
このままだと単なるのぞき見だと思われるのも嫌だったから、恐る恐る屋上に出た。
「今、一之宮さんが……、泣いてたみたいだけど……、何かあったの？」
尋ねると、鳥居君がばつの悪そうな表情で視線を落とした。
「この女泣かせ」
隣の絵馬ちゃんが、鼻で笑ってこちらに歩いてくる。
すれ違う間際「絵馬ちゃん……」声をかけた。
でも、目も合わせず無視してそのまま屋上から出て行った。
残された私と鳥居君。
沈黙。

どうしよう……。勢いというか考えなしで出てきちゃったけど、なんだか空気が重いというか、険悪な雰囲気の残り香がするのは、なぜだろう。もしかしてものすごく場違いな存在なのかな私、と今更ながら思って オロオロ、後悔してきた。

「あっあのね、鳥居君……お昼は？」

長い沈黙に我慢できなくて、出てきた言葉はなんて平凡なものしかでなかった。撃沈。

「一緒に食べるか、榊」

「う、うん」

復活。捨てる神あれば拾ってくれる鳥居君あり。

少し冷たい風が吹く。けど雲一つない空、太陽がのびのびと日射しを降り注いでいるから、暖かい。

フェンスに寄りかかって並んで座る。

黙々と、何か話題はないかなと考えながらお弁当を食べる。私達の間にもう一人ぐらい座れそうな距離。ちらりと鳥居君を横顔を盗み見ると、ぼんやりとした眼差しを正面に向けてパンを食べていた。

線が細くて、でも力強い流線形の輪郭。凛とした目つき、熱い炭のような色の瞳。寡黙で、堅い雰囲気を漂わせているけど、そばにいると、日向の匂いがして、とても暖かい気持ちになれる。

「ん？　……榊、どうしたんだ」

「っはう。……ううん、ちょっと……」

盗み見るどころか見惚れてしまっていた。しかも驚いて何を喋っていいのかすぐに見つからない。何か、何か、ないかな。

「あ、あのね、さっき……」

さっき職員室で聴いた、夜で夜な校舎走り回る怪人三面相の話でもしようとして、余りにもそんな雰囲気じゃないでしょ、という客観力に目覚めて口ごもってしまった。

「やっぱり気になるか、榊も。奥津城のことが」

「絵馬ちゃんのこと？」

「ああ。あいつ、最近妙に人との接触を避けてる風だろ。いや、みんなが避けてるか……」

鳥居君が神妙な面持ちで、口もとに手を添えて考え込むように慎重に言葉を紡いだ。

「さっきもそれで小夜子とも喧嘩になって。まだ、ひきずってんだろうな、昔のこと」

ずっと先、私の知らない場所を遡ってみているような眼差しで、鳥居君は籠もった声で言った。

「ねぇ鳥居君。それってもしかして今起きてる事件と関係があるの？」

「え、ああ……関係は、あるかもしれないな……」

躊躇いながら言う鳥居君。

「何年か前に、この町で同じような事件があったって……、それって、絵馬ちゃんと何か関係があるの？　絵馬ちゃんの様子がおかしいのも、もしかして、そのせい、なの？」

脳裏によぎる。新聞の記事。婆ちゃんの怯えた姿。お母さんの何か隠すような言動。私の知らない、私には知らされない、私には教えてくれない、私に隠された過去。それが私の周りをどんどん怪訝(おか)しくしていく、そんな予感がする。

「鳥居君、絵馬ちゃんと昔から友達なんだよね」

「ああ。小学生ぐらいだから、まぁつきあいは長いけど……」

「だったら知ってるんだよね。昔、何があったのか。教えて！　私知りたいの……、私だけ何も知らないまま何もできないままじゃ、嫌なの。だから……教えて！」

私だけ置いてけぼり。

私だけ鈍感のままで。

私だけ蚊帳(か や)のそとに。

私だけが、関係ない。

そのままでいれば、いつかきっと、元通りに戻ってくれる。

そんな期待を他人に任せて、

私だけ何もできずに、

私だけ何もしないで、

私だけ何もしてあげれない。

友達が、家族が、辛い思いをしているのに、

私だけ何も知らないままそれを放っておくなんて、嫌だ。

「本当に、知りたいか」

私は迷うことなく頷いた。

「そうか。だったら話す。でも、俺自身その時の事件のこと詳しくしらないし真相だって……信じられないことばからいだから、上手く説明できるかどうか分からないから……」

鳥居君は、深くため息をつき、私を一瞥して空を見上げるてからゆっくりと話し出した。

「八年ぐらい前に、人が死んだんだ。殺人なのか事故なのか原因は分からないけど死んだ。沢山、同時に、連続で……」

不気味な単語の羅列が、鳥居君の口から出てくる。

釣られて浮かび上がる怖い映像を押さえ込みながら、私は深呼吸をして続きを、聴いた。

「死んだのは全員、鳥の森神社の氏子(うじこ)だったらしい。死因は心臓麻痺だとか老衰だとか衰弱死だとか言われているけど、どれも殺人でも事故でもなく自然死ってことになってるんだ。それだけなら事件にもならないんだけど……。はじめは、秋の祭りが終わって、その晩に神社の境内でその氏子が五人死んだ。それも、同時に」

「え……、同時って、一斉に……？」
その聞き慣れない言葉に私の想像はついていけなかった。連続ならまだ分かるけど、同時に、多発的に死んでいくなんて。
「五人が同時に心臓麻痺で死ぬなんて、偶然で片付けられないから事件になったんだろうな。連続殺人なのか同時多発殺人なのか、それともただの偶然な事故なのか今も分かってないんだ」
鳥居君は深呼吸するように一息間をおいた。
「当時、町は騒然としたんだ。殺人事件ってだけでも縁がないような静かな町なのに、そんな異様な事件が起きれば当たり前かもしれないけど、事件が起きた場所と、死んだ人達のこともあって一時期『八咫烏様の祟り』だってお年寄り達はパニックになったんだ」
どくん、と心臓が騒いで呼吸が一瞬止まった。
八咫烏様の祟り。
まただ。また祟りが、私の心をかき乱す。
「俺も祟りの噂を真に受けて怖かったってのは今も覚えてる。誰も口にはしなかったけど、みんな怖がってたんだよ。特に神社がある朽木村側は酷かったらしい。祟りを恐れて家に荒縄を張ったり儀式めいたお呪いをする家もあったぐらい。裏を返せば、それぐらい、異常な事件だったんだ。それは今も根強く残ってる。でも、あの事件の一番被害受けたのは、……間違いなく奥津城なんだ」
鳥居君の声が、少し低くなった。険しい口調、重くてざらざらした声。私には見ることができない鳥居君の感情が、その声に、僅かに説けているようだった。
「八年前の事件で死んだのはその五人だけじゃないんだ。……奥津城の両親も行方不明になったんだ。榊は引っ越してきたから知らないだろうけど、高校入るまで奥津城は、滅多に喋らないし笑ってるところなんて見たことないぐらい無愛想な奴だったんだ。クラスの連中も教師達もアイツのこと避けてた。すごく無口で近づきがたい奴でさ、陰湿陰険陰鬱な保健室に籠もってたんだ。想像できるか？今のアイツ見ててさ」
乾いた笑い声混じりに、鳥居君は悲痛な表情を浮かべた。
私が知ってる絵馬ちゃんは、意地悪で悪戯好きでよく私を困らせて楽しんでるけど、すぐくよくよする私と違ってすごく強くて、とても……優しい。
そう……引っ越してすぐに今の神楽高校に入学して、慣れない環境で戸惑っていた私に、最初に声をかけてくれたのも、絵馬ちゃんだった。
家も近いから、よく遊びに来てくれたり、繁華街の穴場なんて怪しいお店なんてのも教えてくれたし。ここでの私は、絵馬ちゃんと一緒の楽しい思い出しかない。

前の町での嫌な事も……忘れてしまうほど。
私にとって絵馬ちゃんは大切な友達。憧れでもある。でも、鳥居君が語る昔の絵馬ちゃんは、まったく私の知らない人のように聞こえて、絵馬ちゃんのこと何も知らなかった自分にも驚いた。
私は、友達なのに……。
「両親がいなくなったってのを抜きにしても、複雑な家らしいし、アイツはあんまりプライベートなこと喋らないから、榊が驚くのも無理もないよ。俺も、夏まで何も知らなかったんだ。……それに、もう八年前の事件だからみんな忘れてると思ったんだけど、異様な事件だったから、面白半分にオカルト話になってるし、それにまた、同じような事件が起きたから嫌が応にも思い出したんだろな、八年前の事件を」
「で、でも、今起きてる事件って、その……箱の中に死体が入っていたっていう事件でしょ。八年前の事件とは、まったく別のものじゃないの……」
「いや、そうでもないんだ。なんて言えばいいのかな、こういう説明はシキの方が得意なんだけよな」
「シ、キ？」
「え、あ、いや。……ともかく、箱が関係ある」
慌ててぶっきらぼうな口調で、鳥居君は続きを話した。
「八年前の事件で、死体の側に、なんていうのかな、神事でつかうような木箱が置かれていたらしい。それに同じ時期に黒い箱にはいった爆弾事件もあって、それから奥津城の親父さんの死体が発見されたってのが大きなコンクリートの箱の中だって話だ。死体がバラバラにされているのと他殺の違うはあるけど、似ているだよ。それに、二日前に発見されたっていう死体が入った箱、その死体ってのが……八年前に行方不明になった奥津城の……」
「もしかして、絵馬ちゃんのお母さん……？」
「たぶん、な。とにかく今回の事件も、八咫烏の祟りじゃないかって噂してる奴がいるし、昔の事件を知ってる町の連中も祟りじゃないかって信じてるらしいから、だから……」
その続きの言葉は出なかった。
まるで映画の話をしていたような言葉から、現実味を確かめるように頭の中で、鳥居君の話を反芻（はんすう）した。それでも実感が沸かないし、不気味な話なのに怖いとも思えないほど現実味が、やっぱりない。
「悪い、上手く説明できなくて。それに食事時にする話じゃなかったな」
「ううん。……ありがと、鳥居君」
それから、私たちは何も話しをしなかった。何を話していいかなんてよりも、今はこれ以上話さない方がいいと思った。

せっかく、鳥居君と一緒にいるのに、
こんなに、白々と陽射しに照らされてるのに、
どうして、憂鬱な沈黙ばかり重ねてしまうのかな。
五時限目の予鈴がなると、じゃあな、と先に鳥居君が教室の戻っていった。それでやっと、憂鬱な沈黙が消えて深く呼吸ができた。
一人だと沈黙なんて、空気と同化しているのに、もう一人いるだけで姿を現して邪魔をする。現金な奴。
でも、普段寡黙な鳥居君があんなに沢山喋るのを聞けたのが、ラッキーだと思っちゃう私も、かなり現金な奴かもしれない。

◇

放課後。まだ鳥居君の話の内容を消化できないまま、もやもやした気持ちを持ち帰るように下校。
絵馬ちゃんと、ちゃんと話しがしたい。
八年前の話を聞いても、それでも今の絵馬ちゃんしか私は知らないから、今の絵馬ちゃんが大変な思いをしているなら、少しでも、ほんの少しでも助けてあげたい。
詭弁(きべん)かもしれない、子供の綺麗事かもしれないけど、だって、友達だもん。
バスに乗る前に、絵馬ちゃんのお家へ行く決意をして、シキ君にも会おうと思って途中、屋台で鯛焼きを買った。バスに揺られ、朝の逆再生の光景を眺めて、絵馬ちゃんのお家の近くのバス停で降りた。その足で絵馬ちゃんの家へ向かう。
舗装された道から、砂利が敷き詰められた小道へ。周りには日本的な和風住宅が数軒しかなくて、一軒一軒の間は百メートルぐらい離れている。同じ町の同じ地区なのに、ここまで違う住宅事情って何だろう、と自宅とその周囲の住宅街を思い浮かべながら歩いた。
白い塀にそって正面門へ。いつも閉ざされている門の隣の勝手口から庭に入り、手入れが行き届いた綺麗な庭を眺めながら玄関のインターホンを押して、聞き耳を立てて少し待った。
無反応。
もう一度鳴らした。声もかけてみた。
無反応。
しんと静まりかえったまま。家の中からも物音も聞こえない。
「まだ、帰ってきてないのかな……」
まだ学校に残ってるのかもしれないと思って、下校したかどうかの確認ぐらいしとけばよかったと後悔した。

「ドジだな……先にシキ君のところに行こう」
いつも通っている神社からの近道を逆に歩く。いつもと同じ道、でも向かう方向が違うだけで、ほんの少し、新しいものが見えるような気がする。
腕時計で時間を確認して、空を見上げた。
まだ夕暮れには少し早い青い空。
陽射しが竹葉で千切られたように降り注がれている。
神社が見えてきた辺りで、土蔵の方へ方向転換。
きっとまだ寝てるのかなと思って、今度は驚かないぞと決意を忍ばせて蔵の中へ。扉の鍵は外れたままで、すり抜けられるだけの隙間が開いていた。
中は、色褪せてしまった物で作られているような内装。鮮やかな色はなく、どれも時間と陽射しで色落ちしているよう。それでも、扉からまっすぐ、蔵の一番奥には、色褪せたものが溢れる蔵で永遠に保たれているような純白のソファ。そこには、淡い陽射しに照らされて朧気な輪郭の白い少年が座っていた。
シキ君は、何かに怯えるように膝を抱きしめて体育座り。きっと寝ているんだなと思って、そっと音を立てずに、足下の本の山を崩さないように気をつけながら近づく。びっくりさせてやろう、と悪戯心が体の中で、ぞわぞわっと騒ぐ。
抜き足。差し足。忍び足。
目の前まで近づいて、そっと囁く。
「シーキーくんッ」
「はい」
「きゃぇ！」突然起き上がった顔に驚き尻餅。
「っ痛ーい。もっ、起きてたの」
「はい。起きました」
驚かすつもりが驚かされた。返り討ち。惨敗。残念。
「今日は、いつ気づいたの？」
「少し前、ここに入ってくる。それでいい匂いがしました」
にっこり笑顔で指さしたのは鯛焼きが入っている紙袋だった。
私もこの甘い匂いにつられて買ったけど、それでも何メートルも離れた場所から匂いを嗅ぎ取るなんて、もしかしてシキ君の鼻って犬並みなのかな。だったら敵わないよね。だって犬だもん。最強だよワンちゃん。
シキ君を驚かすのはもうあきらめよう、そう心に誓って、私は正面に座りなおして、鯛焼きを一つ取り出しシキ君に手渡した。
「はい、まだ暖かいから、おいしいよ」
「ありがとございます。いただきます」
私も鯛焼きを食べながら、シキくんの食事姿を観察。

小さな口で、急ぐように口の中に含む。まるでリスみたいに頬につめて食べている。かわいらしい姿だけど、無表情だから美味しいのか、それともただお腹がすいているだけなのか、よく分からない。美味しい？　と訊くと頷くから美味しかったらしい。

「あ。シキ君、その腕、どうしたの。怪我してる」

鯛焼きが出てこないように口を押さえるシキ君の右腕に白い包帯が巻かれていた。

「めももぎゅみゅま……怪我しました」

口の中に貯め込んだものを飲み込んで、素っ気なく答えた。

「怪我って、見ればわかるよ……。どうしたの？」

一瞬、脳裏に三日前の絵馬ちゃんの凶行が過ぎった。

「これは、……深夜、森で。襲われました」

まるで大した事がないことのように飄々と言うと、二つめの鯛焼きを今度はゆっくりと一口一口味わうように食べ出した。

「お、襲われたって……熊や猪とか、まさか、狼？」

「もしかすると、妖怪だったのかもしれませんね」

「妖怪って……そんな。冗談、だよね」

「何が冗談だと思います？」

「何って、妖怪がいるってことが」

「特に鳥の妖怪。鵺、姑獲鳥、青鷺火、それから以津真天」

「いつまで？　それも妖怪の名前なの？　なんか間抜けな名前だね」

「ですが、これは不吉な鳥なのですよ」

「どんな妖怪なの？」

妖怪が居るか居ないかの話は好きじゃないけど、妖怪の話ってだけならまだ好きなものの範囲。なんだか妖精の話してるみたいでロマンチックだしね。私は、少し近づいて座り直した。

「妖怪、以津真天。それは『いつまで。いつまで』と鳴く怪鳥で、その姿は、そうですね……」

ソファの脇に山積みになっている本の山脈から一冊。迷いもなく手にとって捲りだした。日に焼けた紙の束を紐で縛っている時代劇なんかで見るような和書。そして、私の前でその本を広げた。

「これは鳥山石燕という江戸時代の絵師が描いた『図画百鬼夜行』という妖怪絵図です。ここに以津真天という妖怪の絵があります」

シキ君が指さす絵。

建物の屋根のさらに上で、ゆらりと飛んでいる不思議な生き物。濃い霧の流れに乗り、鱗のような羽根に覆われ、鷹のような鋭い爪と虎の尾を揺らし髪が乱し、間の抜けたような顔で舌を出している、竜のような蛇のような、どちらでもない、それでも決して鳥には見えない不気味な生き物。

「これが以津真天。頭は人で、体は蛇、鋭い歯と爪を持つ五メートルを超える大きな鳥だとされています。……いつまでと鳴くことからその名がついたようですが、これに『以津真天』と記したのは、鳥山石英からでしょう。『図画百鬼夜行』に描かれた時に初めて『以津真天』が登場したみたいですから。これは当て字、鳥山石英の遊び心のようですよ」

「ふぅーん。ねぇ、隣に描いてあるのは？」

隣のページには、向かい合うように似たような構図の絵があった。猿のような猫みたいな妖怪が宙をかける姿が描かれている。

「それは、鵺です」

「これも、やっぱり妖怪なの？」

「はい。……いえ、鵺というのは鳥類図鑑にも載っている鳥の名前です。字は違いますが。この『図画百鬼夜行』にはこう記されています」

シキ君は、絵の上に描かれている達筆な文字を指でなぞりながら言った。

「鵺は深山にすめる怪鳥なり。源三位頼政、頭は猿、手足は虎、尾はくちなはのごとき異物を射おとせしに、なく声は鵺（ぬえ）に似たればとて、ぬえと名づけしならん。……そう、ここには書かれています」

「書かれていますって……よく分からないよ、なにが書いてあるか。私、古文苦手だし……」

「つまり、この鵺という妖怪は、その鳴き声が『ぬえ』に似ていたから、そう呼ばれているのです」

「え、鵺って、実際にいる鳥なの？」

「トラツグミというツグミ科の鳥で、夜に鳴くことから、夜の鳥と書いて『鵺』と呼ばれています。……元々、妖怪・鵺には名前がありませんでした。ですが、ヒューヒューとトラツグミによく似た鳴き声で鳴くとされることから、鵺と呼ばれ、それがそのまま妖怪の名前になったのです。本来は『鵺によく似た声で鳴く、得たいの知れないもの』なのですが、今では『鵺』と言えば、妖怪の名前のようになっているようですね」

「へぇー。シキ君、詳しいね。ねぇこの二つの絵って、なんだか向かい合ってる様に書いてあるけど、これって、もしかして二つの妖怪って、なんか関係してるの？　兄弟とか？」

「そうですね……、同じ妖怪なのかもしれません」

「え、でも、名前が違うし、姿だって……全然似てないよ」

「鵺と以津真天という妖怪は、鳴き声の妖怪だと思うんです。以津真天は『いつまで、いつまで』と鳴き、鵺は『ヒューヒュー』と鳴く」

「うん。でも鳴き声だって全然違うじゃん。いつまで、と、ヒューヒューって、聞き間違えることなんてないと思うよ」
「聞き間違えではなく、聴く者によってそれぞれの鳴き声も違うのでしょうね。
例えば鶏(にわとり)の鳴き声を、日本人が聞けば『コケコッコー』と聞こえ、アメリカ人が聴けば『クルックー』と聞こえるでしょう。同じ鳴き声でも聴く者が違えば鳴き声も違う。もし鶏の姿を知らない第三者に伝えれば、二つの生物がいるものと思うでしょう。……それに、決まった鳴き声しか発しないとも限りません。……九官鳥は仕込めば『いつまで、いつまで』と鳴くことができるのでしょうし、最初に九官鳥を発見した者がそれを聴けば、この鳥はそう鳴く鳥だと、認識するかもしれません。ですが『ヒューヒュー』とだって鳴けるかもしれない。それをまた別の者が聴けば、この鳥はそう鳴く鳥だと認識するかもしれない。そして同じ鳥なのに、偶々違う鳴き方をしたために、別の生物と認識されてしまう。……これはもし、声だけで判断すればの極論ですが、鵠にしたって以津真天にしたって、どちらも『姿が見えない』正体不明という事によって、鳴き声から生まれた妖怪なのです。そうですね、……おそらく鳥山石英はそういうことから、二つの妖怪を意図的に見開きにしたときに向かい合う構図にしたのでしょう……想像ですがね」
照れるような笑みを浮かべて、シキ君は本を閉じた。
「ちなみに、以津真天という妖怪は、ある事を気づかせるために、いつまでと鳴きます。いつまで、いつまで、と急かすのです。何か忘れてないか、いつまで気づかないふりをしているのか、いつまで放っておくのか、と。それはたとえば――――」
急に話しを止め、シキ君が天井を見上げた。
「どうしたの？」
声をかけても、まるで何かを探るようにじっと天井の方を向いたままソファから立ち上がったシキ君は、二階へあがるための梯子(はしご)の方へ歩き出した。床には積み重ねられた本があるのに、それにはまったくぶつかることなく歩く。
「今日はもう帰った方がいいです。……鯛焼き、ありがとございました。美味しかったです」
一度振り返って、まるで突き放すように言い残すと、シキ君は梯子を登って二階へ消えていった。
なんだか置いていかれてしまった様な気分。まだ同じ場所にいるのにシキ君の気配が途絶えてしまって、急に寂しいくなって、それでも、これ以上ここにいても仕方がないから、私は大人しく帰ることにした。

竹林の中、私は絵馬ちゃんの家にもう一度行ってみようかと思ったけど、シキ君の言葉が妙に私の気持ちを鈍らせる。

出会ったばかりの少年。幽霊みたいに儚げな雰囲気。躯(からだ)に響く幼い声。不思議な力が籠もった言葉。盲目の子供。まだ子供。

ケガレ、人殺し。

そんな言葉が嘘のように無垢で純朴、それでいて優しい。

空を見上げると雲が覆っていた。周囲は影に覆われ、影は濃度をまして闇になっていく。その中で、独りぼっち。

「あっ。怪我のこと結局はわかんないままだ。昨日の祟りのことも、またはふらかされちゃった……。もしかして、遊ばれてるのかな、私……」

幼い外見に似合わない巧みな話術。でも、年下の男の子にいいように話しの主導権握られてるのも、どうなのよ。もし、シキ君と口喧嘩したらノックアウトされるだろうな。勝てないな……あ、だから絵馬ちゃんは口じゃなくて腕でスキンシップをはかってるのかな。でもあの蹴りは家庭内暴力のレベルじゃないよね。すごかったな、絵馬ちゃんの蹴りもシキ君の打たれっぷりも。

人様の家庭事情を詮索するのはストップして、神社の方へ。

境内は無人。様々な植物が生い茂る樹海。背の高い大木の隙間から、微かに見える町並み。

一枚の絵画を貼り付けたように動くことがない景色。ただ、空を泳ぐ身軽な雲だけが、不動の大地をあざ笑うように西へと流れていた。

境内を見渡して、妖怪が住むという樹海を一瞥して、灰色の大きな鳥居の方へ向き直り、石段を下りようと歩き出した。

その時、風が吹いた。

灰色の鳥居から、町から吹き込む風。

それらを従えるように、颯爽と女性が現れた。

地獄から浮上したように石段を登り、静かな足取りで鳥居をくぐる。周囲を視線だけで見渡して、すぐに私をとらえた。

ワインレッドのスーツ。ポニーテールに纏められた髪もやや赤い。細くてしなやかな体のライン。まるで狩人であり強者だと主張しているほど鋭い眼光。そんな眼でとらえられてしまったら、私みたいな小動物は金縛りにあったように動くことができない。

赤い女性は、私の方へ近づいてくる。モデルのように優雅な足取りで、綺麗な歩き方だなと見とれた。そして、腕を伸ばせば届くぐらい近づく。

「榊あやめさんね」

上品な発音。金縛りから解放されるほど、とても優しそうな口調だった。でも、同時に驚いた。

「な、なんで、私の名前を……」
「ごめんなさい。私はこういうものよ」
上品な微笑みを浮かべて、女性はスーツの内ポケットから名刺を取り出して、それを私に渡した。
『月刊奇譚文芸　編集者　鬼束虎子』
シンプルに身分と連絡先しか書かれていない名刺。確認するように口にしながら読むと、名前のところで遮られた。
「私は、編集者の鬼束と申します。下の名前で呼ばないでね」
表情は上品な微笑みなのに、眼が私を威嚇している。
「はぁ……。雑誌の編集者さんが……どうして」
「うちは文芸雑誌なんだけど、世間で流れている怪談めいた噂や、猟奇的な事件も取材しているのよ。それで今、この町で起きている『連続箱入り殺人事件』と八年前の『連続同時多発変死事件』についての、取材しているの。だから貴女ののことも知ってるのよ」
「……なんで、私を……」
鬼束さんは、上品な笑みを崩さない。けど同時に、鋭い眼光が銃のよう私を射抜く。
体が、勝手に一歩後ろへ退いた。
この人は、怖い人だ。
仮面の様な笑顔。

「なぜって、八年前の事件の被害者の一人が、貴女の御祖父様にあたる方だからよ」
「え――――？」息が引く。
「この鳥の森神社の氏子の一人、榊元治。最初の同時多発変死事件の犠牲者の一人。ちょうど、そう……今、私たちが立っている辺りで、心臓発作を起こして死んでいたの。何か、恐ろしい者から逃げるように、恐ろしいもの見たような、驚愕の表情そのままに、ね」
「ぁっ――――」
女が指さす私の足下。
そこに……人が死んでいた。
急に怖ろしさが足を掴む。
そう思った瞬間、体がこの場から逃げだそうと動いた。
でも女の手が、私を逃がさない。
「どうやら知らなかったようね。……いえ、教えて貰ってなかったのからしら、家族から、貴女だけ」
怖い。
このひと、こわいひとだ。
嫌だ。
このひと、いやだ。
私の心を、揺らす。

怖い。
鉄仮面の微笑み。中から悪魔のような囁き。
嫌だ。
「どうしてからしら。貴女だけ、知らないの？　本当に？」
「あ、あ、わ、私……」
「確か、二年前に新しいお父様ができたのよね。もしかして、お父様も知らないのからしら。……可哀想に、貴女も知ってお父様だけ知らないなんて……」
哀れみの仮面。眼は、私を威嚇している。
私は小兎のように、動けないまま。
逃げたい。この人から、逃げたい。
でも動けない。怖くて、動けない。
喉が、もうやめて言いたいのに痺れて出ない。
やめて。
もう、やめて。
「教えて差し上げなければね」
イヤ。言わないで。
そんなこと、言わないで。
パパには、言わないで。
――なんで？

だって、
そんな事知られたら、
きっと、
「家族ですものね」
パパは……。
「やめて――――ッ！」
全身に響く。
耳鳴りと静寂。
ぞわぞわとする感触。
ざわざわと鳴る風。
一瞬で乱れた呼吸。
自分の叫び声に、きっと、私が一番驚いた。
「や、やめて……ください」
落ち着けと、私が私に囁く。
苦しい。息をするのが、とても苦しい。
「やめて欲しいのは、お父様に八年前の事を知られるの？　それとも貴女とお父様の……」
ニヒルな笑みを浮かべて、近づく女。
苦しくて、動けない私。
そっと、私の喉に、女の手が触れた。

「――――お祖母様は、お変わりないかしら」
乱暴に掴みあげられたように、浮かぶ。
和室。八咫烏。平伏す。おばあちゃん。祟り。拝む。祟り。拝む。
拝む。ヤタガラス様の祟り。拝む。一日中拝み続ける。お婆ちゃん。
お婆ちゃん？　神社。沢山の。お年寄り。参拝。群れる。拝む。祟
り。が。怖くて。拝む。ヤタガラス様。ヤタガラス様。ヤタガラス
……の、祟り。拝む。拝む。
お……が……む……。
「っぁ――――ッ」小さな悲鳴をあげてしまった。
女がますます楽しそうに笑みを深める。
「やはりな」怖い声で、つぶやいた。
そして、撫でるように頬へ手を滑らせて、女が睨んだ。
「榊あやめ。その辺り、詳しく話しても――――」
女の命令を、
「――――あやめ！」
誰かの叫び声が遮った。
聞き覚えのある声。
呪縛から解き放たれたように体が動く。
赤い女の背後に、ウエスタンブーツに制服姿の絵馬ちゃんが駆け
てきて、その勢いで足を蹴り上げた。
ブーツのつま先が、鬼束さんの顔面をねらうが、それを容易く片
手で防がれ、その状態で二人は睨み合う。
「あやめに何したの！」
絵馬ちゃんの怒号を、
「ただの世間話だ」
涼しげにあざ笑ってブーツを払う。
そして、鬼束さんが鼻で笑って石段の方へ歩き出した。
「蹴撃はまあまあだが、せっかく背後を取ったのに、叫んでは意味
がないな。未熟者」
すれ違う間際、絵馬ちゃんを嘲笑い囁いて、神社から去った。
苦虫を咬むような表情の絵馬ちゃんが、それを見届けてから、ゆっ
くり、呆然と立ちつくしている私に近づいた。
今更になって、腕が痙攣（けいれん）しているように震えていたのに気づいた。
「あやめ、大丈夫？」
「う……うん」
「本当に？　あのジェノサイドマシンガン女に何かされなかった？」
「じぇ、じぇのさ……マシンガン……」
絵馬ちゃんのネーミングセンスの抜群さに吹き出してしまった。
「ちょっと、こっちが心配してるのに、なんで笑うのよ」
頬をふくらませて、はぶてたように怒る絵馬ちゃん。

それが可笑しくて、また笑ってしまう。
「もうっ。だからなんで笑うのよ。失礼ね」
「ごめんね。だって、なんかほっとしたら、つい……」
「ま。大丈夫そうでなによりよ。いい、今度あの女に会ったら即効で逃げるのよ。世界新記録を狙うぐらいの全速力でね。でないと逃げられないから、あのサイボーグから」
「うん。がんばってみる。ありがとね、絵馬ちゃん」
「い、いいわよ別に……」
照れくさそうにつぶやいて髪を払う。境内を見渡して、塩でもまこうかしら、と憎しみをこめて呟いた。
なんだか絵馬ちゃんとこうして話すのが、すごく久しぶりに感じた。ほっとする。さっきまで怖いと思ってたことが、なかったように、安心してしまう。
「ところで、あやめ。あんた、なんでここにいるの？」
「絵馬ちゃんに会いに」
「……シキと会ってたんでしょ」
「う、うん……よく分かったね」
「その鯛焼きが入ってる紙袋で分かったわよ。私も買ったんだから」
鞄から、私が持っているのと同じ紙袋を取り出した。
「うわぁー、おそろいだ」
「おそろいだー、じゃないわよ。まったく、あんまり餌付けしないでよね。調子に乗るから」
「気をつけます」
「まぁいいわ。ほら、いくわよ」
「行くって、どこに？」
「どこって、私の家よ」
「えッ。……行ってもー、良いの？」
「私に会いに来たんでしょ。だったら、こんな所より私の部屋に行きましょ。ほら、置いていくわよ」
本当に置いていこうとするように、絵馬ちゃんは足早に歩き出して「もしかして、もう帰るの？」振り返って訊いた。
「ううん。帰りたくない」
私は走って、追いつく。
「あのね絵馬ちゃん。今日、泊めて欲しいの」
絵馬ちゃんに縋るように頼んだ。
すると、
「えぇッ。……マジデスか？」
絵馬ちゃんの珍しい口調が聴けた。

◇

友達になってかなり経つけど、私は、絵馬ちゃんの部屋に、この武家屋敷みたいな家に入るのは初めてだ。

家の中は、純和風の外観と同じように和風。畳の部屋を仕切る沢山の襖（ふすま）に綺麗な絵が描かれていたり、細かな細工が施されていたりと、私の脳裏には『華族』という言葉が点滅していた。もしかして、畳敷きの廊下や開かずの間なんてのがあるかもしれないと思って訊いてみると、絵馬ちゃんはそれを笑って否定した。

「でも、神事が出来る大広間や道場ぐらいはあるけどね」

そう言って、だらだらと古いまま生き延びた家よ、と笑った。

「道場って、一般家庭じゃ、ぐらいって言わないよ」

まず居間に案内された。重厚な木の長机があって、後はテレビと棚があるだけで、カウンター越しにキッチンが見える。広さと和風な模様と置いてある物とかを除けば、私の家のリビングとそんなに変わらない。

「ちょっと待っててね。部屋、片付けてくるから」

鬼気迫る慌てようで絵馬ちゃんは、居間から姿を消した。

その間。私はぽつんと、居間に置かれてこけし人形とにらめっこ。まるで私もこけしみたいだ、という自虐的な感想に自問自答。

遠くの方からドタバタと物音が聞こえて、それが聞こえなくなった頃に絵馬ちゃんは居間に戻ってきた。

キッチンからお茶も煎れてきて、それを向かい合うように座って二人で飲んで、しばらく無言。想像だけど、お見合いってこんな雰囲気なのかな、なんて思っていたら、絵馬ちゃんが話しかけてきた。

「それで、誰から聞いたの？」

「えっ。誰からって……、何を？」

「もちろん、八年前の事件の事。聴いたんでしょ、違う？」

さらりとした黒髪を片手で払いながら、すべてお見通しよ、と言いたげな視線で私を見る。どこか冷めた表情で硬い。

誤魔化せないと、私は観念して頷いた。

「はぁっ。やっぱりね。……それでも私に会いに来る辺り、あやめって鈍いっていうか、怖い物知らずなのかしらね」

「そんなこと、ないよ。私、幽霊とか妖怪とか怖いし……」

「幽霊とか妖怪関係のことに首つっこんでるの、自覚してる？」

「それって、何のこと？」

「そうね。シキの事や、私の家の事や、八年年前の事件の事とか。もしかして、怖い物見たさの肝試し気分？」

「ううんっ、違うよ！　……私は、ただ、絵馬ちゃんが心配で……」

「それはどうも。……でも、見ての通り私は平気よ。ただちょっと今起きてる事件のせいで、鬱陶しいことになってるだけ。それ以外は、ほんと、平気。大丈夫よ」
「本当に？」
「本当よ。心配してくれて、ありがと」
絵馬ちゃんがお茶を飲む、その間は静かで、また沈黙が出来てしまう。でも、その沈黙はとても穏やかで嫌じゃない。暖かい膜に包まれているような空気が満ちている気分だ。
「礼慈だろ」沈黙の膜を切り裂くような高い声。「八年前のこと教えたの、アイツでしょ」
尋問するような少し低い声で問い詰めてくる絵馬ちゃん。直毛の黒髪で顔を少し覆って上目遣いで迫ってくる。陰湿。
私は、髪が乱れるほど顔を横に振って否定した。
「う・そ・だー」古井戸の底から響くような陰湿な声。
「だって、アイツぐらいしか八年前のこと詳しく知ってるの、学校にいないもの。礼慈なら同情誘うようなこと言いそうだし、あの寡黙詩人馬鹿。……礼慈でしょ。ほら、正直にいいなさいよー」
「は、はい、鳥居君に教えてもらいまし、た」
貞子絵馬ちゃん、本気で怖い。
「ふぅーん。アイツがね、へぇー、普段無口なくせにお喋りな奴め。どうしてくれよう、ふっふふふ」
絵馬ちゃんの陰湿度数が上昇。今にも藁人形と五寸釘を持ち出しそうな勢いだ。このままじゃ鳥居君の命があぶない。
「でもね絵馬ちゃん。鳥居君も心配してたよ。だって絵馬ちゃん、最近私たちの事、避けてたでしょ」
ちょっと強気に言ってみた。
「当たり前でしょ。八年前の教訓を活かしただけよ。あの場合は、鈍感単細胞馬鹿の群れから離れるのが賢明なの。明るい場所で陰口たたくようなマナー知らずの鬱陶しい声なんて、聴いてるだけで不愉快になって損よ」
憎々しげに言う。辛辣な表情。見ているだけで、八年前に酷い思いをさせられたんだと、私にもほんのわずか伝わってくる。
「でも……、冷たく当たったりしたのは、悪いと思ってる。ごめん」
呟かれた絵馬ちゃんの声を、私にはしっかりと届いた。
「うん。……本当に心配したんだからね」
「ごめん」
大人しく謝る絵馬ちゃんの姿珍しくて、なんだから得した気分。
「ホントだよ。もしかしたら、学校に来なくなるんじゃないかなって思ったんだもん。でも、安心した」

「あ、そうしよう」
突然いつもの傍若無人ぶり復活。
「あの鬱陶しい環境が続くなら、しばらく学校いくの止めようかな思ってたのよね。行くだけ気分悪くなるだけでしょ」
「え、そんなの困るよ！」
「なんで？　私がいなくてもお昼だったら、小夜子と一緒に食べればいいでしょ、なんだったら礼慈や神籬とっつかまえれて……」
「そうじゃないの！」身を乗り出す勢いで机をたたいた。
鈍い音。響いて、沈む。
手の平。叩くと、熱い。
叫び声。喉から、痛む。
「ど、どうしたのよ、そんな大きな声だして。どうかしたの」
「……学校に居て欲しいの、絵馬ちゃんにも。今まで通りに」
喉の痛みがまだ引かない。小さな声。座り直す。
「あやめ、何か有ったの？　私も人の事いえないけど、最近のあんた、なんだか情緒不安定よ」
「うん……それは」
自分でもよく分かってる。
動機がまだ残留している。
吐き気を誘う呼吸の乱れ。
ちょっと待って、と私はポケットから薬を取り出して一錠、お茶と一緒に飲み込んだ。
「そんなに、酷いの？」
絵馬ちゃんが、私の持っている薬瓶を指さして言った。
「……大丈夫。これね、パパから貰ったの。酔い止めみたいなもの。これ飲んだから、落ち着くから。……でも、学校だけは、いままで通りでいて欲しいの……」
「あやめ……。もしかして、家で何かあった？」
呼吸が止まった、一瞬。
沢山のものが頭の中に溢れて、過ぎる。
何度も、何度も、再生された光景が。
溢れて、乱れて、過ぎって、消えていく。
「あやめ……」
声に出ないように、外にでないように、涙が出ないように。
必死で、押さえ込む。
ダメだ。こんなことで、泣いちゃダメ。
「あやめ……、ごめんね」
「う、ううん、絵馬ちゃんは悪くないよ」
「そうだけど……でも、やっぱり私の家がそもそもの原因だから、こんなに、どうしようもないことになったのも」

一瞬だけ、絵馬ちゃんが辛そうな表情を浮かべた気がした。でも、それが錯覚だったように、笑ってみせた。
「平気よ。知ってた？　この界隈で一番狂ってる家は、ウチなのよ。もう、何代も前から頭が狂った奴ばっかりの、筋金入りの変人奇人ファミリィなんだから。だから、あやめの家は平気よ」
冗談のような口調で、慰めてくれるんだ。人形のような髪をふわりとなびかせ立ち上がると、神様だって怖くない、というぐらい不敵な笑みを浮かべた。
「ほら、泊まるんでしょ。だったら、家に電話ぐらい入れておきなさい。娘が行方不明になったって警察にでも駆け込まれた、またあの女が来るじゃない」
「……うん。ありがと、絵馬ちゃん」
絵馬ちゃんは足場やにキッチンに向かった。さてやるぞ、と気合いを入れて包丁と大根を両手に構えている。どうやら夕ご飯を作ってくれるらしいけど、包丁の持ち方と扱い方が刀みたいなのが不安。時々、うりゃ、このくそ、ジタバタするなっ、とか色々と料理ではなく剣道の試合をしているのじゃないかと思うようなかけ声が聞こえたけど、絵馬ちゃんを信頼して、私は家に電話をすることにした。
居間を出て廊下の置いてある電話の受話器を手にしてダイヤルを回す。
何度目かのコール。もしかして留守かな、と電話を切ろうとした時、やっとつながった。
「あ、もしもし、私だけど、お母さん？」
ぞわぞわとしたノイズが途切れたら、
『あぁ、あやめちゃんかい……どうしたの……？』
ノイズの様に枯れた声が耳元に伝わる。
「お……お婆、ちゃん――――」
喉が枯れたようなクシャクシャの声。でも、しゃべり方は聞き慣れたお婆ちゃんのものだった。
どきりと、心臓が縮む。
私の喉が震えて、何を喋ったらいいのか頭の中もめちゃくちゃだ。
昨日から、お婆ちゃんを突き飛ばしてから避けていた、この状況を。頭の奥から、ヤタガラス様、ヤタガラス様と唱える誰かの声が聞こえてくる。
「お、おかあ、さん、は？」
響く。自分の声が体の中で響く。
震え。喉が私の意志を無視して震えて、うまく喋れない。
『お母さんはね、今、買い物に出てるよ。あやめちゃんは、どうしたの？　もう学校終わったのかい？』

「う、うん。……きょ、今日ね……友達の、家に、泊まるから……、だから、お、お母さんにも、そう、言っておいて……」

上手く発音できない。

緊張してる。怖い？　どうして……。

お婆ちゃんだよ。いつも、優しいお婆ちゃんなんだよ。いつもはちゃんと話しているのに。どうして、こんなに、ビクビクしてるの、私？

『あぁ、はいはい。分かったよ。ちゃんと言っておくからね』

おっとりと穏やかな口調。

聞き慣れた優しい話し方。

頭の奥で響く、声とは違う。

「ねぇ、お婆ちゃん……、大丈夫？」

一昨日の夕方。私が見たのは、きっと、夢じゃないかと期待した。きっと昔の事件を思い出して、不安だっただけなんだよね。気持ちが不安定になってたから、だから、神頼みもしたくなるよね、と私は私を必死に説得した。

『大丈夫だよ。……あぁ、あやめちゃんは心配してくれてたんだね。あぁ、ごめんね、お婆ちゃんはもう大丈夫だからね、もう大丈夫だからね、安心して帰っておいで。あぁそうだ……心配かけたから、あやめちゃんの好きなおはぎ、作っておいてあげるね』

「う、うん！　楽しみにしてるね」

じゃあね、と私は受話器を置いた。

そして、深く呼吸して眼を瞑ると、体の中が熱くなってくるのを感じた。涙が出そうなほど、うれしい。たったそれだけ、いつものことなのに、当たり前のように話しだったけど、でもそれだけで、なんだかすごい奇跡が起きたように思えた。

うれしい気分が、膜のように私を覆う。

浮力が大きな膜。なんだか体が軽くなったようだ。

草原を裸足で歩くように、

ふわふわとした気持ちで居間に戻ると絵馬ちゃんが、

「ぎゃぁぁっぁぁぁぁぁぁぁぁぁッ！」

家事で火事を起きていた。

立ちこめる火柱の前で悲鳴を上げている絵馬ちゃん。

速やかな消火活動をッ。

パニックになりながら二人で右往左往して、

水をかけてさらに炎上。

鼓膜を引き裂くような悲鳴。

消化器を持ち出して、やっと鎮火。

出火元は油鍋。そして、台所は白くなった。

「どうして、出来もしない料理なんか……」

「いや、あやめの心意気に心打たれて、ついはりきって。なんていうか、……出来ると思ったのようね、感性で。でもまさか、唐揚げ作ろうとして家燃やしかけるとは、いやぁ、さすがにビビったぁぁ、は、ははは」

「あ、あれ唐揚げだったんだ」

白い泡が浮かぶ鍋に、真っ黒のお団子が浮かんでいる。とても元が鶏肉だとは思えないほど、黒くて歪なハニワみたいな塊。

二時間かけて二人で台所を掃除して、一緒にインスタントラーメンを食べた。その時、冷蔵庫の中を覗いたら、飲み物と調味料とデザートしかなくて、冷凍室には冷凍食品が詰まっていた。私はそれを見て奥津城家の食事事情を一瞬で把握してしまった。

「絵馬ちゃん。いつもごはん、どうしてるの？」

「爺やが作ってる」

「爺やって……まさか執事？」

一瞬、タキシードが似合う白髪の老紳士が浮んだ。

「違うよ。お祖父ちゃん、祖父、そして私は孫。すごいんだよ、もう和食は板長、洋食はシェフ、中華だって師匠ってくらいの腕前なんだから。なんていうか、刃物の扱いが病的に上手いのよ。マグロだって解体できちゃうんだから。あぁ、これは遺伝か……」

「へぇ、すごいね、ホント、すごいよ。……あ、お祖父さんは今どこに？　居るんだったら挨拶しなきゃ」

「ああ、いないよ。今週の頭ぐらいにふらっと消えた」

「えぇっ消えたって……、心配じゃないの？」

「別に。よくある事よ。二日三日はざらだし、一週間いないことだってたまにあるのよ。冷凍食品の補充だけして、どっか行っちゃう放浪癖があるの。さぁて、今度はどこに行ってるのか。日本か世界か、もしかしてあの世か……」

「絵馬ちゃん、最後のは……笑えないよ」

「ま、心配いらないわ。だってうちの爺や、強いんだから」

絵馬ちゃんはなんだか誇らしげにそう言った。

夕食の後、初めて入った絵馬ちゃんの部屋は、ウエスタンブーツをいつも愛用しているぐらいだから、洋室かな、とかアメリカン模様かな、と想像していたけど、畳敷き、桐箪笥、窓際の座卓、あと洋服をかける仕切りのような物があるぐらいの和風で、テレビもラジカセも本棚もない。旅館より物が少ないシンプルな部屋だった。

それと押し入れにつっかえ棒をさしているがの気になって、でも、見るな見るなという念が伝わっている気がして、深く詮索しない事にした。

布団を並べて、小さな茶色の電球だけ灯したままで、まだ眠たくないのに、私たちは布団に入った。
静かな暗闇。
音楽もない、賑やかな映像もない、生活のざわめきもここには届かない。ときどき、窓の外に写る竹林の影が風で揺れて、粘性の低い葉音が聞けるぐらい。
退屈なものしかないかもしれない。賑やかなものなんてないかもしれないけど、私はこうしているのが、幸せだと感じた。
絵馬ちゃんと沢山話をした。学校の購買部で売られてる期間限定の怪しいパンとか、繁華街で美味しいがある喫茶店があるから今度食べに行こうとか、学校の七不思議とか漫画みたいな超人が四人いるとか、最近見た良い映画の話とか、すごく怖いホラービデオが手に入ったとか、私の趣味の話とか。
「絵馬ちゃんって、着せ替え人形とか好きだった？」
「え……、あ。あやめ、もしかしてそれは、この間の私の醜態につながるのかしら？」
「え、すごくかわいかったよ、メイドさん」
「うわぁーッ。言うな！　思い出しただけでも顔で茶を沸かしそうだから、言わないでッ」
「それを言うなら、へそで茶を沸かす。用法も違うよ」
「いいの。なんだっていいの、とにかく恥ずかしいから」
「もしかして、あの押し入れの中に入ってるの？、衣装が」
「あんたっ、おっそろしいカンを都合よく発揮しないの。それと、誰かに言ったら、今度アンタんちで料理作るわよ、私が」
ごろごろと左右に体を揺らして悶える絵馬ちゃんは、どうやら自分の料理が、武器になるというのを認識しているようだ。
「秘密秘密って……絵馬ちゃんってホント、秘密が多いよね」
「あやめにだって秘密はあるでしょ。誰だってそうよ。最後の砦っていうか、人としての尊厳みたいな。上手く言えないけどさ、秘密を知らなければみんな馬鹿みたいに平和で楽しくいられるのに、それを知られたらもう、平和ではいられなくなるっていうのかな。鈍感でいる方が楽でしょ……。
だから私ね、秘密にするのは優しさだと思うんだ。あやめは、私の秘密を知った。でも私は知られたくないから、あやめに沈黙を命令する。すると、あやめは秘密を知る前より自由が一つ奪われてしまい、そしてもし、あやめが秘密をばらしたら……。ね、秘密を知ったばっかりに、あやめはとんでもない目にあってしまうかもしれない。だから私は、あやめのためを思って、秘密を守ってるの。秘密なんて、知らない方が良いから秘密にしてるのよ。知ったらもう戻れない。だから、必死になって隠すの」

分かった？　と絵馬ちゃんが半眼で私を見た。
「うん…。誰かに言ったら、私はただじゃ済まないってのは、よく分かった」
「うん、よろしい」満足そうに笑って、絵馬ちゃんは穏やかに眼を細めて天へ顔を向けた。
私は黙っていたけど、絵馬ちゃんの話し方は、どことなくシキ君と似ている。何かを伝えようと、分かり合おうする気持ちが、言葉の一つ一つにこもっているような話し方だった。
やっぱり姉弟なんだな、と私は一人で密かに笑った。
「ねぇし、あやめし」
笑い声をぐっと漏らさないように、振り向いた。
「礼蕗にもうコクったの？」
むせた。横隔膜に激しい衝撃を受けた。
「なっ、ちょ、ちょっと絵馬ちゃん、いきなり何ッ」
「だって礼蕗がさ、あの事件の事あやめに話すぐらいだからさぁ、二人はかなぁりぃ親密な関係になってしまったのかなって。ねぇ、どうなの？　ほらほら、お姉さんに話してごらん」
「まだ、そんなんじゃないって」
「へぇ、まだ、なんだ。まだ、ね。まだってことは、へへぇ。やっぱり好きなんだね、礼蕗が」
「えぇっ、そんな……」
「ほんと分かりやすくて可愛いわね。そんなこと、見てればすぐに分かるわよ。もうバレバレ。気づいてないの当人同士ぐらい。純情馬鹿ップル」
もう完全に修学旅行のノリで私の布団まで潜り込んで抱きついて、頬ずりしてきた。なんだか酔っぱらってるように、絵馬ちゃんの声がとろけてねっとりとして聞こえてくる。
「ふぁ、あやめ柔らかしい。髪も綺麗だよね。さらさらしてすっごく触り心地がいいなぁ、ぬいぐるみみたい」
「もう、やめてって絵馬ちゃん。なんか変だよ」
「いいじゃん今夜ぐらい。なんか最近ね、ごたごたが続いて欲求不満なの、だから、い・や・し・て」
「え、え、え、ちょっ、待って、絵馬ちゃんもしかして、こういう趣味の人なの？　うそ、どうしよう、あ、あの、私ね。初めてなんだけど……」
「私も初めてよ。充電……」消え入るように呟いて、私に抱きついたまま、絵馬ちゃんは眠ってしまったように動かない。
布一枚越しに伝わってくる柔らかい温もりが、熱くなって私の体の中に貯まっていく。充電してる。喜びとか幸せとか元気とか、楽しく生きるために必要な気持ちの栄養を分けて貰っている気がする。

涼しげな竹の葉音が聞こえる。
暖かい温もりに包まれて、そっと目を閉じる。
そして、涙が瞼に押し出されて、頬に流れた。
不安とか不幸とか、悲しくなる事が流れ出す。
明日がまた、いつもの日になりますようにと、
私はそっと祈りながら、眠りに意識を預けた。

## ５／九月十八日（土）

午前七時に目が覚めた。
いつもの起きる時間。初めての和室。畳の微かな匂いと、冷えた空気が目覚めを促す。
予想通り、絵馬ちゃんはなかなか起きてくれなかった。何度も体を揺らして声をかけても、洞窟で冬眠している熊のようなうめき声だけ返すだけ。それでも懸命な交渉により二十分後、まるで井戸の底で皿を数える幽霊のように形相で起きてくれた。ストレートの髪が台風が通過したみたいにウェーブがかかっていたが。
先に支度を済ませて玄関先で待っていたら、絵馬ちゃんは寝間着のまま出てきた。
「あやめ。悪いけど、学校は一人で行ってちょうだい」
「絵馬ちゃんは？」
「私はパス。土曜日だし、行くだけ損って感じだしね。それに、招きたくもない客が来そうだし。だから、あやめだけ行って。小夜子にもよろしく」
説得をしようとする前に、言うだけ言うと絵馬ちゃんは家の中へ戻ってしまった。なんだか事後承諾のようにあっさりと、私は絵馬ちゃんの欠席を黙認してしまった。

仕方がないから、私は一人で登校した。
教室につくと、すでにクラスの半分ぐらいが揃っていて、いくつかのグループの話し声には、事件の事と絵馬ちゃんの陰口が含まれていた。私はそれらを無視して一之宮さんの席へ向かうと、居眠りをしていように机に顔を伏せていたけど、声をかけると顔を上げて挨拶を返してくれた。
「どうしたの……一之宮さん。寝不足、なの？」
顔を上げた一之宮さんの目元には、くっきりとクマができていて、そのせいか、どことなく顔色が悪く目もほとんど閉じた状態だから怒っているようにも見える。
「寝不足っていうか、欲求不満とも違うな、なんだろ……イライラかな……うん、色々とせっぱつまってる状態。ホント、ノイローゼになりそう……そう、ノイローゼよノイローゼ」
半分夢に浸かっているような口調で答えて、気絶したように机に顔を伏せた。
「大丈夫？　保健室いく？」
「それは、まだ……うん、平気」
顔を伏せたまま、手助を求めるように腕をのばして手を振った。
心配だけど、無理に連れて行くのも悪いし、それに、もう眠りに入っているようだったから、私はそっと自分の席へ戻った。

土曜日の三時限だけの授業は、さらりとこぼれる砂のようにあっというまに終わって、ＨＲが終わると、帰宅する生徒は教室から飛び出すように出て行き、部活が有る生徒は昼食を取ろうと移動しだした。私は、教室に残っていたも所在ないから教室を出た。
家に帰ろう、そう思った瞬間、足が止まった。
ずきりとお腹が痛んで、吐き気がした。咳が出て呼吸が乱れる。まるで体が家に帰るのを拒んでいるみたいだ。
「だ、大丈夫……、もう、大丈夫、だよね」
よろめき、壁に手を添えてなんとか落ち着かせようと、自分に言い聞かせる。大丈夫、もう大丈夫だよ、と恐がりな私を慰める。
だって昨日、お婆ちゃんは普通に話ししてたんだもん。
だから、大丈夫だよ。
「帰ろう……」口にして深呼吸をしてからゆっくりと壁から手を離して、歩き出す。
その直後、教室の方から呼び止められた。
振り返ると、一之宮さんが足早に近づいて「これ、落としたよ」手渡されたのは私の財布だった。
定期が入っているから、危うく帰れなくなるところだった。
「拾った拍子に見えたんだけど、その写真って家族写真？」
「うん。そうだよ」

私は三つ折りの財布に入れた写真を見せた。この町に越してきて、新しい家の玄関先で撮った新しい家族の写真。私とお婆ちゃんと、お母さんとパパ。幸せが当然のようにそこにはあって、特別なことでないように笑っている。

「へぇ、家族なんだ……。いいね、家族との写真なんて、うちはあるかどうかも怪しいな」

怪しげな笑みを一瞬浮かべて、自傷するように呟いた。

「あるよ。きっと……」

「どうかな。うちの両親、共働きの上にワーカ・ホリックだから。私が寝る頃に帰ってきて、私が家を出てから起きるっていう、生活のリズムがまったく合わないんだ。だから、そうだな、一週間ぐらい顔を合わさない事なんてザラなのよね、狭いマンションに住んでるのにさ」

自嘲気味に言うと、この話は終わり、と手をパンと叩いた。

「そうだ。ねぇ榊。これから暇よね暇でしょ暇だッ間違えない！」

私の肩をがっしり掴んで、

「遊びにいこう」脅迫めいたお誘い。

「え、でも、一之宮さん、これから部活じゃないの？」

「はぁ？　何言ってるの。部活は自粛(じしゅく)って、さっき先生が言ってたでしょ。聴いてなかったの？」

放課後のH・Rの記憶が曖昧だ。

いや、曖昧なのは記憶だけじゃなくて――。

「……、そうだった、っけ」

「そうよ、殺人事件が起きて物騒だから、さっさと帰れって。遠回しに、学校の責任で殺人事件に巻き込まれたら面倒だから、家に帰って、その後は自己責任で行動しろって事よ」

「一之宮さん……そこまで言ってないと思うよ」

「ま、ともかく遊びに行こう。ほら、最近なんだかモヤモヤした気分だったらか、うさ晴らししたいし、榊も元気なさそうだったし、景気づけに行こうよ。あ、それとね、礼蕗も誘ってるから」

「えぇっ！」

「ほら行くよ。正面玄関前で待ち合わせだから、急げ。あいつ、律儀だからもう待ってるよ、きっと」

まだ行くかどうかの返事をしていないまま、一之宮さんに半ば強引に腕を引っ張られて正面玄関まで連行されると、鳥居君と神籬君がすでに待っていた。二人は何か話していたようだったけど、私たちに気づくと、神籬君だけ立ち去っていった。

「あれ、神籬も一緒じゃないの？」

一之宮さんが近づきながら鳥居君に尋ねた。

「ああ。あいつは、大事な用があるって。……」

答えて、ちらりと鳥居君の視線が、私に。
目が会ったのは一瞬、何か言わなくちゃと思う前に、一之宮さんの先導で学校を出た。
駅前の繁華街。同じ町なのに、私が住んでいる朽木村側とは違って、都市化が進んで、河を隔てただけで八年ぐらい発展の差があるような賑やかさ。田舎と地方都市が一つになった、なんだかお得な町だな。
私たちは喫茶店に入って、お昼を食べながらこれからの計画を立てることにした。店の中はお昼時だというのに客は少なく、暇そうにカウンターの向こうではマスタがテレビを見ていた。こじんまりとして少し暗くて流行っていそうにないけど、出てきた料理は文句がないほど美味しかった。
「カラオケ、バッティングセンタ、ゲーセン、それともコーヒーのおかわりだけで何時間か居座るってのもありよね。礼蕗ちゃーん、なにか良い案ある？」
一之宮さんが隣に座っている鳥居君に尋ねると、無言で首を振って、何もない、というジェスチャで返された。
「ちぇっ。あやめは？　行きたい所ある？」
向かいに座る私にふられると、私も首を振った。
「なんだよ。消極的なカップルだな」
一之宮さんのさらりとした呟きに、ほぼ同時に、私と鳥居君はむせた。
「おい、小夜子！」
「ちょっと一之宮さん！」
「ああ、絵馬がいたらこのポディションも楽なんだけどな……、今日休んでたよね。何かあったのかな……」
私たちの抗議をさらりと流して、一之宮さんは、窓の向こうの雑踏を眺めながら呟いた。
「大丈夫だよ」私は座り直しながら言った。
「榊。今日、絵馬に会ったの？」
「うん。昨日、絵馬ちゃんのお家に泊まったから」
「え。……一緒に、寝たの？」
「え？　それはもちろん、泊まったんだから」
「うわぁ、聴いた礼蕗ちゃーん。榊はそっちの趣味らしいね、残念」
「え、え、ちょっと一之宮さんそれ違う。違うからね、鳥居君」
目の前で、一之宮さんがこそこそと鳥居君に悪魔のように囁く。
鳥居君は照れながら視線をそらしてる。
「もう！　私は違うんだってッ」
「私は？　じゃあ、絵馬がそうなの？」
違うよ、と抗議しようと思ったが、出来なかった。

沈黙。
店内は元の静まりに戻っていき、カンターの横に置かれているテレビからの音がやけに大きく聞こえた。
私たちは、何か触れてはいけない物に触れようとしたように、それ以上この話題について追求せず、水を飲んだ。
この店に本来備わっていた優雅な午後の静寂が、まだ子供の私たちを粛正させるように、マスタの咳払いと共に再構築されていく。
そんな中、テレビから流れるニュースが、厭らしい言葉を流した。
「へぇ、また出たんだ。毎日よくやるわ、祟ってる神様も」
振り向いて、脱力気味に呟いた一之宮さん。
「どうせ祟るなら、もっと世の中のためになる奴を祟って欲しいな」
一之宮さんが、憎たらしく吐き捨て睨んだテレビを、私も見て、微かに、密かに体が震えた。
ニュース番組は、連続箱入り殺人事件について。そして、また犠牲者が出たことを告げていた。それが巷で『祟り』だと噂されている事も、その噂になった八年前の事件の事をほのめかすような事を言っている。
「……奥津城」
ぼそりと、鳥居君が絵馬ちゃんを心配するように険しい表情で呟いたのを、私は聞き逃さなかった。
ニュースは祟りの噂について、あれこれと憶測を流し出した。祟りを恐れる老人の奇行。自宅に荒縄や儀式めいた装飾を施したり、一日中神棚を拝んだり、お百度参りを黙々と続けるなど、無遠慮にそんな憶測を流している。そして住民らしき人の、まるで用意された脚本を言わせているようなインタビュー。
どれもが、祟りを否定していて、でも、混乱を喜びながら扇動するような事ばかり言っている。
聴いていて、見ていて、とても気持ち悪い。
まるで作り物、偽物を事実に見立てている滑稽な劇を見ているだようで吐き気がして、私は我慢できずに席を立った。
「あ、榊、どうしたの？」
「ごめん」
そう言い残し、テーブルにお金を置いて逃げるように店から飛び出した。店の前のガードレールに寄りかかるように屈んで、深呼吸をする。
「どうしたの、急に飛び出して……大丈夫？」
しばらくして一之宮さんが駆け寄り、背中をさすってくれた。
「うん。ごめんね、ちょっと気分が……」
立ち上がる。一之宮さんがいつ倒れても支えてくれるように、両手を差し出してくれていた。

「私……やっぱり、帰るね」
とてもこのまま遊びに行こうなんて気分になれない。
一之宮さんも鳥居君も、それを止めようとしなかった。それどころか、送ってくれると言ってくれた。
鳥居君の家は、私と同じ方向だけど一之宮さんの家は、この近くのマンションらしいから遠慮すると、ついでに絵馬ちゃんの家に行くと言って引かなかった。
私は二人に甘えて、送ってもらうことにした。
気のせいか、鴉が笑うような鳴き声が聞こえた。
バスに乗って、十五分ぐらい揺られて降りる。そこから歩いて家まで行くけど、その間に、一之宮さんがそっと私の耳元で囁いた。
「もしかして、鳥居と二人っきりになりたかった？」
驚いて大声が出そうになって、とっさに両手で自分の口を塞いだ。首を横に振って、そんなないよと、ジェスチャ。
それからと鳥居君に今の声が聞こえていなかったと、恐る恐る見ると、鳥居君は私達より数歩後ろを歩いていた。まるで聞こえていないようだったから安心。
「今日の一之宮さん、絵馬ちゃんみたいだよ。すごい意地悪」
「だって、絵馬がいないんだから、私が代役しなきゃ。それとも、鳥居がやったほうがよかった？」
一瞬、妄想してしまった。鳥居君が、二人きりになりたかった？と私の耳元で囁く場面を。そっと、耳元で、囁く……。
「かお真っ赤よ」
慌てて両手で冷却。
それ以上に冷ややかに微笑む一之宮さん。
「あ、そうだ礼慈」一之宮さんが歩調をゆるめて振り返った。
「あんた、来月の大会、出るよね」
「俺、部長だぞ」
「私、マネージャだぞ」
一体何のやりとりなのか分からないまま、私は道案内するように少し前を歩きながら二人の話を聞いた。
「実はさ、榊が、応援に行きたいってさ」
唐突に自分の名前を出されて驚いて立ち止まってしまった。
「え、あ、え、ぇ、一之宮さん、私、そんなこと……」
「別にいいよな、部長」
私の言葉を防いで一之宮さんが強引に話しを進める。
鳥居君は一瞬困惑したような表情を浮かべた。
「別に、かまわないけど……」
「よかったな榊。知ってる？　鳥居ってめっちゃ足が早いんだよ、県の記録保持者。チャンプよチャンプ」

一之宮さんが耳打ちするけど、私はそれらをずっと前から知っていた。
だって、見てたもん。
グランドを全速力で走り抜ける彼を、他の部員が帰っても、夕日が沈もうとしても、ずっと、何度も何度も走っている彼を、私は誰もいない教室から見ていたから。
ちらりと振り返って見た彼の顔は、寡黙ないつもの表情。涼しげに落ちついているのに、走っている彼は、まるで別人のように熱く輝いていた。朱鷺色（ときいろ）の夕日よりも、ずっと、輝いていた彼の表情が、私は好き。
その気持ちをいつまでも、胸に閉じこめて秘密にしたままでも、きっと、幸せだとおもう。いつまでも、こうして楽しい時間が続いてくれるのなら、それも幸せだから。いつまでも、このままで……。
「榊の家ってまだなの？」
「もうすぐだよ」
後、百メートルぐらい先を曲がれば家に着いてしまう。
――アーアーアー。
声が遠く、高い所から聞こえた。
――アーアーアー。
それは哀れに思うほど、しおれた声。
歩くたびに、哀れみは増える。
――アーアァーアー。
声に混じって、乱暴に何かを叩く音。
無数の、音。
溢れて、漏れる声。
それは――――。
「ここを曲がったら……」
曲がって、見えた家。
間違うはずのない場所、
見間違うはずのない家、
帰るべき居場所には、
――カァーアァーガァ！
鳥の鳴き声に埋め尽くされていた。
鳥だ。
黒い羽。
哀れな鳴き声。
赤い屋根の家に群がる黒い群れ。
群がる。鳥が、群がる。
静かだった住宅街に、木霊する鴉の鳴き声。
ただ一件、何羽、何十羽の鴉が群がる家。

それは、間違いなく――――

「う・そ……」

――私の家。

ぞわぞわ、と溢れる羽ばたく黒。

この家を哀れむように鳴く。

鳥が。鴉が。黒い鴉が。貪るように群れる。はき出すように哀れに鳴く。叫び声。金属をすりあわせたような甲高い声。頭に響く。身を切られそうな。声。鳴き声。鴉。鴉。家に。大量の。鴉。しめ縄が張り巡らされ。雁字搦(がんじがら)めになった。家。私が。お母さんが。パパが。お婆ちゃんが。住んでる。家が。今。鴉に。

犯されている。

空の雲を切り裂くような無数の鳴き声。

豹変した自分の家を唖然と眺めていた。

それがどれぐらいだったか、分からない。

はっとして、一之宮さんと鳥居君を見た。

悪寒がした。

何もかもが、無くなってしまったように、

何もかもが、零(こぼ)れ落ちてしまったような、

悪寒がした。

「あ……、こ、これは……」

無表情で家を見上げる二人。

「ち、違う、違うの、これ。違う」

――カァーアァーカァー。

「ち、が、う、ちが、う」

――カァーアァーカァー。

「ちがう」

――カァーアァーカァー。

「ねぇ、これ……」

――カァーアァーカァー。

「違うから――――ッ」

私の叫びが、

鴉の叫びに、引き裂かれる。

違う。

否定してるのに。

違う。

――ふ。

否定しても。

違う。違う。

ここは、私の家。

――ふ、ふふ。

こんな家じゃない、
こんなんじゃない、
違う、違う、違う。
「っふ、ふははははははっは――――――！」
嗤い声。
「一之宮、さん……？」
一之宮さんが嗤う。
蔑むように、嗤う。
鴉が散る程、嗤う。
嗤うたびに、私は、絶望していく。
「違う！　違うの一之宮さん、これは！」
どんなに否定しても、嗤い声は止まらない。
苦しい。息苦しい。
鳥居君。まったく表情を変えずに見上げていた。
「違うの、……違うよ、鳥居君……」
私は、まるで願うように縋ってた。
「うん……」
それだけしか、言ってくれなかった。
「榊」
一之宮さんの笑い声が、言葉になって、

「バイバイ」
私の心臓を、突き刺した。
一之宮さんが、まるで汚いものから離れるように、
去っていく。
私は、縋るように鳥居君を見た。
「と、りい、くん……」
目があった。
「うん――――」
その瞬間、
彼の瞳に、
「じゃあ、またな」
拒絶が、映っていた。
「あ……」拒絶されたんだ。
嫌われた。
見られた。
見られた。
見られた。
絶対、変だと思われた。
絶対、きらわれ、た。
二人に。

友達に。
好きなひ、とに……。
見られたくない、もの、見られた。
――カァーアァーカァー。
「なんで……どうして……」
こんなことに、なったの？
走った。
走って、逃げるように、家に入った。
乱暴に玄関の戸を閉める。
壊れてしまえ。
壊れてる。
この家、壊れてる。
怪訝しい。
変だよ。
こんなの私の家じゃない。
「お母さん！」
外から聞こえる鳴き声を踏みつぶすほど叫んだ。
「パパ！」
誰かいないの。誰もいないの。
だったら、やっぱり、ここは違う。

「お婆ちゃん！」
違う家なら、
私は、普通に戻れる――――。
「あやめちゃんかい？」
なのに奥の和室から、お婆ちゃんの声が聞こえてしまった。
その瞬間、全身の力が抜けそうになるほど絶望した。
ここは私の家だ。
このオカシイ家が、おまえの家だと。
この狂った家が、おまえが居場所だと。
蔑むように、鴉が鳴く。
「おばあ、ちゃん……？」
きっと聞き間違い。そんな希望に縋って、和室へ向かう。
「お婆ちゃん……なの？」
臭い。
何か、臭い。
家に漂う異臭。
錆びた匂い。
腐った匂い。
泥臭い。
獣くさい。

体のなかで渦巻く吐き気を耐えながら、
和室の襖を、
「おばあーちゃん――――」
開いた瞬間、吐いた。
「うぇえーがっ、ウエェっーーー、がっ、はぁつウエェぇ」
その光景を阻むほどの涙を流して吐き出した。
畳の上にまき散らされた吐瀉物の匂いで、さらに吐き出した。胃の中のものすべて、喉がかれるほど酸っぱい刺激が鼻孔を貫く。
嘔吐の波が過ぎ、口を押さえながら顔をあげる。
涙で溺れた瞳に映つる。
たくさんの死骸が吊された和室。
天井。
縄。
子犬。
子猫。
小さな、動物。
吊されている。
畳の上。
赤い。
斑模様。
獣の。匂いが。
充満。
「おや、あやめちゃん」
一番奥。
神棚の下。
大きな、木彫りの鳥。
その前に、背中を丸めて座っているお婆ちゃん。
「おかえり」
赤々と肉が露わなった犬の顔を、抱いていた。
「ヒィ――――っ」
悲鳴。吸い込んだ生臭い息。
「オッ、ウエェえぇうーーーーーー」
体が拒絶して吐き出した。
重苦しい吐瀉。膝をつく。手をついて胃液だけ吐く。喉が痛くなるなっても、吐き出した。
「まぁまぁ、どうしたの、あやめちゃん……」
淀んだ空気の中、声が聞こえる。
「あーあ、こんなに……どこか気持ち悪いの？」
腐った匂いの中、声が聞こえる。
気持ち悪い、なにもかも、気持ち悪い。

それしかもうないほど気持ち悪い。
「オゥ、お、ばあ―……ちゃん」
上手く声がでない喉で、なにしてるの、と顔を上げた。
座ったまま、振り返った、お婆ちゃん――――？
小さな犬の首。毛をむしり取りながら、こわれはね、と嗤う。
「そうだね、お供え物だよ……。こうして神饌をお供えして、家族を祟らないでくださいって、お願いするんだよ……。こうして、沢山、沢山、お供えしてね……」
毛を毟った子犬の首を、木彫りの鳥の前に置いた。
鳥の像の前には、果物とお米、野菜といくつもの赤々とした小さな顔が、供えられている。
「ぁ―、あ、あ……」
上手く呼吸が出来ない。
口と鼻を手で覆って、空気を拒む。
「な　ん。　で　……ど、うし　ぃ　て……」
立ち上がろうとし、頬に生臭い血が落ちてきた。
後ずさり。壁までさがる。
「こん　な　ヒド　い……こと」
涙に溺れた視界で、ゆっくりとお婆ちゃんだけが動いた。
ゆっくりと立ち上がった。

「そうだね。少し、かわいそうだけど……こうしないと」
――祟られるから。
「だから、ヤタガラス様にお供え物を、して……、家族に災いがおきませんように……家族が幸せでいられますように……こうしないと、祟られるから……しかた、ないよねぇ―……誰もやらないんだから……お婆ちゃんがやらないと……みんな……みんな……祟られてしまって……ぁぁ―――あの人のように……ヤタガラス様に、殺されてしまうから――――」
血まみれの手で拝む先に、神棚とお祖父ちゃんの遺影。
「あぁぁぁッ、いやじゃいやじゃもういやじゃ、ごめんじゃよ。家族が、死ぬのは、あぁぁもう―いやじゃ―……祟るなら、どうかこの老いぼれを祟ってくださいませ……」
どす黒い血にぬれた皺だらけの手で拝んむ。皮膚がはげた首を並べた神棚に向かって、狂ったように拝んでいた。
拝んでた。
家族のために……。
家族の幸せのために……。
家族みんなのために……。
お母さん、
パパ、

私のために……。
お婆ちゃんは、
手を汚してまで、拝んでた。
ヤタガラス様の、祟りを恐れて。
祟り……。
これが、祟りなの……？
鴉の哀れな鳴き声に埋め尽くされた家。
――カァーーーァァーーーー。
天井からぶら下がる死骸。
――カァーーーァーーァァーーー。
獣の匂い、腐敗臭、血の臭い、吐瀉臭、混濁した空気。
――カァーーーァーーァァーーー。
零れる涙まで、ひどく汚い。
――カァーーーァーーァァーーー。
姿が見えない鳥の鳴き声に、
殺されてしまいそう。
「あやめちゃん……」
嗄(しゃが)れた声。
よじれてしまった私の喉は、声を出そうとして何も言えなかった。
「一緒に、そこのお供え物を、ここに供えてちょうだい」

朧(おぼろ)な形が、ゆっくり縁側へ動く。
白い壁のような襖の向こう。
襖が、開かれた。
黒い、黒い、ものが蠢(うごめ)いている。
私は涙をぬぐって、外を見た。
途端(とたん)。
「つい……」
鳥が……。
「あ……あぁ」
黒い、鳥が、
「い――や」
庭にばらまかれた犬や猫の死骸を、貪っている。
「イヤぁぁぁぁ――――――！」
叫び。
狂ってしまいそう。
狂ってしまってる。
狂ってしまいたい。
鴉が一斉に飛び立つ。
庭に残ったのは、腑が飛び出た犬と猫の形をした肉の塊。

「あぁーあぁー、だめでしょ、あやめちゃん……そんな大きな声をだして……鴉が、逃げてしまって……。ほら、あやめちゃん、そこのお供え物を、こっちに持ってきてちょうだい……」

お婆ちゃんが指さした。

私の頭上に吊されている、首のない子猫の死骸。

「さぁー、こっちに……鴉はね、ヤタガラス様の使いなんだよ……だから、鴉は大切に、しないと……ね」

嗄れた声。

天井から吊された死骸を一つとって、外へ放った。

それに群がる黒い羽根。

鴉が、くちばしで死骸をつつく。

「ほら、あやめちゃんも……」

手招くように、差し伸べられたお婆ちゃんの手は、どす黒い血にそまっている。

「い……いや……」

首を振った。

いやだ、いやだ、と首を振った。

「大丈夫だから……ちゃんとお供えしたら……もう、大丈夫だから」

いやだ、いやだ、と何度も言った。

けど、お婆ちゃんは聴いてくれない。

聞こえない。

鴉の鳴き声で、聞こえない。

いやだ、いやだ、と声を荒げた。

「ほら、良い子だから、ね――――」

近づいてくる。

お婆ちゃんが、

近づいてくる。

皺だらけの手を。

腐った血で汚れた手を、のばす。

汚れた、手。

汚れた、部屋。

汚れた、汚れた、汚れた、汚れてる、汚れてる、汚れてる、汚れる、汚れる、汚れる、汚れる、汚れる、汚れる、汚れる、汚れる――――私も、汚される。

「いやーーーーーーーーッ！」

お婆ちゃんを突き飛ばして、和室を飛び出した。

逆流する胃液を口を閉ざして押さえ込む。上手く呼吸が出来ない。

息苦しさに何度も咳をした。匂いが充満し、逃げられない。リビングに逃げ込んで、すぐに電話の受話器を取った。お母さんの携帯電話にかける、そうしたいのに、手が震えて上手くボタンが押せない。

息苦しさに口を開けて、空気を吸った。途端、その場で吐いた。

屈みこんで、受話器のボタンを押した。

何度目かのコールのあと、お母さんがでた。

胃液で痛めつけれた喉で言った。

「おかーさん！　おばーちゃんが、おばーちゃんが……！」

涙で声が濁る。ぐちゃぐちゃに濡れた顔をぬぐいながら、何度も、おばーちゃんがおばーちゃんが、とそれだけ繰り返し訴えた。もっと沢山言わないといけない事があるのに、それだけしか言えない。

『逃げなさい　あやめ！』

お母さんは、私以上に大きな声で叫んだ。

『狂ってたのよ！　狂ったのよ祟りのせいで！　早く逃げなさい！　お婆ちゃん狂ったの！　気が狂ってるの！　だからあやめ――』

「あやめちゃん――もう、大丈夫だからね」

肩に触れた、生暖かい手。

振り返る。

皺が刻まれた顔、血走った目、

血がついたお婆ちゃんが、

『逃げなさい！』

狂ったように、嗤っていた。

「は、はは……」可笑しかった。

――カァ〜ア〜〜ァア〜ッ〜〜カァ〜〜ア〜ッ〜ァア〜　カア〜〜ァ〜〜ァア〜〜ッガァ〜ァア〜「は、ははは」カァ〜〜ァ〜〜アァ〜〜ッ〜カァ〜ァ〜〜ァア〜ッ〜〜カァ〜ァ〜〜ァア〜ッ〜〜カァ〜ァ〜〜ァア〜ッ〜〜カァ〜ァ〜〜ァア〜ッ〜〜カァ〜ァ〜〜アァ〜ッ〜〜カァ〜〜ァ〜ッ〜ァア〜カァ〜〜ァ〜〜ァア〜〜ッカァ〜「あははは」ァ〜ガァァ〜ァア〜ッ〜っ―カァ〜〜ァ〜〜ァア〜カァ〜〜ァ〜〜ァア〜〜ッ〜カァ〜〜ァ〜〜ァア〜「はは……」カア〜〜ァ〜ガァ〜〜ァア〜〜ッ〜カァ〜ガァァァ〜〜ァ〜カァ〜〜「はっはは」ァ〜〜ァア〜〜ッカァ〜〜ァ〜〜ァア〜ガァァ〜ッ〜アァ〜〜カァ〜ガ〜ァ〜〜「はっつはは」アァ〜〜ッ〜カァ〜ァ〜〜アア「はははははは」ッ〜〜カァ〜〜ァ〜ッ〜ァア〜カァ〜〜ァ〜〜アァ〜〜カァ〜〜ァ〜〜ァア〜ッ〜っ―カァ〜〜「ははは、は」ァ〜〜アァ〜〜〜ァア〜　カァ〜〜ァ〜〜ァア〜〜ッカァ〜〜ァ〜〜ァアガァ〜ァア〜「は、ははは」カァ〜〜ァ〜〜ァア〜〜ッ〜カァ〜ァ〜〜アァ〜ッ〜〜カァ〜〜ァ〜ッ〜ァア〜カァ〜〜ァ〜〜ァア〜〜ッカァ〜「あははは」ァ〜ガァア〜ァア〜ッ〜っ―カァ〜〜ァ〜〜ァア〜〜ッカァ〜〜ァ〜〜ァア〜ッ〜っ―カァ〜〜ァ〜〜ァア〜「はは……」カァ〜〜ァ〜カァ〜〜「はっはは」ァ〜ァア〜ッカァ〜〜ァ〜〜。

――いつまで　いつまで――。
鴉の狂ったような鳴き声と幽かな囁いの中、
呪うようにが、響いた。
――いつまで　いつまで――。
気が狂ってしまいそうなほど綺麗な鳴き声が。
遠くの方から、耳元で響いた。

６／九月二十日（月）

掃除をした。
綺麗に、掃除をした。
お母さんと一緒に、綺麗に掃除をした。
「……いいこと、あやめ。宗一郎さんには、絶対、秘密よ」
お母さんは、何度も私にそう言い聞かせた。
秘密にしなさい。誰にも言ってはダメ。誰に聴かれても、知らないふりをしなさい。でないと……、知られたら……、終わってしまうから、と。
お母さんは、まるで怯えるように声を震わせて言った。
掃除をした。
綺麗に、掃除をした。
和室の死骸も、綺麗に片付けた。
庭の死骸も、綺麗に片付けた。
パパが帰ってくる夜まで、私とお母さんは何も無かったように、
二日前の家と同じように、綺麗に掃除をした。
獣の腐った匂いも、沢山のハーブのお香を焚いて消した。
誤魔化した。
パパに知られたくないから、必死に隠した。

私も、なにもなかったように、演技をした。
なにもなかった。
いつもの通り。
いつもと同じ、一日。
何も変わらない家。
何も起こらない家庭。
ただ、いつものように暮らす家族。
誰も狂ってなんかいない。
祟りなんて、やっぱり無い。
私とお母さんは、パパに嫌われたくないから必死に隠した。
汚いものすべてを秘密にした。

◇

日曜日、何をしていたのか、思い出せない。
きっと寝ていたと思う。
パパから貰ったガラス瓶の中身が、半分ぐらいになっていた。
月曜日の朝、リビングに降りると、いつもの風景があった。お母さんが朝食を作って、パパが新聞を読んでいる。お婆ちゃんは誰よりも早く起きて、一番に朝食を食べて和室にいる。そんないつもの通りの朝だった。
ぼんやりと、すこし頭が重い気がした。
それでも、いつも通りに家を出て、いつものように絵馬ちゃんの家へ。商店街を通ったとき、電柱の上に鴉がとまっていた。
鳴いていた。
けど、聞こえなかった。
くちばしを開いて、私を睨みながら鳴いて飛んでいった。
押し寄せる赤い光景と吐き気を押さえ込みながら、足早にその場を去った。
まだ青々とした木々を抜けて神社へ。いつものように閑散と静まりかえった境内を抜けて、絵馬ちゃんの家へ。

玄関でインターホンを何度か押して、しばらく待っていると絵馬ちゃんが出てきた。いつものようにウエスタンブーツに制服、少しはねた黒髪の絵馬ちゃん。

「おは。……ん。あやめ。あんた、変なものでも食べた？」

「え、どうして？」

「顔色悪いわよ……」

「絵馬ちゃんも、目つき悪いよ」

「寝不足よ」

「うん、私もそうだよ」

そうっかし、と呟いて、起きているのか寝ているのか分からないぐらい目を瞑ったまま歩き出した絵馬ちゃんに続いて、私も歩き出した。バスに乗って、学校に着くまで絵馬ちゃんは何も話さなかった。きっと寝ていたんだと思うほど、静かだった。

学校について教室に入ると、すでに登校していた生徒が一斉に私たちの方を向いて、静まりかえっていた。

卑しいほどの蔑むような視線の束を一斉に向けられても、絵馬ちゃんは悠然としていた。しばらく続いた呟き声の合唱にも、まったく動じない。

教室の中で、孤立している絵馬ちゃん。でも、凛とした姿は、まるでこの教室の女王様のように私は感じた。

蔑むような視線と下品なうわさ話は、ホームルームが始まるまで続いていた。教室に空席が一つ。一之宮さんが欠席だった。

張り詰めた空気を優雅に着こなすように、絵馬ちゃんは、教室でずっと毅然としていた。それでも、お昼休みになるとすぐに屋上に避難するように、私をつれて教室を出た。

「すごいね、絵馬ちゃん？」

「何が？」

冷凍食品しか詰まっていない弁当を膝の上に置いて、口に箸を加えまま気の抜けた声で、絵馬ちゃんが振り返った。

「だって、みんな絵馬ちゃんの悪口言ってるのに、絵馬ちゃん、いつも通りだもん。私なんか、おろおろして……」

「そんなの別にすごくないわよ。だって、悪口なんて慣れっこだし、ああして他人を馬鹿にして楽しんでるのは馬鹿ばっかりなんだから、相手なんかしてたら、こっちも馬鹿じゃない。ほんと、馬鹿ばっかりよね」

ため息混じりに言う絵馬ちゃん。でも『馬鹿』という言葉がいつもより多い分、苛々しているのかなって感じた。

「それに私、悪口言われても別に痛くもかゆくもないんだから、いつも通りにしてて当然でしょ。そりゃ、多少鬱陶しいけどさ、逆に哀れに見えてしまうわ、あの人たちが」

「絵馬ちゃんって、強いね」
私は本心から、そう思った。
でも絵馬ちゃんは、違う違う、と片手を仰いで否定した。
「なんて言ってたっけな……、みんながみんな悪口言われて、へこむなんて思うなよ人類、ってことかな」
うんうん、と何か納得したように頷く絵馬ちゃん。
何が言いたいのか今ひとつよく分からないけど、絵馬ちゃんは人の話を聞かない人だっていうのは、よく分かった。
寒いね、と絵馬ちゃんが唐突に呟いた。
たまに吹きつける風は、弱く、それでも冷たかった。もう季節は秋になるんだな、と感じる少し乾燥した風だった。ここでお昼を食べられるのも後少し。夏はそれだけで日焼けしそうなほど日射しが強く暑く、冬は箸をもつ指がかじかんでしまうほど寒いから、決まって屋上でこうしてお昼が食べられるのは春と秋ぐらい。
楽しい季節、それも、いつまでも続かない。
「今日。小夜子、休んでたね」
絵馬ちゃんが何の脈略もなくそんな事を呟いた。
うんと相づちを打ってそれ以上なにも言わなかった。言ってしまえば、土曜日の事を思い出してしまいそうで、怖かった。

「最近、小夜子の様子オカシイよね。って、私の人のこと言える状態じゃないけど」
自嘲(じちょう)するように笑いながら、絵馬ちゃんが呟いた。
「オカシイって……、何が？」
気がついたら、私はそんなことを訊いていた。
「あれ、気づかない。ほら、なんていうか、びくびくしてる感じ。あの小夜子がよ。男子以上に逞(たくま)しい小夜子が怯えてるのよ、子犬みたいに。だからかな、なんか攻撃だったな。この前もね――――」
絵馬ちゃんがまだ話している途中だったのに、それを遮るかのように、屋上のドアが閉まる音が響いた。
そっちを振り向くと、鳥居君と神籬君がいた。
二人は黙ったままこっちに向かってくる。私達はそれを黙ってみていた。そして近くまで来ると、鳥居君が呟くように言った。
「そこ、空いてるか」
私たちの隣を指さして、鳥居君はどこか不機嫌そうな口調で言った。後ろに立っている神籬君は、笑い声を押し殺しているようだ。
「……ここどころか、ほら、そこら一体お好きなところへどうぞ。でも、そんなにも私たちの隣が良いとおっしゃるのでしたら、別によろしくてよ。ねぇ、あやめさん」

絵馬ちゃんが訝しげな表情を一変させ、お嬢様風の振る舞いで微笑んだ。同意を求めるように見つめるから、私は頷いた。

するとお嬢馬ちゃんは勧めるように片手を出した。

「どうぞ。ありがたく思いなさい」

お嬢様のような微笑み。神籬君が先に座り、鳥居君は絵馬ちゃんを睨むように見てから座り呟いた。

「奥津城。それ、気持ち悪いぞ」

「なんだとーッ！」

お嬢様使用が崩れた。一瞬で。

そして私も、たったそれだけの事で笑ってしまった。

「あぁー、あやめ、あんたもまさかそう思ってたの？」

絵馬ちゃんが、怒ってますよ、とジャスチャするみたいに腰に手を当てながら私を見下ろす。

「う、ううん。私、絵馬ちゃんのそのしゃべり方、すごく好きだよ」

「あ、うー。いや、好きって言われてもね……」

困ったように髪を払いながら、やっと落ち着いて弁当を食べ出した。鳥居君もそれを見届けてからパンを取り出し、神籬君は大きなフランスパンをもう食べ出していた。

何度も、お弁当に向けていた視線を時々、鳥居君に向けた。ちらりと何度も鳥居君の顔を、姿を、挙動を、盗み見た。

土曜日の事……あの、鴉が群がった私の家の事を、鳥居君はどう思っているのか気になった。

大丈夫、鳥居君は黙っていてくれる。そう思った、そう思えた、そう信じられる、そうして安心させてくれる、だから私は、鳥居君の事が……。

「土曜日……」

唐突に聞こえたその単語に、心臓がどきりとはねた。

「変な飾りつけしたり呪いしたり、近所の鴉に野良犬や野良猫の肉を餌付けしたりした家が、あったんだってさ」

平坦な声。それが鳥居君の方から、神籬君の口から出た。

「なんでも祟りを恐れて狂った奴が起こした異常行動らしいけどさ。こんなんで祟りなんて防げるものなのか。どうなのさ、専門家」

そう話を振った先は、絵馬ちゃんだった。

「ふん。……さぁね。生憎と私、呪いや祟りなんて詳しくもなければ専門外よ。でも、今ここであんたの顔面を蹴り飛ばすのは専門だけどさ」

威嚇するような視線を放ちながら無愛想に答えた。でもそんな攻撃的な返答にも神籬君はまったく動じずに、それは物騒だと言って、続けた。

「でもさ、これが祟りに効くっていうなら、まだ分かるけどさ、ま、それにしったって気味悪いいだろ、そんな家。やる奴も住んでる奴もマトモじゃない」

気味悪い。

マトモ、じゃない。

責め立てられているような気がした。

抑揚のない声で、死刑を宣告されてた気がした。

ひどく、ほんとに、こわい言葉。

「別にいいじゃない。鴉がどこにいたって、あんたに迷惑かかってる訳じゃないでしょ。それに、自慢じゃないけど、私の家の周り森はね、野鳥の群生地よ。鳥の森の名は伊達(だて)じゃないんだから」

何気なく会話しているはずの絵馬ちゃんの言葉が、私を擁護(ようご)してくれているように感じた。

でも、神籬君の言葉は、鋭さをまして続けられる。

「それは自然のものだろ。意図的にそんな環境を作るのは普通じゃない。好き好んで鴉が群れるような家にしないだろ、普通さ。普通じゃないってことは異常ってことで、それをした奴ってんはつまりさ、異常者ってことだ。それは、ほら同じだろ――――殺人鬼と」

死刑宣告を告げるように明瞭とした発音で、放たれた言葉。

耳を塞いでしまいたかった。目を閉じてしまいたかった。何も考えたくない、何も思い出したくなかった。

けど何も出来ず。何一つ抗う術がなく私は、聴いてしまった。

「異常者ってのはさ、それだけで、俺達みたいに常識に生きてる人間にとっては、悪なんだよ」

抑揚のない冷徹な言葉。

私は叫びだしてこの場から逃げたくなった。

けど、臨界点に達する前に、

「ちょっとそれ言い過ぎよ。異常だから、それだけで悪いなんて、そんなこと、あるわけないじゃない！」

声を荒げたのは絵馬ちゃんだった。

まるで守られているような気がして嬉しい気持ちと、それを押しつぶすほど、辛さが神籬君の言葉を肯定するかのように押し寄せてくる。

雲が陽射しを遮る間、沈黙した。

それを破ったのは、神籬君だった。

「善悪の議論になると、決着はみないだろうけどさ。でもさ、個人的な感情としては、そんな異常者が近くにいるのってさ、やっぱり、嫌だろ」

それは否定できないほど、素直な感情だった。

「もしさ……、俺が噂の殺人鬼だったとしてさ、こうして手の届くほど近くにいるのが、嫌にならないか？」
「それは……」絵馬ちゃんが言い返そうと口を開いたけど、何も言い返せず閉じた。
理性では、そんな事はない、と言い返してやろうと思ったはずだけど、きっと……いえ、本能的に拒絶したんだ。だって……そうだよ。誰だって死にたくなんかないもの。だから平和でいたいし、平穏を望んでいるから、それを壊そうとするモノなんか、嫌だと思うのは、普通のことだもん。
だから、異常者だと思われてしまったら、今までどんなに善い人だっとしても、すべてを否定され拒絶されてしまう。
嫌われる。
「なぁ礼慈。おまえも、そう思わないか？」
神籬君は問いかけに、
「興味ない」
鳥居君は、言い捨てるようにそれだけ答えた。突き放すほど、拒絶するように強い口調で。
「おいおい、冗談。興味がない訳ないだろ礼慈」
「大げさだ。たかだ鴉が集っただらいで、騒ぎ立てることじゃない。そんなこと、関係ない」
強い口調で言い捨て、鳥居君は立ち上がって歩き出した。
「関係ないはずないだろ。もしかしたら、おまえの身近に、おまえの知ってる奴が異常者かもしれないんだぞ。普段何気なく付き合ってる奴が……殺人鬼と同じ異常者だとしても、おまえは興味もなく関係もないって、言えるのか？」
立ち去ろうとする鳥居君に問いかける神籬君の声は、まるで呪いのように重く、私自身に問い詰められているような気がした。
鳥居君が足を止め、顔だけ振り返った。
「それが、どうした」
毅然（きぜん）と言い放ち、鳥居君は屋上から出て行った。
残された私たちは、何を話す訳でもなく、沈黙に身を任せようとしていた。けど私は、じっとしている事ができず、鳥居君の後を追いかけた。直後に呼び止める絵馬ちゃんの声を無視して、走って追いかけた。
屋上と四階の階段の踊り場を隔てて、私は鳥居君を呼び止めた。
「榊……」振り返った彼は、ひどく驚いた表情をした。そして、何か言いたそうなに、視線を泳がせている。
「鳥居君。……やっぱり、鳥居君も気味が悪いって思った？
側に居たくないって思った？」
見下ろすような位置から、私は俯きながら訊いた。

関係ないって鳥居君は言った。……その通りだと思う。鳥居君には関係ないのは分かってる。だから、興味がないなんて言ったのも分かってる。そうして、拒絶されてもしかたないって分かってる。

でも、言って欲しかった。

面と向かって、拒絶された方が、

それはとても悲しくて、

きっと、泣き崩れてしまうかもしれないけど、

諦めることが出来るから……。

なのに、

「そんなことない」彼は強く、希望を口にする。

「で……で、も……、わたしの、うち……おかし、いんだよ……ほんとうに……変なんだよ。見た、でしょ……。それでも、そんなこと……どうして――――」

言えるの？

「私だって……嫌だもん。……そんな人の側にいるなんて、気持ち悪いって思うでしょ？　ヤタガラス様とか、祟りとか……おかしいよ……狂ってるよ！」

「榊……」

「異常者だって分かってるでしょ？　おかしいって、変だって……、普通じゃない狂った奴だって分かってるんでしょ！」

「ちがう、榊……」

「だから……同情して強がらないで！　はっきり言ってよ！　気持ち悪いって、おかしいって、狂ってるって、近寄るなって、おまえなんか……」

――――嫌いだって。

ぬか喜びの希望なんて、消しちゃうぐらい、はっきりと。

せめて、あなたの声を、聴かせてほしい……。

そうすれば、どんなに楽になれるか。

私は、絵馬ちゃんみたいに強くないから、針で痛めつけられるような生活になんて辛すぎて耐えられない。

だから、いっそ、辛い思いを重ねる前に、壊してほしい。

なのに、それすら。

「違う！　俺は、榊が好きなんだ！」

鳥居君は許してくれなかった。

頭の中が真っ白になった束の間、鳥居君が駆け上り、私の腕を握った。

「だから……だから関係ない！　異常だとか祟りとか、そんな関係ないんだ！　なにが異常か普通かなんて知りたくない。俺が知りたいのは、榊のことだけだ。それから、俺のことも知って欲しいけど……今は、俺が榊が好きだってことだけ、知って欲しい」

それから……と鳥居君は言って、
「榊が、俺のこと好きに……なってくるか、教えて欲しい」
私の腕を放した。今じゃなくていい、と言い残して、鳥居君は足早に階段を下りていった。
「う・そ……だ、よね」
私の腕に残っている、熱。
まだ消えていない、鳥居君の手の温もりと強さ。
何度も想像した状況、何度も思い描いた人から、何度も願った言葉を、私は、聴いたはずなのに、どうしてだろう、信じられない。
嬉しい、という気持ちがわき上がらない。
そのかわり、なんども繰り返し響く言葉。
響く。体の中で、鳥居君の声が響く度に、それが熱になる。
熱。じわじわと広がって、濃くなって、騒ぎ出す。
震え。体の奥から、頭の奥まで波のように押し押せてきた。
「あ……、うそ」口を押さえて、屈んで押さえ込む。
体の中で爆発する嬉しさを、じっと閉じこめた。
そうしないと、今に泣いて叫びだしてしまいそうだったから。
『俺は、榊が好きなんだ！』
その言葉は、溺死してしまいそう。
「……残酷だよ」

でも、喜びに頬がゆるんでしまう。
このまま……、
そう、このままいつも通りに過ごせたら、すごく幸せだ。

◇

放課後。午後の授業を欠席していた絵馬ちゃんが、教室に私しかいなくなるのを待っていたように、現れた。
「で、どこまでいったの？　礼慈とは」
開口一番に、そんなとんでもない事を訊いてきた。
「え？　……えぇっ」
絵馬ちゃんの問いかけの意味を理解するまで数秒、意図が分かって絶叫。絵馬ちゃんの表情が、すごく意地悪な笑みに満ちている。
「なななななな、なんで……」
盗み聞きしてたの、と訊くと絵馬ちゃんはきっぱりと否定した。
「さっき礼慈と会ってね。あいつ、あやめの名前出した途端、顔真っ赤にして逃げてったのよね。女の勘なんて必要ないぐらい分かりやすいわよ。こいつコクったな、って即バレね」

「……絵馬ちゃん、怖いよ」
しれっと言い当てた絵馬ちゃんの勘が、心底、すごいと思った。
私は、巫女姿の絵馬ちゃんを想像して卑弥呼を連想した。なんだか森羅万象を見抜いているのかも、とほんの少し思った。
「ふっふーん。君たちは本当に純情素朴馬鹿ップルよね。あ、これほめ言葉」
「褒めてるように聞こえないよ」
「だから伝えたのよ」
長い黒髪を払いながら、絵馬ちゃんは自分の席の方へ歩き出した。それから鞄を持った。教室に現れたのは、ただ荷物を取りに来ただけみたい。
「それで……、どうするの？」
絵馬ちゃんが、颯爽と鞄を担いで振り返った。
何が、と聞き返すと、怪訝な表情を浮かべた。
「決まってるでしょ。告白されたんでしょ、どう返事するの？　あやめの様子からだと返事はまだみたいだけど……。ま、そっちの方こそ、決まり切ってるものね。だって、両想いなんだから」
意地悪げに口元をゆがめて言う絵馬ちゃん。
私は、うん……そう、だね、と曖昧な返事しか出来なかった。
「どうしたの？」
絵馬ちゃんが、また近づいてくる。
「もしかして悩んでる？　今更悩むことじゃないと思うけどな……。好きなら好きって、素直に好き返しすればいいのに。あやめもやっぱり、染まっちゃったのね」
「染まった……？」
「そうよ」まるで見捨てるように、絵馬ちゃんは私に背を向けた。
「誰だって始めは白だけど、大人になるってことは、何かの色に染まるってことよ。あやめは、そうね……赤が似合うわよね。そのリボンみたいに、情熱的な赤がね」
まるで歌うように呟いて、絵馬ちゃんは教室を出た。そして、教室を出る間際、顔だけちょこんと覗かせた。
「この幸せ者！」
なにか揶揄すようでも恨み言でもないような、不思議な叫びを残した。
私は、暫く経ってから教室を出た。
そして、バスに乗って家に帰る。その帰り道、私は一人。
「幸せもの、か……」
誰にでもなく、呟いてしまった。
幸せ……、確かに鳥居君から、好きだって言われた時、すごく嬉しかった。すぐにでも、私も好きと言いたかった。

でも、言えない。言えないよ……。

言ったら、ダメだと思った。

それを言ったら、もっと辛い思いをすると感じたから。

どんなに言葉を尽くして私の家は今、普通じゃない。普通じゃないって事は異常ってことで、やっぱり嫌悪されてしまう事だと思う。

土曜日のあの事件以来、近所の人達の私たち家族を見る目は、まるで犯罪者を見るような軽蔑と非難に満ちたものと、車にひかれたまま放置された子犬を哀れみ遠ざけるようなものばかり。今までとは違う。

きっとそのうち学校中にも広まって、私は、疎外されてしまう。誰だって、殺人鬼と同じ異常者の近くにいたくないし、自分の周りから排除したいと思うもの。ちょっとの違いだって、あの人達は、許容できずに排除するのだから。

そうなったら私はきっと、耐えきれずにまた……。

私が異常だって知られたら、私に関わるだけで、その人まで同じような目で見られてしまう。

どうせ壊れてしまうなら、どうせ追い出されてしまうなら、独りがいい。誰かを……好きな人まで巻き込みたくなんかない。だって、その人まで、私と同じ目に遭ってしまうから、それが辛い。

こんな生活は、とても、辛い。

巻き込まれてしまうのは、辛い。

だって巻き込まれただけで、私自身は普通なんだから。みんなから嫌われるたり悪口を言われたら、やっぱり心が痛いと思うもの。みんなと同じように、落ち込んだり、傷ついたり、泣きたくなることだってある。

私は、普通だから。

私は、巻き込まれたんだ。

だから、私は異常じゃない。

異常なのは……異常なのは、お婆ちゃんだけ。

もしも、八年前に、怪死事件でお祖父ちゃんが死ななかったら。

もしも、昔の匣が発見されなければ。

もしも、連続殺人事件なんて起きなければ、

もしも、祟りなんて信じなければ、

もしも――――お婆ちゃんなんかいなければ。

「あ……。何考えてるんだろう、私。……最低だ」

お婆ちゃんは家族なんだ。

家族なんだから……。

「大丈夫。大丈夫だよ……」

言い聞かせて、気づくともう家の前。

玄関の扉に手をかけて、もう一度。

「家族なんだから、助け合わなくちゃ」
お婆ちゃんが大変な思いをしている。
だったら家族の私が、お婆ちゃんを助けてあげなくちゃ。いつも優しくしてくれたお婆ちゃんを、今度は私が優しくしてあげないと。
どんなに辛いことがあっても私たちは、掛け替えのない家族だから。
また、楽しい毎日が送れるように、がんばらないと。
私が、くよくよしてたらダメだ。
「ただいまっ」
玄関を開けた。
「おかーさん　おばーちゃん……」
途端、むせ返るほどの血の臭い。
暗い。
廊下。
ずだ、ずだ、ずだ、ぺちゃ、くちゃ。
お母さんが。
包丁を。
振りあげる。
振り落とす。
ずだ、ずだ、ずだ、ぺちゃ、くちゃ。
刺さる。
包丁が。
刺さる。
何かに。
刺さる。
何度も。
刺さる。
血飛沫。
ずだ、ずだ、ずだ、ぺちゃぐじゃ――――。
「■■■■■ッーーーーー」
叫び声。
ひびく。
刺さる。
包丁が。
横たわる。
何かに。
お母さんが。
またがる。
何かに。
刺さる。
差し込む日射しが、かすかに廊下を、照らす。

照らした。
包丁が刺さる、何かを、
血飛沫をあげる、何かを。
ずだ、ずだ、ずだん、ぐじゃぐじゃ……。
「お母さんッ――――ッ！」
駆け寄る。
包丁を振り上げる母を、
背後から取り押さえる。
水音が鎮(しず)まる。
振り上げた包丁が止まる。
日射しが閉ざされる。
暗い廊下。
水たまり。
むせ返るほど、鉄の匂い。
横たわる。
「お……ばあ――――」
お腹が壊れてしまった、お婆ちゃんが、あった。
血。血だまり。
お婆ちゃん。
血。血だまり。

動かない、お婆ちゃん。
カランと包丁が落ちて、お婆ちゃんの頬を切った。
それでも、お婆ちゃんは動かない何も言わない。
「しかたなかったのよ……」
冷静な呟き。
うなだれ俯くお母さん。
「こうするしか……こうするしか……なかったのよッ」
震えてる。お母さんの体が震えている。
動かない。お婆ちゃんの体が壊れてる。
「おばあちゃんを止めるには……こうするしか、こうするし、か……なかったのよぉ……」
充満する血の臭い。
お婆ちゃんの血。
お婆ちゃんの命。
零れ出す血が、廊下に広がる。
お婆ちゃんの血が、私の膝に触れた。
生ぬるくて、重たい水。
じわじわと触れた。
助けて、助けてと、まるで縋るように浸食してくる血。
立ち上がった。

縋るように広がる血。お母さんのスカートを汚す。
お母さんが振り返った。
血で汚れた、顔。
綺麗だった髪が乱れて血で汚れている。
暗く、汚れた影に犯された顔。
「あやめ……」しがれた声で、私を呼ぶ。
まるで、汚く老いぼれた鴉のような声で、
「あやめも、そう思ったでしょ。……お婆ちゃんなんか、いなくなればいいッて」
私に金縛りにかけた。
何も言えなかった。
否定することも頷くことも。
何も出来なかった。
「そうよね……しかたなかったのよ……そうでしょ……ねぇ、あやめ……あなたも、そう、思うわよね……」
お母さんが痙攣した頬で笑う。
壊れたラジオのように雑音混じりに笑う。
笑ってる。涙声で笑ってる。
「あやめ……あヤメ……あやぁ、め……仕方なかったのよね……ねぇー……あや……め……あやめ！」

「ひぃっ――――」
壁に押さえつけ、私の肩を掴むお母さんの手。
指が、爪が、皮膚に食い込む。
いたい、いたいよ、いたいよおかあさん、そう言っても止めてはくれない。
「私だけのせいにするの？　お母さんが全部悪いっていうの？　ぜんぶん、ぜんぶお母さんが悪いって言うのあんたは！」
どん、どん、と壁に押しつける。
「こうしなきゃダメだったのよ！　だから！　だから私がやるしかなかったのよ！　私が……私がやってあげたの！　あなたのかわりに！　あやめのためにやったのよ！　家族たのためにこうするしかなったのよ！　それなのに……それなのに全部私ひとりの罪にするっていうの、あんたは――ッ！」
突き飛ばされ、激しく壁にぶつかって頭を打った。
一瞬、真っ白になる。
立ち上がれなくて、その場に座りこんだ。
「あやめは……パパのこと、好き？」
痺れた頭に響く、声。
「宗一郎さんのこと……好きよね？」
冷静な問いかけ。私は、うん、とだけ頷いた。

「そうよね。だったら……」
甘くて熱い夢を見るような表情で、
「――――隠さなきゃ」
お母さんは、少女のように囁いた。
とても幸せそうな笑顔で、ざらざらの笑い声を漏らして、動かなくなったお婆ちゃんを一瞥して、血まみれのお母さんの手が、私の頬を包むように触れた。
体が、一瞬微動して、死んだように固まる。
「宗一郎さんに、こんな汚いもの見られたら、嫌われちゃうから……嫌でしょ、あやめも、パパに嫌われるの。捨てられたくないでしょ？　見放されたくないでしょ？　居なくなったら嫌でしょ？　ね？　……だから、そうよ……早く、はやく……汚れを、隠さなきゃ」
震えてる手。
壊れた微笑み。
血が、私を、汚す。
汚れ。
汚れたら、嫌われるの？
汚れたら、いけないの？
汚れたら、嫌われるの？
パパに――――？

「あやめ」
濁った眼差しを向けて、お母さんは鴉のように高い声で言う。
「工具箱を持ってきなさい。それから……匣も、探してきなさい」

◇

静まりかえった浴室。
暗い。
小窓から差し込むのは、幽かな陽射し。
外から、鴉の声が聞こえる。
綺麗好きなお母さんが毎日掃除しているカビ一つないタイル。市松模様のタイルの上に、お婆ちゃんが置かれた。
まだ乾ききっていない血。
ドス黒い傷もそのまま。
弛緩した頬。
だらしなく開いた口。
力なく微かに開いている白目。
ぽたり、と蛇口から水滴が落ちた。

そして、けたたましい音を立てて、工具箱の中身がタイルの上に散乱する。お母さんはおもむろにノコギリを拾った。
「おかー、さん……なに……」
するの？　と私は浴室の入り口から見ていた。
まるで幽霊みたいに緩慢に屈んで、お母さんは顔だけ振り返った。
「このままじゃ運ぶの大変でしょ。だから、バラバラにするのよ」
それが当然だという風に、とても冷静で落ち着いて口調。おかえり、といつも言ってくれるお母さんの声で言った。
私は口を開けたまま、なにも言えず立ちつくした。
「バラバラに解体して隠すの、匣の中に。それで……今起きてる連続殺人事件の犯人の仕業にするのよ」
お母さんは、笑った。
それしない正解を見つけたように恍惚（こうこつ）とした笑み。
「え……」
お母さんの考えを理解するのに、目眩がするほど時間がかかった。それほど唐突だった。……何もかもが唐突で、予想しなかった事ばかりが私の目の前で起きて、勝手に進んで、置いてけぼりにせず、巻き込んでいく。
なにも、実感がないまま、こんな所まで。
「そんなこと……」
「心配ないわ。大丈夫よ、うまくいく。……犯人だって分からないわよ、死体が一つぐらい増えたって……どうせ、何人も殺してるんだから。ふふっ……分かりっこないわ……バラバラにしたら、分からないわよ」
お母さんの手に、錆び一つないノコギリ。
ぞんざいに置かれたお婆ちゃん。
「二人でやれば、大丈夫よ。早く隠さないと。隠して、隠すのよ。それで終わりよ。それでやっと、この馬鹿馬鹿しい騒ぎが終わるのよ。また、いつもどおりの生活に、もどれるの……」
ノコギリの刃。ギザギザの鉄。
細いお婆ちゃんの膝に触れる。
擦（す）れるような笑い声が聞こえる。
嘲笑（ちょうしょう）うような鳴き声が聞こえた。
「お母さん！」お母さんの腕を押さえた。
「やめて！　お婆ちゃんだよ！　お婆ちゃんなんだよ！」
腕を取り押さえて、お婆ちゃんから話そうとした。
「おかーさん。ねぇっ、おばーちゃんなんだよ、お母さん！」
「静かになさい！」
ばちん、と音が響く。
振り払われるように、頬を叩かれた。

浴室の壁にぶつかってから、叩かれたことに気づく。
「ご近所に聞かれるでしょ、静かにしなさい」
響く。お母さんの声が、響く。
反響して、金切り声になって耳鳴りになる。
頭が朦朧(もうろう)となる。力が抜ける。
タイルに手をついて、尻餅つくように座った。
私を見下ろすお母さん。
綺麗だった黒髪が赤黒くなって、顔に不気味な影で覆っている。
「宗一郎さんと一緒に暮らしていくためよ……幸せを取り戻すためなのよ。そに、これはもう――――お婆ちゃんじゃないわよ」
タイルの上に横たわる『それ』を見下ろしてお母さんは、冷たく言い捨てた。自分のお母さんなのに。
「や……」
お婆ちゃんの右足に、ノコギリの刃が食い込む。
「やめ、……」
少しノコギリが引いた
「やめて……」
どろり、と糊(のり)のような血が垂れた。
押し戻して、微かな肉が、小さく千切れる。
「……めて……や、め……て」

引く。
押す。
引く。
押す。
ゴギリゴギリ。
硬い何かを削る。
引く。
押す。
引く。
押す。
ヒューヒュー、と壊れた呼吸音が木霊する。
「やめて……」
頭の奥にまで響く音。
削る。削る。削る。
「おばし……ちゃん……」
血が、ゆっくりと垂れる。
「おば……ちゃん……」
ゴギリゴギゴギ、削っていく。
ノコギリの刃が止まった。
引き抜かれる刃。

血が塗られた刃。
お母さんが、それを捨て別のものを手にした。
分厚い鉈。
それを傷口に当て振り上げ、
「うわぁぁぁぁぁ――――――！」
お婆ちゃんの足を切断し、私の悲鳴を両断した。
タイルを砕く音と共に小さく跳ねた片足。小さな足。ずっとお婆ちゃんを支えていた足。皺と染みのある裸足。
鈍く転がって止まる。
私の目の前で止まった。
「ぁ……」
切断面。千切られた肉。爛れたように。垂れる。血。べったりとした血。淡い赤色に塗れた骨。千切れた足。切断された足。足？
お婆ちゃんの……身体、千切られた。
「ウエェェぇうーーーーーーーーーー」吐いた。
大きな咳と共に吐き出した。
身体の中のモノが全てひっくり返ってしまいそうなほど、吐いた。
吐き出した。胃袋が反転してしまったように何もかも吐き出した。
「ッゥウェッ…ゲッッホッ…ウェッ…お、ェェェーーー」
お婆ちゃんの身体に染みついたお香の匂い。
お婆ちゃんの身体から溢れる血の臭い。
私の身体から吐き出された中身の臭い。
混ざる臭いが、胃と肺を締め上げる。
平伏す。異臭が私を押しつぶす。
身体の中から捩れ曲がる錯覚。
鼻の奥を突き刺す吐瀉臭。
いつの間にか、涙が出ていた。
瞼を閉じる。
一切闇。
金属がぶつかる音が響く。
鈍く低い音が響く。
水気のある何かが弾ける音が響く。
繰り返し、繰り返し、
響いて消えて、また生まれる音。
『あやめちゃんの髪は、とても綺麗ね』
いつも、私の髪を梳いてくれたお婆ちゃん。
小さくて暖かくて柔らかな手で優しく。
『ずいぶんのびちゃって』
『お母さんより長くなったかな？』
『そうだね……。可愛らしくなったね』

お婆ちゃんのゆっくりとした喋り方が、
私は好きだった。
『お母さんも昔は、こうしお婆ちゃんが髪を結ってあげたんだよ。ちょうど、そうだね……あやめちゃんの同じぐらいの頃だったかね……。めっきりお洒落さんになってね』
撫でるようにクシを動かして、子守歌のように穏やかな声で、お婆ちゃんいつも、私と話しをしてくれた。
『あやめちゃんも、すっかりお嬢さんになったね』
『ねぇおばあちゃん。私ね、好きな人が出来たんだ』
それがとても嬉しくて、お婆ちゃんに聞いて欲しかった。
お婆ちゃんは、そうかいそうかい、と満面の笑みをうかべて頷いてくれた。
『だったら、もっと可愛くなって、その人に、あやめちゃんが好きになってもらえるように、がんばらなくちゃね。……あやめちゃんが好きになった人だもの……きっと、素敵な子なんだろうね』
『うん』
どんな人なんの、とお婆ちゃんが訊いてくれると、
私はもっと嬉しくなって話をした。
『あのね、その人はね――――』
「……あやめ……」
すり切れた声で、我に返る。
白昼夢の残骸そのままに、瞼を開けた。
乱暴に塗りたくった様な、タイルの血。
浴槽の壁際には、黒いビニル袋。
血がついた金槌。ノコギリ。折れた包丁が三本。
そして、
「あやめ……」
手足がなくなったお婆ちゃん？　――――の身体。
「あやめ」
「っ……」こみ上げる異物感。
とっさに口を両手で覆った。けど、拒絶するように吐き出した。
「うぇぇぇーーー……おぇぇぇぇ……ッ……っおぇっぇーー」
空っぽの胃。吐き出せるものはもうないかのように、べちゃっと液体がタイルの上に吐き出された。
喉の奥から突き刺すような痛み。鼻の奥から突き刺す酸味。口の中に広がる血の味。すべてが不愉快で、すべてが気持ち悪くて、すべてが痛くて、何もかもが……呼吸をすることすら苦しい。
「あやめ」
伏せた顔を上げた。
私の目の前に、お母さんが立っている。

いつも綺麗に洗濯して汚れ一つなかった服が、どろんこ遊びをした後のように汚れている。泥じゃなくて血。服にしみこんだ、赤黒い血。そして、赤黒く錆びたような鉈を持っていた。

「あやめ……お母さんはやったわ……だから、次は、あなたよ」

だらりと下げた腕。鉈を差し出すように少し挙げた。

「いや……」

「ほら……立って……さぁ握って」

私に、鉈を持たせる。両手で持った。重くて、それだけで倒れてしまいそうなほど、重く感じた。

お母さんの両手が、私の両手を包む。

一瞬冷たくて、暖かい手。

血が、べっとりついた手。

私の手に、血がついて、

私の手が、血で汚れる。

「ちゃんと握って……」

「ゃ……」

包み込むように後ろから私を支えるお母さん。

「いや……いやだ」

「あやめ」

体温が、伝わる。

暖かい。

「やだ……よ」

「あやめ」

規則正しい呼吸が、聞こえる。

「いやだ」

私の手に、お母さんの爪が食いこむ。

痛い。

無惨な形に、一方的な暴力で姿が変わってしまった、お婆ちゃん。

これを……まだ、バラバラに、する、の、私が……？

「イヤ！　イヤだいやだ！」

「あやめ！」

身体を振って暴れた。

お母さんが締め付けるように密着してくる。

手の変形してしまいそうなほど、握られる。

私の腕が、拘束される。

「あやめ！」

耳元で叫ばれ、頭の中がかき乱される。

「言うことをききなさい！」

腕を曲がらない。

「いやーーっ」

固まってしまう身体。
「こうするしかないの！」
身体が、言うことを聞いてくれない。
「いや！いや！いや！いや！やだ！」
私の身体なのに、私の身体を支配しているのは、私じゃない。
「あやめ！」
まるで……、
「パパと一緒にいられなくなってもいいのッ？」
私は、お人形さんのように、
「――――あ」
お母さんの操られるままに鉈を振り上げ、
「いやーーーーーーーーーッ！」
お婆ちゃんの首へ――――
「おばーちゃーーーーーんッ！」
――――振り下ろした。
一瞬だった。一瞬が永遠に伸びる。
刃が落ちる。
私は刃になる。だから感じた。

刃が皮膚にふれた。微かな弾力。
吸い込まれる。
骨に当たる。
切れない。だから砕く。
硬い。
柔らかい肉。ゼリーみたい。
肉が刃を咬む。
反発。
柔らかく硬い。
切断する幾重（いくえ）の線。
伝わる。
弾力
張力。
感電。
すべてを砕く。
すべてを切る。
痺れる。
加速する刃。そのまま、タイルにぶつかる。
繰り返し繰り返し、振り下ろして振り下ろして。
数秒だったのに、気を失ってしまいそうなほど長い感覚。

水風船が破裂したように弾ける血潮。
服に散る。生ぬるい液体。お婆ちゃんの血。
痒い。それが痒かった。
肌にかかったお婆ちゃんの血が、痒い。
突き刺さるように痒い。痒い。が。痛い。
可笑しくなりそう。
狂ってしまいそう。
壊れてしまいそう。
「いい子よ。偉いわ、あやめ……」
耳元で聞こえたお母さんの声は、不鮮明、
遠くから聞こえる鳴き声だけが、鮮明に、
――――いつまで　いつまで――――。
私に纏い憑く。

◇

深夜になって、私とお母さんは家を出た。
二つの匣。
旅行鞄のようにカートに乗せて運ぶ。
外は静か。寝息さえ聞こえてきそうなほど静か。水辺の虫と草場の虫の音だけが、幽かに聞こえるだけ。
明かりが灯っている家は数える程しかない。住宅街は、覆うものが違うけど森の中のように暗い。ただ街灯だけが、道がまだあると教えてくれるように、頼りないけど灯っている。
空には星。数え切れないほど、数えるのが怖いほどの沢山の星屑。ちりばめられた硝子片のようで、見ているとなんだか悲しくなってくる。もとは、綺麗な一枚だったはずなのに、今はもう、どうしたって元には戻ることはない……。
「あやめ」
前を歩くお母さんが、振り返らずに私を呼んだ。
何？　と聞き返すと、お母さんは何も言わなかった。
ただ重苦しい空気と闇が充満した夜道を私たちは歩いた。
生ぬるい風。
家から外に出たのに、私に纏い憑く空気は軽くならなかった。

夕方に、浴室でバラバラになったお婆ちゃんの身体を、ビニル袋に包んで匣に入れた。お婆ちゃんの部屋にあった桐の箱。電子レンジぐらいの大きさの二つの匣に分けた。それを和室の縁側の下に隠して、浴室を掃除した。廊下の血も掃除した。

パパが帰ってきても、気づかれないように隠した。

お母さんは、何も無かったように服を着替えてから、夕食の準備を始めた。お婆ちゃんを殺して、バラバラにしたのに、その手でお母さんはお肉や野菜を切って料理をした。

まるで本当に、何もなかったみたいに。これは全部、夢だったんだよ、と錯覚してしまうほど、お母さんはいつもの生活を続けた。

私は部屋に籠もった。とても、ご飯なんて食べられないし、パパの顔だって、見られない……いえ、見られたくなかった。

そして深夜、私はお母さんに起こされた。

「あやめ。〝荷物〟を運ぶわよ」

起きたばかりで、ぼんやりしていた。

「一緒に行くのよ。……一人にすると、何をするかわからないから」

お母さんは、お婆ちゃんをバラバラにした時と同じ目で私を見た。

「なにも……しないよ……わた、し。……だって、家族だよ」

「……行くわよ」

お母さんはそう言った。

どこへ行くの？　と私は訪ねた。

「鳥の森神社よ」

明かりを避けて、音を立てないように、存在を誇張しないように、私とお母さんは夜道を歩いた。闇にとけるように、歩く度に人間の何かを捨てるように、お婆ちゃんの身体が入った匣を引いて歩いた。

見慣れた道。毎日、ここを通って絵馬ちゃんのお家へ行っている。

通い慣れた道、何度も見た景色、代わり映えのない町。なのに、見知らぬ町に迷い込んでしまったように、とても心細くて、周りに何があるのか、この先に、この道の先、この曲がり角の向こうには、この壁を超えると……何があるのか、分からなくなってしまう。

ただ夜だから、ただお母さんと一緒だから、ただ匣を引いているからというだけの事なのに、なんだか、もうここには私の日常がないように感じた。そう思うと、心が焦げてしまいそうなほど寂しくて、思いっきり泣いてしまいたくなってしまうのに、私は泣けなかったし、嘆きを口にすることもなかった。

ただ、人目を避けるように夜道を歩いた。

誰にも見られず。隠れて生きるように。見つかってはいけない、という強迫観念にだけ監視されて淡々と歩く。

まるで殺人鬼みたいだと思って、くすりと笑ってしまった。

「神籬君の……言ったとおりだ」

私の呟きもまた、すぐに影に溶けた。
何度か生ぬるい風に晒されて、その度にどこか遠くで、鳥が鳴く声が聞こえてきた気がした。
それは、鳥の森神社に近づくと、はっきりと聞こえた。
樹海に埋まった神社。大木のトンネル。シンプルなデザインの朱い鳥居。まだ緑の葉に包まれている木々は、今は闇に包まれ、風が吹く度に不気味な呻り声を響かせる。
石畳の参道が、まるで月明かりに共鳴しているかのように、白く、さらに奥にある神社へと導いてくれる。
けど私とお母さんは、境内へ上がる石段ではなくて、霊園と描かれた朽ちかけの看板が差す小道へ入った。
緩やかな上り坂。波のような勾配。血管のように浮き出た木の根。
二人並んで歩くには狭い道幅。
何度か木の根でカートが止まってしまった。
お母さんが小さな懐中電灯を持って先を歩く。
私はすぐ後ろを見失いように追った。
細い木に囲まれた森。
しばらく歩いて、お母さんは急に立ち止まって、カートに匣を固定してい紐をほどきだした。

「森の中に捨てるわよ。……ここなら見つからないし、もし……見つかっても、殺人鬼の仕業になるわよ。っふふ」
お母さんは、匣を抱えて道のない森を歩き出した。私も、もう一つの匣を抱えて後を追う。
重たい。ずっしりと肩にのしかかるような重さ。抱えていると、気のせいかも知れないけど、暖かみを感じる。
不規則に立ち並ぶ樹木を縫うように奥へ進む。まっすぐ進んでるつもりでも、徐々に斜めに。このまま、もし歩き続けたら、もう戻れない気がした。
見上げた。枝と葉の隙間から星空が見えた。
月の光が僅かに届く、けど、足下までは鮮明に照らされない。闇に慣れてきた目でも、たった五メートル先は暗闇。
時間も、方角も、場所も、自分の存在さえ稀薄になって漂ってしまいそうな空気が、ここには充満している。
この町に超してきた時、鳥の森は幽世に通じているから入ったらダメだよ、とお婆ちゃんが言っていた。迷い込んだらもう二度と出てこれない、という意味なんだろうと私はその時思った。
ずいぶん長い間歩いた気がした。
フクロウの鳴き声が聞こえる。でも、どこに居るのか分からない。すべて闇の中から聞こえる。

お母さんが立ち止まったから、私も追いついて止まった。
広場のように歪な円形に木々が囲い大きな石が五つあった。まるで、大昔にここで何かの神事が行われていたような、人の意思が感じられる場所だった。お母さんが辺りを一度懐中電灯で照らした。木々には枯れ葉のような紙が張られていたり、しめ縄らしきモノが巻かれていた。それでも、一年二年前ではなく、もっと古いものなのは一目で分かった。
「ここにしましょう」お母さんは呟いて、匣を岩の影に置いた。
そして私が持っていた匣を受け取って、それを隠す場所を探すように、辺りを歩いた。
私は、少し離れた場所から、それを見ていた。
フクロウの鳴き声が、響き渡る。
遠くから葉がこすれる音がする。
そして、一際強く風が吹いた。
森全体がうねり、低い叫び声を上げる。
生ぬるい風が、私の頬を撫でた。
その瞬間、背中に、冷水を突き落とされたような寒気を感じた。
反射的に、振り返った。
薄い闇色のフィルムを張ったような視界。
私の目が、ピントを調整しながら望遠する。
瞳孔(どうこう)が広く軋みを感じた。
乱雑にそびえる木々の間に、一筋の道を幻視した。
木々の隙間差の先。細い竹林がある。
そこに、幽かな月光を纏い闇を寄せ付けない純白があった。
細長い純白。朧気な輪郭。
まるで自動的に、ピントが調整される。
私の眼球が、恐ろしいまでに、それを鮮明にとらえた。
「っあ……」
両手で口を塞いだ。思わず悲鳴を上げそうになった。
加熱する眼球が痺れる。
見える。
それは、白い着物の子供。
それは、よく知っている。
だって、友達なんだから。
「……シキ、くん……」
急に、胸の奥が震えて固まった緊張が崩れそうになった。涙が出そうなぐらいすごく安堵(あんど)して、すぐに駈け寄って助けて欲しいと思った。シキ君なら、きっと助けてくれると思った。
私の足は、賭だそうと踏み出した。
けど、違和感が私の足を凍らす。

何か言った。
聞こえない。
木々のの葉音がノイズのように響く。
シキ君の口元が、動く。
はっきりと、見せた。
それが、私の頭の中で声と鳴って響く。

い・つ・ま・で。

それだけが、私には、聞こえた。
そして、固執に反響する。
その声で溺死してしまう。
その直前、
「あやめ」
お母さんの声が私の意識を掴んだ。
振り向くと、お母さんは匣を隠し終えていた。
「終わったわ。……どうしたの……誰かいたの？」
お母さんは私の背後、シキ君が居た方に懐中電灯を向けた。
鮮烈な光が、闇色のフィルムを破って木々を照らす。
そして竹林の方まで照らしたが、シキ君の姿はもう無かった。

「誰も……いなわいね。そうよね、いるわけないわ……お化けじゃあるまいし……」
お母さんの声は怯えていた。もし誰かに見られたらと、想像したに違いない。だから、無闇に懐中電灯を振り回さずにすぐに地面に光りを落とした。
お化けじゃあるまいし、とお母さんは言った。けど、この森には妖怪がいると、シキ君が言っていた。そして、何か忠告をしてくれたはずだ。……なんて言っていたんだっけ。
『鳥の妖怪が住まう森。森には響き渡る、鳥の鳴き声が』
難しい事じゃない、何かをしてはいけないって教えてくれたんだ。
『それを聞こえたら、妖怪が現れるでしょう。
そしたら、とり憑かれてしまうかもしれない。
だからね、あやめちゃん――――』
それは、たしか……。
『夜。森に入ってはいけない』
警鐘を鳴らすように森全体がざわめいた。
ざらざらとした空気が駆け抜け、
私の耳もとで囁いた。
かん、かん、と乾いた音と共に。

――いつまで　いつまで
いつまで　いつまで
いつまで　いつまで――。

姿が見えない、鳴き声だけが現れた。
お母さんは元来た道へ戻ろうとする。
聞こえていない。お母さんには聞こえない？
私にだけ、その不気味な声が聞こえる。
掠れた、低い声。
まるで喉が壊れたような声が。
どこからか……。
ふと、置き去りにされる匣の方を見た。
いつまで、と怨めしく寂しそうな鳴き声が聞こえた気がした。
それは気のせいだ、と私は、少しでも早くこの森から出たくてその場を去った。お婆ちゃんを一人、バラバラのまま残したままに。

## ７／九月二十一日（火）

朝。
それはどんなに辛いことがあっても、どんなに悲しくても、どんなに苦しくても、無神経な程いつもどおりの光を携えてやってくる。
あまり眠れなかった。まだ夢の中に浮かんでいるような気分で、私は起きた。リビングに降りると、いつもの光景。お母さんがいて、パパがいる。そして、おはよう、と挨拶をする。昨日の事が、映画の中のことのように、ここには私の日常がある。
出かける間際、玄関でお母さんに言われた。
「いつも通りにしなさい。絶対に、気づかれないように、何もなかったように過ごすのよ。難しい事じゃないわ、普通にしてればいいのだから……。いいわね、あやめ」
だから、私はいつものように学校へ行く。いつものように、絵馬ちゃんのお家へ行って、絵馬ちゃんと一緒にバスに乗って、学校へ行く。
いつものように……、普通に。
教室でクラスメイトとも普通に話もした。授業も普通に受けた。
休憩時間に絵馬ちゃんとも、普通にいつも通りに話もした
なにも変わらない。

学校だけが、なにも変わらない。
学校だけが、楽しい日常のまま。
お昼休みになると、いつも通りに、絵馬ちゃんが屋上で食べようと誘ってくれた。一之宮さんも一緒。
一之宮さんは、とても気分が悪そうに元気がなかった。
屋上に向かう途中、廊下で神籬君と鳥居君に会った。
「ありゃりゃ。礼慈、風邪でもひいたの？　顔朱いよ。ありゃりゃ、あやめも。二人とも風邪？　何したの二人して」
一瞬、鳥居君と目があった。
「ふぅーん。小夜子、この二人怪しいわよ。すっごく怪しい。犯罪的に怪しすぎる。連行しちゃいましょうか？」
「……あんたに任すよ」どうでもよさそうに手を振る。
「よし神籬、そいつを捕まえて連れてきて。逃がすなよぉ」
「いいけどさ。おまえ、元気だな。物騒なぐらい」
絵馬ちゃんを先頭に屋上へ。いつものように、私たち以外に誰もいない。
私の右隣に絵馬ちゃん、一之宮さん。左隣に鳥居君、それから神籬君。一列に並んで座って、それぞれお弁を食べ始めた。
「あれ、あやめ。あんた……もしかしてお昼、それだけ？」
「うん。……そうだよ」
私はビニル袋に入ったパンを食べながら頷いた。
「そうだよって、お弁当は？　いつもおばさんが作ってくれるでしょ。っていうか、ホントにそれだけで足りるの？」
「うん。お母さん、今日お寝坊しちゃって。購買部で買うこと無いから、どれぐらいで足りるのかわかんなくて……」
「だからってパン一つは倒れるぞ。ほら、私の少し分けてあげる。レトルトだけど」
「ありがと」
絵馬ちゃんが、お弁当の蓋にいくつかおかずを乗せてくれた。
「ちゃんと食べないと、小夜子みたいになるよ。っていうか小夜子も少なすぎ。いつもコンビニ弁当なのに、あんパン一つは少ないよ」
「……食欲ないんだ。それに私、絵馬と違って燃費いいの。あんたが多すぎなの。……神籬を見てみなよ、フランスパン一斤（きん）よ」
一之宮さんが指さした方に、私と絵馬ちゃんが向いた先には、フランスパンをそのままかぶりつくように食べている神籬君がいた。
「あぁー。神籬、前から訊こうと思ったんだけど。あんたそれで足りるの？　もっと食べないとそのうち糸みたいに細くなっちゃうよ」
「大丈夫さ。奥津城が食い過ぎなんだ。太るぞ」
「あんた、言うことがいちいち挑発的よ。喧嘩売ってるの？　今なら亀にネギしょわせて買ってやるよ」

「奥津城、亀じゃなくて鴨だ」
ひさしぶりに喋った鳥居君が、冷製に訂正した。
「いいでしょ。鴨よりも亀の方が縁起良いんだから。うちの神社は縁切りが得意だから、喧嘩にはちょうどいいわよ」
「え……縁結びじゃないの、神社って？」
私は唐突にわき上がった疑問を、絵馬ちゃんにぶつけると、片手で髪をはらって得意げな笑みを浮かべて、そうよ、と答えた。
「縁起っていう言葉はね、神道の言葉じゃなくて仏教の言葉なのよ。だから、縁結びの神様っていうのは、仏教と縁の深い神様を祀ってある神社ぐらいじゃないのかな。うちの神社、鳥の森神社っていうのは、なんていうのかな『死』や『黄泉』とかっていう、あの世に関係する神様を祀ってたらしいのよ。この世とあの世って別世界でしょ、それにそういう『死』に纏わるものって、日常生活からなるべく遠ざけるものだから、自然とうちの神社には、罪穢れや忌諱するモノを日常生活から遠ざけるっていう御利益が広まったらしいの。まぁ、簡単にいえばゴミ捨て場ね。だらかさ……時々、呪いの人形だの心霊写真とか、動物の死骸を捨てるバチ当たな連中がいるのよね。困ったものよ」
「へぇー。詳しいんだね、絵馬ちゃん」
「全部、爺やからの受け売りだけどね。私、神事には一切関わらないって子供の頃から誓ってるんだから」
巫女よりシスターよ、と絵馬ちゃんは両手を握って祈るように言った。私は、その二つの違いが衣装以外にはよく分からなかった。
「ねぇ絵馬。縁切りって、嫌いな奴を呪ったりするのも、そうよね」
久しぶりに口を開いた一之宮さんが、真剣な眼差しで尋ねた。
絵馬ちゃんは、一瞬目を見開いて、それから考え込むように細い指をあごに当てた。
「そうね……。どうなのかしら。私、呪いや儀式とかって詳しくないのよね。爺やか、それよりもシ――――」
はっとして絵馬ちゃんが咄嗟に口を閉ざし、でも、すぐに話しを続けた。
「呪いって丑の刻参りみたいなの？　それだったら意味ないわよ」
「どうして、意味がないの？」
まるで威嚇するような低い声で一之宮さんが訊く。
「だってね、呪いって誰かの手を借りて成就するものでしょ。精霊とか式神や妖怪のさ。……でも、うちの神社ってそんなのいないのよ。っていうか、これも爺やからの受け売りだけど、呪いとは言葉で、儀式じゃないの。だから丑の刻参りは、無意味なのよ」

さらりと今日の天気を言うような軽やかさで絵馬ちゃんが言うと、一之宮さんが、目を見開いたまま表情を凍らせた。

「それ……どういう……。呪いじゃないの？」

それこそ、まるで呪うように一之宮さんは訊いた。

「私もよくわかんないのよ、こういうの。一言に呪いって言っても色々あるみたいで、呪う方と呪われる方で、また意味が違うみたいだし。人だったら呪いだけど、神様だったら祟りになるみたいだし……、あまり関わりたくないぐらい複雑らしいの。ま、ともかく悪口は呪いだけど、丑の刻参りってのはただの自然破壊みたいなものよ。そんなの夜な夜なするぐらいなら、呪いたい奴をぶん殴れったほうが手っ取り早いってことよ。祈りなんて、結局……ただの自己満足よ」

祈る暇が有るなら努力しろ、と絵馬ちゃんは鼻で笑った。まるで、信じること祈ること願うことを全否定するような冷笑。絵馬ちゃんの強さがひしひしと伝わってくるような不敵な笑み。

祈ることをしない、精神の強さ。

努力を続けられる、身体の強さ。

神様を無視出来る、孤独の強さ。

私にはない、欠けているモノを、絵馬ちゃんは持っている。

ふと、私は絵馬ちゃんに惹かれているのに気づいた。友達じゃなくて、一人の人間として絵馬ちゃんの強さに、私は憧れていた。

私にも、ほんの少しでも強さがあれば……。

「なによ。結局……、独りじゃない」

「え、小夜子？」

一之宮さんは急に立ち上がり、この場から立ち去ろうとし出した。絵馬ちゃんが呼び止めても、振り返ることなく屋上から出て行った。

「なに？　……どうしたの、あの子？」

唐突な行動に呆気にとられた私たちは、しばらくドアの方を向いていた。空気の流れが停止してしまったような雰囲気の中、まるで遠くの方から発せられたような声がした。

「あいつも……祟られたんだろ」

抑揚のない声。揶揄するような言葉。神籬君が言った。

私は、どうしてか、胸騒ぎがした。

無性に、手が、疼く。

その疼きが、焦りになって身体に広がる。

「私……ちょっと様子見てくる」

「えっ。大丈夫よ、あやめ……って、あやめ！」

絵馬ちゃんの制止を無視して、一之宮さんの後を追った。

階段を下りて、教室に向かう廊下。各教室から生徒の楽しそうな声が漏れている。窓からは白熱した陽射し。

一之宮さんは、それらを拒絶するような雰囲気を従えて、うつむき気味に廊下を歩いていた。

声をかけると、振り返った彼女の表情は、まるで生気が枯れてしまったように、半ば閉じた瞼、掻き乱れたショート・ヘア、だらりと力なくおろされた両手と、重たい陰りを背負っているように曲がった背中が、普段の明るくて活発な一之宮さんのイメージを真っ向から崩れてしまいそうだった。

「なに……？」

怨敵を見定めるような眼光に、私は思わず一歩さがった。

「あ、あのね……最近、元気ないから……心配になって。なにか、あったの？」

退いた一歩よりさらに大きく前に踏み込んで尋ねた。

騒然（そうぜん）とした音が、窓から差し込む陽射しで閑散となる一瞬、

「っは……」一之宮さんは、噛った。

俯く顔。前髪で隠れた瞳から漏れる蔑む視線。裂けてしまいそうなほど歪んだ口から、様々な感情が混ざり濁った声が漏れる。

妖しく、噛った。

「なにがあったの？　ははは、……あんたが、それを言うわけ？」

肩を揺らして噛っている。

「一之宮、さん……」

なんで噛っているのか分からない。

どうして、そんな怨めしそうに噛うのか、分からない。

教室から漏れ出す笑い声とは違う。明らかに、不快を表す噛いだった。そして、それは私への敵意だってことが、身体が感じとれた。

「一之宮さん……どうしたの？　変だよ。いつもの一之宮さんじゃないよ。……おかしいよ」

まるで壊れたオモチャのように噛い続ける一之宮さんの姿が、一瞬、お婆ちゃんと重なった。

不安が膨張する。

それを押さえ込むように、私は一之宮さんのもとへ歩み寄った。

「変？　オカシイ？　わたしが……？」

突き刺すように、突き放される。

拒絶。

突き放されて平衡感覚をなくした様によろめく。咄嗟（とっさ）に壁に手をついた。

「一之宮さん……」

どうして、という言葉が、

「狂ってるのは　おまえだ！」

斬りつける叫びが、私の言葉を気化する。
思考が融解。
喧騒が静寂。
身体が凝固。
視界が反転。
世界が歪む。
「偽善者ぶってんじゃねよ！」
響く声。蔑む視線。突き刺す。
「心配？　っは。よくもそんなこと言えるね……」
冷笑。浮かべて。近づく。
友達が。大好きな友達を。怖い、と、身体が震える。
「なにもかも、おまえのせいだ！」
非難。
敵意。
憎悪。
卑下。
見知った友達が。見知らぬ人になって、近づく。
近づく。
「私がおかしいだって？　ふざけなるな！　おかしいのはおまえだ！
おまえの家族が狂ってるからだろ！」

凍りつく。
何もかもが、停止したように。
動くのは、目の前の、怖い人だけ。
「気が狂って変になってんのはオマエだけだろ！　なのに……、なのに……」
動けない、私の体の、なにもかもが。
耳鳴りがするほどの静寂。
「巻き込まないで！　あんたの祟りに、私を巻き込まないで！」
耳鳴りがするほどの怒号。
憎悪の限り叫んでいるのは彼女なのに、
怯えるように体を、顔を揺らして拒絶している。
拒絶している。
私を。
近づいたのに、押し払うようにひるがえす体。
私は、手を伸ばしていた。
待って、手を伸ばした。
「触らないで汚らわしい！」
彼女の目は、私を見ていない。
彼女の目は、汚れた私を見ていた。
「いち……のみや、さん……」

凝結した喉が震える。痙攣したように震える声。
再びわき上がる周囲の喧騒の中、
呼吸をするように小さな声で、
「知ってんのよ」
酩酊したような笑みを浮かべて、
「あんたが……」
上目遣いで、いたぶる視線を向けて、
「■■を――――殺したてたってこと」
それを、囁いた。
「あ……ッ」
ぐらりと揺れた。
体が、捩れた。
目が、溶けた。
心が、壊れた。
頭が、割れた。
骨が、裂けた。
ないもかも、錯覚。
だけど、何かが壊れた。
壊れた瞬間、耳鳴りがした
「なん、で……」

燃えるように熱い。
涙が溢れる。
止められない。
止められない。
止まらない。
「そうやって善い子のふりしてれば、隠し続けられるとでも思ったの。っは……馬鹿にしないで。他の連中ならともかく、私は騙されないわよ。私は、簡単には殺されない！」
「え――――？」
ナン　テ　イッタ　ノ？
今、ナンテ　イッタんだ　コの女　は？
「すごい家族よね、あんたんチって。どうかしてるわ、狂ってるのよ！　秘密がバレたら、"また"壊すんでしょ。メチャクチャに呪って壊して殺すんでしょ！　分かってるのよ！　……私は、殺されない。もちろん……」
言葉が止まる。
彼女の視線が、私を超える。
私の背後。人の気配がした。暖かい空気を感じた。
とても好きな、日向のような匂いがした。
壊れたブリキ人形のように、体がぎこちなく動く。

振り返る。
「あんたも気をつけなさい、礼慈」
険しい表情を浮かべて立っている、鳥居君がいた。
「あっ…………」息が漏れる。
同時に、私の中から大切なモノが気化した。
「とり、い、くん……」
彼は、ただ、黙っていた。
「違うの……私、そんなんじゃ……ないよ、……違う」
黙って見ていた。
険しい表情のまま、寡黙な彼は、そこにいた。
「違う、違う、違うの！」
言葉を口にする度、髪が乱れるほど首を振って、違うと叫ぶ度に、
体が軋んで、大切な何かが削れて壊れていく。
「違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違
う違う違う違う違う違う違う違う――――違うの！」
私、狂ってなんか、ないよ。
そう言いたくて、私はどこも変じゃないよと伝えたいのに、上手
く言葉が出ない。
「……榊」まっすぐ、怖いほど純粋で真っ直ぐな彼の視線。
それが好きだった。

「鳥居くん……」
なのに、今は、それがとても怖い。
見渡した。教室から顔を出す人の群れ。
まるで汚れたモノのように遠巻きに、
まるで汚れたモノのように見下してる。
気持ち悪い。
気色悪い。
気味が悪い。
最低。
最悪。
汚い。
小さな声が沸いたように、聞こえる。
止まらない、悪意の渦。
挟まれて、取り囲まれ、覆われる。
まるで、匣の中。
匣…………の中に。
「私は――――違う！」
走った。
閉じこめられてしまう前に、走り出した。
悪意の囁きをかき分けて、走った。

誰が誰だか、何が何だか分からなくなってしまった視界をそのまに、私はただ逃げた。
廊下を抜ける。飛び降りるように階段を下りる。
すれ違う人の顔が、すべて、私を蔑んでいる。
避けている。
まるで私が、汚れているように。
汚れてる。
「落ちない……」
握りしめた手。
その手が汚れてる。
お婆ちゃんの、血で、汚れてしまった。
何度も、何度も洗った。
沢山石けんを使って洗った。
白い泡が弾けて手が白くなるまで洗った。
水で流す。
泡が消えた手は、まだ、汚れていた。
何度も、何度も、洗った。
繰り返し洗ったのに、手は綺麗にならなかった。
私の手から……血の臭いが消えない。
この手から……血の赤色が消えない。

この手で顔を洗った。この手で、パパに手を振った。この手で、友達の手を握った。この手で、パンを食べた。この手で……、このお婆ちゃんをバラバラにした汚れてしまった手で、私は大切なモノに触れた。
だから、汚れてしまったの？
だから、綺麗だったものが醜く汚れてしまったんだ。
だから、楽しいはずのこの場所が、私を追い詰める。
「っう……」嗚咽が漏れる。それも汚れた手で押さえた。
汚れていく。
汚れていく。
汚れてしまった手で、触れたから汚れてしまう。
だから、綺麗にしなきゃ。
校舎を出た。そのまま、中庭の手洗い場へ走った。
水を出して手を洗う。両手をこすり合わせて洗う。
「落ちない落ちない落ちない落ちない」
両手を合わせて擦る。
繰り返し擦り合わせる。
だけど血が落ちない。
「っうっう――――なん　でっ」
思い通りにならない。

悔しくて涙が出る。
駄々を捏ねるように手を擦りあわす。
透明な水が、透明なまま排水溝へ流れる。微かに渦巻く。
脳裏に、浴室の排水溝の映像が過ぎった。
「榊……」
お婆ちゃんを運び出して、シャワーの水で血を洗い流した。排水溝にお婆ちゃんの髪が絡まって、淡い赤色の水が溜まった。それでも水を流したら、皮膚の断片と髪の毛が浮かび上がる。
そして、どんどん薄くなる血の色。
だけど決して透明の綺麗な水にはならない。
どんどん汚れた水が溜まるばかり。
「……榊」
汚れてしまった。
一度汚れてしまったら、もう綺麗にならない。
私は、汚れてしまったの……？
「榊！」
「きゃっ」腕を捕まれて、身体が回る。
「榊……」
目の前には、眉を顰めて、唇をかんでいる鳥居君の顔。
「鳥居、くん？」

捕まれた手。私の腕を掴む彼の手の温もり。とても暖かくて、私の手が冷え切っていることに気づいて、途端に痛みを感じた。
「手が……赤い」そう呟いて両手で、私の手を包んだ。
「バカ。なにやってんだっ、こんなになるまで」
怒ってる。鳥居君は、私の手を握りしめながら怒った。
「だって……わたし、汚れてるから……」
「そんなことない」
「でも……汚れてるんだよ」
「そんなことない！」
「でも……」息を呑んだ。溜まった涙を飲み込んだ。
「でも。でも私っ――――」
吠える様に口を開いた瞬間、
「そんなこと、あるもんか！」
私は、彼の胸に抱き寄せられた。
耳元で響く彼の吐息。
背中に感じる二つの腕が、私を支えて抱きしめてくれる。
驚きが過ぎ、強い硬さと深い柔らかさに、身体を委ねる。
過ぎた熱に、刺々しく毒々しかった心が清められていく。
日向の温もりと匂い。
「鳥……居君……」

とけてしまった私の声。
「俺は何も知らない。榊が何でそんなに苦しんでるのか、俺には分からない。おまえのこと知らないことだらけだけど……だけど」
痛いほど抱きしめられたけど、嫌じゃなかった。
「榊は……普通だよ」
今までで一番穏やかで、優しい吐息。
「汚れてなんかない」
今までも一番強い、声。
「榊は……いつだって綺麗だ。
それだは知ってる――――だから好きだ」
囁きは、空気に触れて消えてしまいそうなほど小さかった。けど、私の耳から心の芯まで浸透して、綺麗な温もりで私を守ってくれる。
「鳥居君……でも」
私は貴方が思っているような綺麗な人じゃないよ、と口にしようとすると一際強く抱きしめられた。怯えている私を、ぎゅっと強く守るように、強く、だけど優しく。だけど一つになんてなれない体だから、彼の心の鼓動が聞こえてくる。体に伝わってくる。
「鳥居くん……苦しい」
「うん。でも、こうしないと榊、独りで悩んで傷ついて、俺達から離れていくだろ。そんなの、俺は嫌だ」
「でも、そうしないと、鳥居君達も……巻き込んじゃう」
汚れた手。
私は汚れてる。
だから私に触れると、綺麗だったモノまで、汚れてしまうの。
それはとても嫌だから、綺麗だったものが目の前で汚れてしまうのは、とても苦しいから、私が離れるしかないでしょ。
汚れて手を握ったら、握った手も汚れてしまう。汚れてしまった私を、こうして暖かく抱きしめてくる彼も、汚れてしまう。
だから、私は……、ここに居たらいけない。
「バカだよ、榊は」
澄み切った声。
「なんだよ、巻き込むって。……俺は、俺の意思で、榊が苦しんでるなら助けになりたい、怖いなら守りたいって思ってる。巻き込む巻き込まないじゃない、ただ、一緒にいたいだけなんだ」
痺れてしまう、何もかも。ゆっくり、解かれる腕。
「榊……。あやめ」
初めて、名前を呼ばれた。
私の目を、彼の目が見る。
とても硬い。彼そのものを閉じこめて結晶にしたような清んだ輝きを纏う瞳が、私の顔を、またその深く、心まで捉えて放さない。

眩しいほどの日射しを浴びて、鳥居君は微笑んだ。
その微笑みに、なぜだか、私は呼吸を一瞬止めた。
「知ってるか。独りきりじゃ、ハッピーエンドはないんだ」
――どんなに辛くても、たとえ、幸せなんてなくても、
最後に、笑っていられるハッピーエンドがあるなら、
その時はきっと、救いがあるような気がするんだ。
だから、がんばっていこうと思える。
一所懸命がんばって、努力し続けて、
幸せになれないなんて、嘘だろ――――――――。
「だからさ、あやめ。辛いなら辛いって、我慢するなよ。独りで全部背負い込もうとするな。少しは、俺達にも支えさせてくれ。その背負ってるものは、あやめが背負わないとダメだ。だけど、おまえを支えるぐらいは、させてくれ。俺だけじゃない、奥津城だってい る。オマエが巻き込みたくないって思うのと同じぐらい、俺や奥津城だって、おまえを助けたいって思ってるんだ。だから……甘えろ、少しは。それは迷惑な我が侭じゃない、優しさなんだからさ」
日向のように眩しいほど綺麗な声が、
私の心から汚れを払う。
今、少しだけ、彼が寡黙な理由が分かった気がした。
とても、純粋で直向きな強さが宿った声。
「鳥居君」
たとえば、今、私の心を清めてくれてくれたように。
「ありがと」私は彼に抱きついた。
もう少し、もう少しだけ、
この日向に似た彼を感じていたかった。
ほんの少しでもいいから、できれば、いつまで、も。
だが、その少しすら神様は許してくれなかった。
「イチャつくのは構わないけど、放置しすぎよ、私を」
氷河期到来を告げるような冷え切った言葉が、過ぎる。
「絵馬ちゃん！」
声の方へ振り向くと、冷め切った表情の絵馬ちゃんが立っていて、
それを見た途端に、磁石が反発し合うように私と鳥居君は離れた。
「ふぅーん。なんていうかさ、なに？　オメデト、でも言えばいいのかしら私は？」あくまでも冷めた表情で、だけど口元は揶揄するようにつり上がっていた。
「ち、違うの。そんな、全然、そんなんじゃ、ねぇ、鳥居君」
「あ、ああ」

「へぇ……。ま、心配になって来てみれば、私の出る幕なしって感じね。さすが礼慈。やっぱ男の子だよね。あぁー、私も一度でいいから、俺が守ってやる、なんて言われてみたいものよ」
「いや、オマエには必要ないだろ」
「なんだとぉ！　私だって女の子なんだぞ。か弱き乙女なんだから」
「奥津城がか弱いなんて言ったら、人類は絶滅危惧種になる」
「……差別ね。あやめにあんだけ激しい抱擁してといて、私にはそんな冷たい言葉とはね。ほんと、人が平等だなんて、嘘よね」
「ッお、奥津城、おまえ、いつから……」
「いつから居たってこと？　そうね、ほとんどはじめからかな。ま、その辺りはじっくり楽しみたいけど、ほら、もう昼休み終わるし、私は急がなきゃならないから、明日また楽しませてもらうとするわ」
心底意地悪な笑みを浮かべて髪を払って、鞄を背中にかけた。
「絵馬ちゃん……もしかして、早退、するの？」
「そうよ。ああ、教室の方は大丈夫よ。なんか小夜子も気分悪いから帰ったし、クラスの連中には私と神籬が上手いこと言っておいたから。それと……恨むなら神籬だけ恨んでね。痴話喧嘩のもつれなんて言ったの、アイツだから」
引き気味の笑いを浮かべて、絵馬ちゃんは手をひらひらと振っている。まるで私は悪くないよ、アピールしてる。
でも、どちらにしても教室に戻りづらい。それに、一之宮さんとだって、明日どんな風に顔を会わせて良いのかも分からない。それどころか、どうして一之宮さんが、あの事を知っているのかも、不思議だった。
「奥津城、おまえはなんで早退するんだ」
隣の鳥居君が、歩き出そうとしていた絵馬ちゃんを呼び止めた。
絵馬ちゃんは少し、私たちに背中を向けたまま、考え込むように黙って顔だけ振り返った。
「そうね、あんた達二人なら言ってもいいかな」
そう呟きを前置きにして、険しい表情で言った。
「神社の近くでね、死体が、例の連続箱入り殺人事件の『匣』が発見されたの」
校舎から漏れていた賑やかな音が、ぴたりと、止んだ。
どくん、と自分の心臓が縮みが、はっきりと聞こえた。
私はぎゅっと拳を握った。
落ち着け、と戒める。
あれが見つかるのは分かっていた事だ、と言い聞かせた。
動揺しちゃダメ、と心のなかで繰り返し唱えた。
普通にしなさい、と。
「匣って、死体が発見されたってことか？」

鳥居君は、冷静を崩さない。
「みたいね。でも、まだ詳しくは聞いてないけど、違うみたいよ」
「違う？　なにが違うんだ」
「一連の事件とは違うってこと」
一拍間をおいて、
「犯人が別。模倣犯の仕業ってことよ」
絵馬ちゃんは、抑揚のない声で言った。
「え……？」
思わず、声が出てしまった。
どくん、と胸を撃つほど心臓が跳ねた。
ジーン、と鋭い耳鳴りが頭の中で響く。
「なんで分かったんだ、そんなこと」
鳥居君の冷静な声も、痛いほど頭に響く。
そして、割れてしまいそうな鋭い耳鳴りと痛みの渦の中、
「目撃者がいたのよ」
死刑船側のようなその言葉が、あの鳴き声を呼ぶ。
――イツマデ　イツマデ。
無数のわめき声が響く。
私の中だけで。
「だ、だれが……？」
訊いて、私はやっとその鳴き声の意味に気づいた。
いつまで。
その鳴き声は、忠告だった。
その鳴き声は、助言だった。
その鳴き声は、私にこう言っていたんだ。
いつまで、
「――シキよ」
いつまで、そいつを生かしておくんだ。
早く殺さないと祟りは、いつまで、も続く。

◇

『深夜の森に、匣を持った人がいたらしいの。そして、匣を置いていった。それをシキが遠くから目撃していたみたいなの。って言っても、シキの目はあれだから目撃というより、誰がいるのか分かった、ってところね。

警察が今、その匣を回収して周囲を調べてるらしくて、私にも事情聴取みたいなのするから学校サボって帰って来い、ってあの女が……。今は爺やがいなくて、あの神社には私しかいない事になってるから仕方ないけど、私なんかよりシキに直接聞けば早い話なんのに。そうなのよね。……あいつ、匣を見つけて誰かがそれを置いていったって事しか喋らないみたいなの。本当は見てたけど喋らないだけじゃないかって、虎子が疑ってるから、ようは私が聞き出せってことなんでしょうね。嫌だな……。シキ、不確かだったり確証がない事ってハッキリするまで口にしないし、大理石みたいに頑固だから、誰が尋問しても同じだと思うんだけどな。……でも、事の重大さが分かれば、少しは喋ってくれるかも知れないけど、なんて説明すればいいか分からないし。アイツが犯人見てたっていうなら、それこそ、すぐにでも事件が解決するんだけどさ。っていうか、アイツ、解ってるんじゃないかな、事件の真相に』

絵馬ちゃんが早退してから、私が学校を出るまでの数時間の記憶が曖昧だった。誰と何を喋ったのか、誰が何を喋ったのか、誰が居たのか、誰と居たのか、誰が誰なのか。思い出せない。

気づいたら、私は走っていた。

走って、家に帰っていた。

バス停から家まで、全速力で走った。

呼吸がおかしい。

ヒューヒュー、と喉が鳴る。

胸騒ぎなのか心臓の悲鳴なのか分からないほど、乱れた鼓動。考える事を放棄した空白の頭が、家の玄関を開けた瞬間に動き出した。

「お母さん！」叫んだ。

そして慌ててリビングに入って、もう一度、叫んだ。

お母さんは、叫ぶまでもない距離に居た。リビングのソファに座っている。そして、私が入ってきたドアの方を……ドアの近くにあるテレビを見ていた。テレビから漏れるワイドショウの音声。

「お母さん……」

私は、その続きをなんと言えばいいのか分からなかった。大変な事なってる、なのか、それとも匣が見つかった、と言えばいいのか、もしくは、見られていた、と言えばいいのか分からないまま、私は入り口で立ちつくしていた。

「なんで……」
すぐに空気に気化してしまうような弱々しい声で、
「どうして、どうしてなのかしらね……」
お母さんは、自虐的に笑いながら呟いた。
「お母さん？」
「……どうしてなのかしら」お母さんは、まるで私に気づいていないように同じ言葉を繰り返し呟く。
「お母さん……どうしたの？」
私が近づくと、お母さんはうつむき気味だった顔を上げて私を見て、ぽつりと呟いた。
「警察が来たの」
絶望的な響きに、私の身体が硬直した。
「な……なんで？　……まさか！」
まさか逮捕しに来たの、と独り言を呟くと、お母さんは弱々しく首を横に振った。
「ちがうの……ただの聞き込み、だったみたいだけど。けどね……ダメよ、もう……ダメなのよ！」
沈むような声が突然爆発した。
怯えるように頭を抱えて、震えだしたお母さんは突然、笑った。
「っは……はははっっはははは！」
喉の奥から笑っている。籠もった笑い声は、まるで鳥が喉笛を鳴らしているような小刻みなな笑い声。
「バレたのよ、見られたのよ！　アレが一連の犯人とは別だって！　模倣犯だってバレたのよ！　見られてたのよ！　あれを……匣を捨てた所を……見られてたのよ……。っは……はははあっっは！」
泣き叫ぶように濁った笑い声が飛び散る。両手で顔を覆って狂ったように笑うお母さんの姿に、お婆ちゃんのようだと思った。
「だ、大丈夫だよお母さん……」
膝をついて、お母さんの腕を握った。
震えていた。痙攣しているように小刻みに震えていた。
私は、ぎゅっとお母さんの腕を握った。
「大丈夫だよ。だって、まだなにも知られてないよ。だってね、目撃した人って、目が見えないんだから」
頭の中に浮かぶ白い着物の少年。いつも白い包帯を頭に巻いていた。シキ君が目撃者だとしたら、それは目撃していない事になる。だから、あれが私達が捨てたものだなんて分かるはずがない。
「だから、だからね……大丈夫だよ、お母さん」
大丈夫だよ大丈夫だから、と私は何度も口にしている内に、それはお母さんに言っているのか、それとも自分にそう言い聞かせて何かから現実逃避しようとしているのではないかと思った。

「あやめ……、少し、ひとりにしてちょうだい」
冷たく、落ち着いた口調でお母さんは俯いたまま呟いた。
私は、そっと手を離して、そのままリビングを出た。その前に、一度お母さんを見た。
照明も点けずカーテンに遮られて陽射しも幽かにしかないリビングの真ん中で、懺悔(ざんげ)するように手を組んで俯く、萎(しぼ)んだ花のようなお母さんの姿。空気が、色褪(いろあ)せてくすんでしまったように見えた。
二階の自室に入る。そのまま鞄を落として、ベッドに仰向(あおむ)けに倒れた。そして深呼吸。
「どうなっちゃうのかな……」囁いてみたけど、まるでドラマの展開でも気にするように現実味がまったくない。他人事みたい。
そう……これは、ドラマか映画なんだ。
私とは関係のない人達、遠いどこかで、違う世界の中で繰り広げられている悲劇なんだ。だって、祟りとか人殺しとか、殺人鬼とか逮捕なんて言葉の数々は、私の人生の中には、この家の中にはない言葉。
私の生活は、退屈で平坦で、それでいてドラマチックな展開なんて何もない平穏な毎日を繰り返しで、ほんの小さな不幸や苦しみがあっても、それよりもほんの少し大きな幸せがある、その幸せを拾い集めて家族みんなでいつまでも幸せに暮らしていくの。
特別なことなんてない、
ありふれて、どこにだってあるような日常。
祟りや人殺しなんて惨劇は、テレビの向側の話。
劇的で刺激的なお話はフィクション。
現実には、私の生活はとても静かなリアリティ。
このまま、眠ってしまえば終わってしまう。そしてまた、朝がきて目が覚めたら……ほら、なんてことのない退屈な一日がまた始まる。清々しく鮮烈な朝陽が、それまで見ていた夢をかき消して、現実に戻る。
ドラマチックな話しは、夢の中。
映画の中に閉じこめられた悲劇。
スクリーンに映るのは幻想夢幻。
映画館の外は現実。
迷い込んだ幻想。
赤い赤い夕日を浴びて霞(かす)む。
暗くて赤い悲惨な話は、遠くで霞む。
私達は、観客。
罪も罰も汚れもない観客。
惨劇は、見ているだけ。
悲劇は、同情するだけ。

殺人は、夢の国のお話。
祟りは、遠い昔のお話。
全ては、夢幻の白昼夢。
だから、私には無関係。
それが、つい最近まで。
夢の話、いつまでも続く。
「……っう。……っぅう」
急に、悲しくなった。
急に、沢山のモノが無くなった気がした。
急に、二度と家族が揃わないと気づいた。
数日前の何気のない団欒(だんらん)が眩しく思えて、それが今は幻想になってしまったのが怖かった。
反転していく、幻想と現実。
匣の中と外が、反転していく。
映画の中の話が、あふれ出てくる。
それは、私の生活が、匣の中に綴(と)じ込まれていく事。
そして、もう二度と、出てこれない。
元には、もう、戻れない。
そう思ったら、悲しくなった。
「どうしたら、いいの……？」

空気に食べられてしまった独り言。
窓ガラスに照らされた赤みがかった光。
もうすぐ、なにかが終わろうとしている予感がした。
終わってしまう。
もう少しで、この狂った悲劇が終わる。
それは、間違えない。
だけど、ハッピーエンドにはほど遠い。
思い描かれるのは、家族がいない空っぽの家。
きっと、お母さんは逮捕されて何年も戻ってこない。
私もきっと逮捕されてしまう。
家は匣のように空っぽのまま。
ここに有っても、この町にはもう居られない。
そして、パパもきっと……居なくなる、私達から。
家族がバラバラになる。それがきっとエンディング。
「ぃ、や……そんなの、いや」
そんなエンディングなんて、悲しすぎる。
なにも救いなんてない。あんなに辛い思いをしたのに、たくさん、たくさん泣いて苦しんだのに、何一つ幸せがないなんて、そんなの……イヤだ。
少しでもいい。

ほんの少しでもいいから、救いが欲しい。
「自首、……したら」
どうせ捕まるなら、自首した方が良いかもしれない。今から警察に行って、この家で起きたこと全て素直に話したら、きっとまだどこかに救いがあるかもしれない。
そうすれば、パパだって許してくれるかもしれない。
また……時間はかかるかもしれないけど、家族一緒に暮らせるかもしれない。ハッピーエンドが、あるかもしれない。
「だったらっ」ベッドから飛び上がる。
急いで階段を下りて一階におりてリビングへ。
ドアを開ける。
明かりが灯っていない部屋は、夜の同系色に包まれ、お母さんはやっぱり懺悔するような姿のままソファに座っていた。
「お母さん……」
私は優しく声を掛けながら近づいた。
「お母さん。警察に、行こ……」
凍ったように動かないお母さんの手を握る。
「ねぇ……そうしようよ」
屈んで、顔を見上げる。
俯いた顔。闇に同化したような長い黒髪に覆われて見えない。

「お母さん。……自首、しようよ」
お願い、と私は言う。
その時、部屋に一切の明かりがなくなった。
閉ざされた瞬間。
暗闇の中で、ギシギシと何かが軋む音がした。
そして、私は見た。
「……して……どう……わかって……」
墨色の闇の中、
「おかあ……さん……？」
赤く濁った目をむき出すほど見開いた母を。
「どうしてわかってくれないの！」
「きゃっ」突然突き飛ばされて仰向けに倒れた。
上半身を腕で支えながら私は、そのまま動けなくなってしまった。
「どうして……なんで分かってくれないのよ！」
ただ、壊れてしまったように泣きわめきお母さんを、
見上げていることしか出来なかった。
「なんでよ！　なんで上手くいかないの！　もう少し、もう少しで普通の生活に戻れたのに、どうして邪魔するの！　あんたは！」
叫び。

「なんで分からないの。お母さんが、何のためにあんな事したのか、なんで分からないのよ！」
投げられたクッションが壁に当たる。
花瓶が、地面に叩きつけられ割れる。
テーブルがひっくり返され、天板のガラスが砕けた。
お母さんの近くにあるモノが、次々と砕ける壊れる。
「どんな気持ちだったかわかるの！　私がどんな気持ちで……どんなに家族の事を考えてるのか、あやめにはわかるの！」
壊れたような叫び。
砕けたような叫び。
割れてしまった声。
「やっと……もう少しで戻るのよ！　もう少しで……もとの生活に戻れるのよ。戻れる……はずだったのに、どうして……」
泣き崩れる。荒々しい叫び声が、痛々しい程の鳴き声に変わる。
なんで、と泣いている。
どうして、と叫んでいる。
お母さん、と呼びかける私の声もかき消すほど床を叩いて。
這いずるように近づく。
お母さん、と呼びかける。

「どうして……なんでこんなことに……。ただ、普通に暮らしたかったのに……特別なことなんて……ただ、家族が一緒にくらせる幸せが欲しかったのよ。たった……たったそれだけのことなのに、どうして……どうしてこんなことになったの！」
泣いている。
お母さんが泣いている。
大人のに、まるで駄々をこねる子供のように泣きわめいている。
「綺麗ですねって……綺麗な髪ですねって、賑やかな家族で良いですねって……褒められたの……初めて。初めて褒められたの、この町に来てから、初めて私を見てくれたの……。前の町は、私なんて……誰も見てくれなかった。透明人間どころか、汚い、汚い死人だったのに！　いつもいつもあの男のために起きて、ただ家事をこなして眠るだけの機械同然の扱い……いえ、奴隷だったのよ、私たちは。それから……あの男が死んで、やっと解放されて、やっと幸せになれるって、本当に幸せに暮らせていけるって思ったのに……。宗一郎さんに出会って、やっと……やっと人並みの、普通の暮らせる幸せが手に入ったと思ったのに……。宗一郎さん……宗一郎さん……なんで……そう……一郎……さんが……宗一郎さんが……宗一郎さんが帰ってこないの……早く……、早く帰ってきて、宗一郎さん！」

綺麗だった黒髪を雑草でもむしるようにかき乱して、お母さんは呼んでいる。パパを呼んでいる。宗一郎さん、と叫んでいる。繰り返し、返事がないことは分かり切っているのに求めるように叫んだ。

嗚咽が響く。濁った悲鳴が渦巻く。

排水溝を求めて、行き場を無くした泣き声が充満していく。

空気に混じりあう吐露。

ひどく、汚い。

吸い込んでしまったら、私まで汚れてしまう。

ひどく、臭い。

無味無臭の憎悪や激情、恨み妬みが闇に溶けて濃度を増す。

「おかーさん……」

いつも、お父さんから守ってくれたお母さん。

「おかーさん……」

いつも、気丈なお母さんが泣きわめいている。

まるで、狂ったように。

「おかーさん！」

泣き声が止む。

静寂が整われる前に、私は言った。

「お母さん……。考えよう、ねぇっ、これからどうしたらいいか、一緒に……考えよう」

お母さんの顔に手を差し伸べようとしたら、乾いた音が響いた。

私の身体が倒れる。

遅れて頬が刺々しいく熱くなっているのに、気づいた。

「考える？　何を考えるの！　見られたのアレが！　知られたのよ、私たちの罪が！　それなのに、今更何を考えるっていうの！」

激情が迸る。

叫びが、凶器になって突き刺さる。

ずきり、ずきり、と私をメッタ刺しにする。

「あやめ……」

優しい声が聞こえた。

俯いていた顔があがる。

その顔を見た瞬間、私は、息を呑んでいた。

「あやめは、お母さんの味方よね？」

ゆらり、緩慢な動きで立ち上がったお母さん。ゆっくりと近づく。

私を見下ろし近づく。その手に硝子片をもって、絨毯に足跡のような血の染みを作る。

私は、それから目がそらせないまま這うように後ろに下がった。

体を引きづって逃げようとした。でも、壁が退路を塞ぐ。

お母さんが、私を見下ろす。

まるで、ぎしぎしと軋む声で言う。

「お婆ちゃんみたいに、幸せをめちゃくちゃにするの？　……私の敵じゃないわよね？　私の邪魔なんかしない、でしょ？」
お母さんの手。ナイフのような硝子片を握っている。
強く、ガラスが割れそうなほど強く握って、血で汚れている。
「ねぇ……、あやめ？」
「おかーさん……」
私の足に、生暖かい血がこぼれ落ちた。
震える唇を一度かんで凝固した頬をゆるませて私は言った。
「当たり前だよ。だって……家族だもん」
笑顔を、浮かべた。
「家族、だから……私、お母さんの子だから、お母さんの味方に決まってるでしょ」
「……あやめ」
どすん、と耳をかすめる音。
「ヤっ――――」
硝子片が頬をかすめた。
近づくお母さんの顔。
涙で汚れた顔、乱れた髪、むせかえるほどの血の臭い。
目を背けたくても、動かない。
「本当に……私の味方？」
「う……うん」
「本当に……？」
「あ……、当たり前、だよ」
「だったら手伝ってくれるわよね、元の生活に戻るために」
「うん……」
「また……家族が幸せに暮らせるように、手伝ってくれるわよね」
「う……ん……だって、私たち家族、なんだから……家族なんだから、助け合わないと……辛くても一緒にがんばらないとダメだから……お母さんばっかり、辛い思いしないで……協力しよ。私たち、家族なんだから」
「そうね。家族なんですものね。家族は助け合わないとダメよね」
刺さった硝子片から、お母さんの手が離れる。
「だったら、あやめ――――」
その血に染まった手で、私の手を握って囁いた。
「あなたが、目撃者を殺しなさい」
やっと綺麗になったと思った私の手が、
また、血で汚れてしまった。

◇

薄暗い空。
見上げると頬が濡れた。
涙のような小さな雫が空から落ちる。
雲一つしかない空。
不安になるほど濃度を増していく闇。
きっと誰かが企んでいる。
何もかも隠して、見えなくしようと。
夜闇という匣に、罪や汚れを隠そうとしている。
雨が、きっとそれが綺麗な物のように洗うんだ。
薄暗い闇と幽かな灯り、雨に占拠された夜道。
ここにはきっと、私とお母さんだけ。
他の人達はきっと、匣のような家の中。
きっと幸せな光と音、そして未来が詰まった匣の中。
灰色のレイン・コート。
雨に打たれるの両手だけ。
雫に打たれて小さな悲鳴を上げる匣。
何も入っていない匣が、私の手の中。
アスファルトに寄り添う水たまりを、
無性に悔しくなって踏みつけた。
通い慣れた道。
今まで見えなかった不気味な影の道。
昨日も通った道。
無視できなくなった不穏な足音の響き。
もう一度、空を見上げた。
ぐらりと揺れる視界。このまま倒れてしまえば、どんなに楽だろうか。今までの嫌な思い出も、これからの辛い出来事の全てを、アスファルトの水たまりのように、誰にも見られることもなく蒸発して消えて。そして私は、空から零れ落ちる雨粒のように、硬いアスファルトに打ち付けられたように、壊れて、水の中に落ちて、ここから逃げられるのに。
だけど逃れる事を、匣は許してくれない。
誰にも出会わず、誰にも見られずに、樹海へ向かう。
樹海。
深い、深い森。迷いの森。深入りしてはいけない聖域。ヤタガラス様が棲まう森。大きな木々に囲まれた海。
小高い丘が幾つもあって、さらにいくつかの山がそびえ立つ樹海は、まるで人の手が入る余地のないほど、完成された異界をなしていた。

ぽっかりと空いた道。
樹海の外壁に空いた穴のような細道。
砂利が一面にまかれ、真ん中には石畳の道が奥へと続く。
朱い鳥居。
私は、鳥居の側に匣を置いた。
お母さんが、布に包まれた包丁を私に渡した。
そして声に出さずに、一人で行きなさい、と私を見た。
プラスティックの柄を握りしめて、
私は参道を一人で歩き出した。
鳥居をくぐる。
私の足音と、小さな雨音しか聞こえない。
ぎゅっと握りしめた包丁。
これで、殺しなさい、とお母さんは言った。
殺して、そのまま樹海に捨てなさい。
誰にも見られずに、誰にも知られないように。
家族の幸せのために、殺しなさい、とお母さんは言った。
「シキ……くん……」
石段を登る。
その間に頭の中で、何度もシキ君を殺した。

きっと土蔵の中にいる。この時間なら起きてるはず。でも大丈夫。
いつものように話をしながら近づけば、警戒されない。包丁はすぐ
に使えるようにこのまま。目が見えないから分からない。一息で心
臓を刺せば苦しまないで死ねるはず。悲鳴を上げないように口を塞
がないと。暴れないように一撃で。もし暴れても大丈夫。シキ君よ
り私の方が年上だし体もほんの少しだけど大きい。大丈夫。手早く
すませてしまえば大丈夫。何も難しい事なんてない。相手は子供。
相手は盲目。
シキ君は、私のこと友達だっと思って信用してるから……。
「――――あ」
石段を登り切って境内に踏み入れた途端に、
冷たい風が頬を打った。
「なに考えてるの私……」
今、自分が思い描いたことに寒気がした。
「友達なんだよ……。私、友達を……」
殺そうとしてる。
「友達なんのに……」
そうするのが、当然のように、殺そうとしてる。
「シキくんは、友達なんだよ」
家族(自分)の幸せのために、

「友達なのに……絵馬ちゃんの弟を」
他の家族を不幸にしようとしている。
「ダメ……そんなの、絶対に間違ってる」
友達を不幸にしてまで得られるものが、幸せであるはずがない。たとえ、それが一番簡単な方法だとしても、幸せになれるはずがない。そんな幸せなんか、私は欲しくない。
「戻ろう……戻って、お母さんを説得して……」
今度こそ自首しよう、と思った。けど、それだとまたさっきの繰り返しになってしまう予感がした。
雨に打たれ、雨音に耳を塞がれて立ちつくす。
その時、脳裏に過ぎった。
『俺や奥津城だって、おまえを助けたいって思ってるんだ。だから……甘えろ、少しは。それは迷惑な我が侭じゃない、優しさなんだからさ』
力強い声が蘇る。
「……絵馬ちゃんに」すべて告白して助けてもらおう。
今まで遠ざけていた考えを巡らせて、口にしたらなんだか少し楽になったような気がした。
すべてを告白する。私の家で何が起きたのか全て、絵馬ちゃんに話そう。そして、それから警察に行こう。それでもし、絵馬ちゃんが私の事を嫌いになっても、きっと、このままシキ君を殺してしまうより、救いはあると思う。
「うん。もう、終わりにしよう」
私は、やっと自分の意思で決意を口にした。
持っていた包丁を石畳の上に捨て、絵馬ちゃんの家へ向かため、走り出そうとした、その瞬間、

――ギァァァァァーーーーァーーーッ！

大気を切り裂く甲高い悲鳴が森全体に響き渡った。
「なに！」あまりにも鋭く獣めいた悲鳴に、体が無意識に強ばる。
周囲を見渡した。
雨は相変わらず涙を垂らすように降っている。
薄暗い境内を、拝殿までの道のりにある石灯籠が、朧気に青く灯りで照らしている。
拝殿の向こうの竹と細い木が鬱蒼と生いる闇が潜む森から、耳を澄ませば誰かの叫び声が聞こえた気がした。境内は小さな雨音だけ。
私の足が、震えながらもその森へと近づこうとしていた。

静まりかえった境内。
仄かな明かり。
墨を散布した暗闇。
果ての見えない森。
闇色を幽かに薄める雨の中。
私の目が、鮮やかなほどの白色を見つけた。
「だれ……？」思わず声が漏れた。
拝殿の向こうに広がる森。その浅瀬に、揺れる白色。
それがゆっくりと、森からこちらに向かってくる。
徐々に鮮明になる。
森から抜け、からんからん、と雨の中でも乾いた下駄の音が一際よく響く。そして石灯籠の青白い幽かな灯火に、照らされてた時、
「シキ君――――」
複雑な心境の中、
友達に会えた嬉しさに駈け寄ろうとして、
「――――ひっ」
体が凍り付いた。
周囲の空気が一瞬で凍ったように冷たくなる。
痙攣して震える体。
痺れる眼球で、私は、その白色を見た。

深海から浮かび上がったように濡れた黒い髪。滑らかな光沢のある白い着物。太陽の光を拒絶し続けるような白い肌。帯だけが赤い。
それは、たしかに、シキ君だった。
だけど、見知らぬ、シキ君がいた。
目を覆う包帯がない。
あるのは――――この世すべての生命を否定するような鋭い瞳。
「ぁ、ぁ、ぁ、お……青い、眼」
夜闇と細い雫の束の中、まるで自ら光り輝くような眼球。
「――――ぁ」
その眼を見た。
ただ、それだけで殺されたと思った。
でも、体はある。
心臓は、まだ怯えるように震えながらも動いている。
呼吸は、締め付けられたように難しいけど、機能している。
吸い込んだ空気が、氷のように冷たい。
「シキ、く、ん……？」
口が震えて歯がかみ合わない。
すると、シキ君は、ゆらりと幽霊か霧のように停止した。
石灯籠の側で、シキ君が自然体で立ち止まった。
その時やっと、私は、私に纏い付く寒気の正体に気づいた。

『人殺しなのよ』
脳裏に響く声。
眼を背けたくなるほど、鮮やかな赤色。
純白で汚れのないはずの白い着物が、真っ赤に染まっている。
「あ……ぁ―……あ、あ」
血だ。
真新しい鮮血を大量に浴びている。
白い着物、顔にも、黒く濡れた髪も、血を浴びている。
そして、手にも血。
「……っあ」
それを眼にして、呼吸が出来なかった。
『シキはね、人殺しなのよ』
手にはナイフ。
血に染まったナイフを握っている。
血を浴びたシキ君。殺意の結晶のような眼。
それでも、それが普通の事のように、シキ君は佇んでいる。
静かに、この世すべてを、拒絶するように。
『私のお母さんもお父さんも、アイツが殺したの』
響く。
嫌が応にも響く忠告。

それを忘れてはいけなかったと、私を叱るように響く。
そしてシキ君が煌めく瞳で、
私を、視た。
「っうーーーーっ、ぁぁぁぁぁ」
途端に、全身に悪寒が迸った。
苦しい。
心臓を握りつぶされたような激痛。
胸を押さえて、動悸を押さえようとするも、心臓は悲鳴を上げる。
「あぁっ、あ……っぁ……」
全身の力が、抜けていく。
幾千の針で刺されるような痛みが全身を覆う。
喉が、乾く。
雨に打たれて冷え切った体に、
外気に触れる肌が、焼かれるような熱い。
呼吸が、オカシイ。
鼓動が、オカシイ。
眼球が、オカシイ。
身体が、オカシイ。
脳髄が、オカシイ。
すべて、オカシイ。

鋭く乾いた苦しみが、私を殺そうとする。
『あやめ……、――――　るわよ』
脱力と痛みで霞む意識の中、絵馬ちゃんの声が蘇る。
必死に、意識を、命を繋ぎとどめようと踏みとどまる。
もう、それだけで精一杯。
その中、カラン、と音がした。
顔を上げて、それを見た。
だらりと下げた手にナイフを握ったまま、
真っ赤に染まったシキ君が歩いてくる。
歩いてくる。
歩いてくる。
歩いてくる。
『シキに関わると――――』
歩いてくる。
歩いてくる。
「ぃや……い、ゃし……」
歩いてくる。
歩いてくる
『あやめ……、シキに殺されるわよ』
私を殺すために、歩いてくる。

「いやッッ――――――――――――！」
身体が壊れるほど叫んだ。
ニゲロ、と本能が泣き叫ぶ。
死にたくない、と泣き叫ぶ。
身体が死に絶える前に、逃げないと殺されると思った。
走った。
まだ残っている力振り絞って走った。
振り返って石段を駆け下りた。
足を滑らせて転げ落ちる心配は、
だけど、早く逃げたいと泣き叫ぶ身体が足を緩めなかった。
乱れた呼吸が肺を張り裂けるそうになっても走った。
平衡感覚がもうメチャクチャだけど、
足だけは走りを止めなかった。
「はぁ……っはぁ…はぁはぁ…っう……はぁしし」
石段を下りきり、乱れた呼吸を整える暇もなく鳥居まで全速力で走った。
早く。
早く逃げなくちゃ。
早く。
早く、お母さんと一緒に逃げないと。

暗闇に隠れた赤い鳥居が見えた。
「っはぁっあ――――、う、…そ」
誰もいない。
脳髄を締め付けられる錯覚。
誰もいない。
ノドを締め付けられる錯覚。
誰もいない。
「な、ん、で……」
オカシクナリソウ。
「お、かし、さん？」
アタマがオカシくナリソウ。
「おかしさん！」
周囲は闇。
一切闇。
鳥居だけが朱い。
誰もいない。
「うそ、うそ、なんで！」
誰もいない。
お母さんがいない。
探した。

周囲を探した。
闇の中を探した。
呼んだ。叫んだ。
帰ってくるのは残響。
有るのは赤々とした鳥居と、
黒い箱が置いてあるだけだった。
「うそ、なんでいないの？　なんで、なんで、ひとりにしないでよ！」
うるさい。
自分の声がうるさい。
いつの間にか脱がされたフード。
耳に直に当たる雨音がうるさい。
ガチガチと鳴る歯がうるさい。
「置いて行かないで、よ……」
置いていかれた。
ひとり。
捨てられた。
お母さんが、ひとりで、逃げた。
私を置いて。ひとりで、逃げた。
私を見捨てた。自分だけ逃げた。
私だけ残して。自分だけ逃げた。

お母さんは、私を見捨てたんだ。
お母さんは、私を見殺しにした。
お母さんは、私を裏切ったんだ。
裏切った。
裏切った。
裏切った。
家族を、裏切ったんだ！
「う・そ・だ。……そんなの、嘘だーーッ」
カランカラン、音がした。
全身が一瞬、強ばった。
「あ、……だめ」
逃げなきゃ殺される。
走った。
からんからん、と響く音から逃げ出した。
走って、樹海から抜け出す。
身体が軋む。錆びた鉄が擦れる音が内側から響く。
暗闇の道。冷静な外灯の光に縋るように走る。
途中、腕を落とした気がした。
足が千切れた気がした。
内蔵を投げ捨てた気がした。

身体が引き裂かれた気がした。
私がバラバラになっていく錯覚がつきまとう。
それでも、走った。
視界を遮る雨。
罵倒する勢いで流れ落ちる雨粒。
射抜くように私を打つ。
一瞬、視界が青白い光に覆い尽くされた。
数秒遅れて、地面が揺れるような大音量が耳を塞いだ。
吹き荒れる風が鞭（むち）のように私を打ち払う。
邪魔をする。
鳥の群れが一斉に羽ばたく様に、
荒れ狂った葉音が両脇から嘲笑うように鳴る。
ありとあらゆる罵倒を、音にして鳴り響く。
その悪意の中、

――――――いつまで　いつまで。

また、あの鳴き声が聞こえた。
自分の呼吸音は聞こえない。
心臓の鼓動なんて聞こえない。

私の意思だけが走っているような錯覚。
私をかき消す悪意の騒音の中で、
いつまで　いつまで、と金属的な泣き声が聞こえた。
はっきりと、近くから聞こえてくる。
張り付くように、いつまでいつまで、と聞こえてくる。
執拗に、どんな大きな音よりもハッキリと鋭いく聞こえる。
走った。
何かを叫んだ。
その声さえ、かき消される雷鳴。
何かを叫んだ。
その声さえ、切り裂く鳥の鳴き声。
身体の感覚がない。
それでも走っているのは分かった。
逃げているのは分かった。
帰ろうとしているのは分かった。
どこに帰るのかも、分かっていた。
だから走った。
早く家に帰りたい。
壊れていく私の躰。
それで、壊れてしまっても良いから、早く帰りたかった。

あの家に。
雨のヴェールに視界は遮られ、だけど、家に近づくと倒れそうになりながらも、玄関へ走り込んだ。
急いで、玄関のドアを開けて、乱暴に閉めて鍵を掛けた。
そして、そのまま尻餅をついて座り込んでしまった。
家に帰ってこれた、その安堵から、意識が冷静さを取り戻そうとしている。乱れた呼吸がノドを突き刺す。壊れかけた肺と心臓が、必死に生きようと動いている。
呼吸するのが厳しい。痛みが鮮明になって苦しくて、ぎゅっと身をまるめて暫く堪えた。
「はーっ…ァ…はぁ、はぁっ…っう。……はぁー」
ポケットからガラス瓶を取り出した。残り僅かの薬。手が震えて一つずつ取り出せないから、手の平にこぼした。それから無造作に飲み込む。
目を積むって、呼吸が落ち着くのを待つ。全身に巡る血の動きが分かる。隅々（すみずみ）まで行き渡っている熱い水。感覚が鋭く広がる。
ゆっくりと立ち上がる。
身体が重く鈍くなっている。大量の雨を吸い込んだように重い。両足は感覚がないほど痺れている。喉から肺まで針金が入っているような異物感がする。

ゆっくり動く度にまるで風が吹いたように揺れる。それが気持ちよくて、だんだんと気持ちが落ち着いていく。
静まりかえった家。
外で吹き荒れる風と葉音が、家の中まで響いてくる。
暗い。外よりも暗い。廊下の行き止まりは闇。端までは見えない。
幽かにリビングのドアと和室の障子が見える。
ゆっくりとリビングに向かって足を動かした。
歩く度に、身体が揺れて意識が抜けてしまう感覚がする。まるで身体と私の意識が接着されずにグラグラ揺れているようだ。
リビングのドアを開ける。
中に踏み込んだ瞬間、窓から目を射抜くほどの光が入った。
瞬間、私の時間が遅速する。
散らかったリビング。
絨毯に散乱した硝子片が煌めく。
白い壁紙にペンキをまき散らす。
ひっくり返ったソファ、壊れた机にもペンキ。
見慣れた物が、壊れて散らかっている。
正面の窓から鋭い光が侵入する。
雨戸から不気味な影が、リビングに広がる。
眼球が、ぎしぎしと軋みながら、それを見た。

見慣れない物が、雨戸に寄りかかって座っていた。
不気味なオブジェ。
不細工なオブジェ。
壊れたマネキン。
それは不思議なことに、お母さんの服を着ていた。
「あ、あれ、ぇしー？、？」
私の口元が歪む。
それを見て歪む。
汚れたマネキンを見て歪む。
汚いほどペンキをかぶったマネキン。
「あ、あ、は、ははは、？」
可笑しい。
すごく、可笑しい。
だって、そのマネキン、顔がないだもんの。
だから、すごく可笑しかった。
「は、はは……はぁはっはは？」
怪訝しいよ。
私、怪訝しい。
私、怪訝しいよ。
だって、その首の無いマネキンを、

「あははは、……おかーさん？」
お母さんに見えるんだよ。
「は、っはは……おかー、さん……はは」
可笑しい。
すごく、怪訝しい。
あんなマネキンが、お母さんに見えるなんて、オカシイ。
首がないマネキンが、お母さんの格好をしているのから、
すごくオカシイ。
オカシイ。
部屋中に巻き散らかれているペンキが、赤く見える。
リビングが真っ赤。
赤黒いペンキ。
「は、ははははぁ、ぁー」
オカシイ。
血の臭いがする。
吐き出しそうなほどの、血の臭いがする。
マネキンから、血の臭いがする。
真っ赤な首のないマネキンから、血の臭いがする。
オカシイ。
可笑しくて、可笑しくて、しかたがないくて、

アタマが、オカシクなりそう。
「はは……はははははっはあっはぁッ！」
喉が裂けるまで笑った。
身体の中の全て吐き出す程笑った。
笑って。
嗤って。
笑い叫んで、
「あぁぁぁーーーーーーーーーーーーーッ！」
弾けた。
「あぁ！　ぁあーあぁ！　おかさん！　おかーあーさん？　おかーさんが！　……はは、おかーさん！」
お母さんが、死んでいる。
首のないお母さんが、窓際に座っている。
綺麗だった黒髪なんてない。
綺麗だった服が血で赤黒くなっている。
「あぁあぁぁぁあぁぁッぁあぁッ――――――」
雷鳴。叫び。
立っている事を放棄した身体が崩れる。
頭が痛い。
身体が痒い。

「ははは……なんで、どうしなの……」
どうしてお母さんが？
どうしてお婆ちゃんが？
どうして私だけが？
「なんで……なんで、私ばっかり！」
どうしてこんなに哀れなの。
どうしてこんなにも不幸なの。
どうして辛い事ばかり遭うの。
「なにしたっていうの？　……私が、……私たちが悪かったの！」
闇に叫ぶ。
「助けて……たす、けてよ……誰か、助けて――――ッ」
リビングを一瞬照らす雷光。直後に轟音。
そして、電子音が鳴る。
私の側で電話がなった。
バネのように腕を伸ばして、受話器を取った。
そして耳に当てる前に、
「助けて！」
マイクに向かって叫んだ。
『……あやめ！』
スピーカから聞こえた。
「え、ま……ちゃん？」
絵馬ちゃんの声だった。
その声を聞いたら、急に涙があふれ出た。
『あやめ？　あやめ、どうしたの？　何があったの？』
「え、絵馬ちゃーん、わ、わだし……」
受話器をしがみつく様に握る。
絵馬ちゃん、と何度も繰り返し叫んだ。
『あやめ、落ち着いて。何があったの？』
「お、っお、お婆ちゃん……お婆ちゃんが……。おかーさんが殺したの……、包丁で、ほーちょうで、何回も、何回もさして、おばーちゃんを、おばーちゃんを……、っうおばーちゃん、おかーさんが、殺したのッ」
スピーカから、絵馬ちゃんの息を呑む静かな音が聞こえた。
『あやめ……それ、いつ・・・』
「ど、土曜、……それから、それから、私、おばーちゃん捨てたの……森に、バラバラにしたおばーちゃん、捨てたの。おかーさんと一緒に、私が捨てたの！　ごめんね、ごめんね……絵馬ちゃん」
まるで身体の中の悪い物を吐き出したように、一気に喋った。喋ってしまえば、ほんの僅かだけど、流れる涙が清涼剤のように爽やかな気持ちにさせてくれるから。

これで、きっと絵馬ちゃんも、離れてしまうかな。
そんな事を私は笑いながら思った。
『あやめ。小母(おば)さんは？　小母さんはどうしたの？』
なんでか、もう諦めているのに、絵馬ちゃんは今までと変わらない声で話しかけてくれる。
「おかーさん……、死んでる」
だから、もう何が何だか分からない。
「わたし、さっきね、行ったんだよ……神社に」
『え……？』
「おかーさんと一緒に行ったのに、おかーさんいなくなって、それで、それで、帰ってきたら、死んでるの…。無くなってるの、頭が」
『あやめ……』
「おかーさんのね、頭が……、無くなってるんだよ……ねぇ、絵馬ちゃん。……絵馬ちゃん、私、どーしたら、いいのかな？
変だよ。オカシイよ。あのね……あのね、絵馬ちゃん。さっきから、さっきからずっと……」
私に響く。
声が響く。
「いつまでって、後ろから声が聞こえるんだよ、は、はは」

――いつまで、いつまで、
いつまで、いつまで、
いつまで、いつまで――。

『っ…あやめ逃げて！』
振り返った。
瞬間、雷光が影を作った。
「いつまで」
明確な声で発した影。
細長い闇。
羽根。闇色の霧が翻る。
黒い影。
見上げると、髑髏(ドクロ)のような顔。
嘴(くちばし)。
「いつまで――」
鳥。
鳥だ。
大きな鳥が、そこにいた。
「いつまで――」
黒い霧のような羽根。

爪が露わになる。
雷光に照らされた瞬間、それが鈍く光った。
獣の牙に似た爪。それが掲げられた。
だというのに、私の身体は凍ったように動けない。
私は、見惚れていた。
鳥が、囀う。
いつまで、と囀う。
牙のような爪の先を、私に向けて囀う。
「これが、祟り――――なの？」
囁き。
声。
ここにはいつも、声があった。
お母さんとパパ、お婆ちゃんに、私の声があった。
ここにはいつも、家族がいた。
お母さんとパパ、お婆ちゃんに、私の四人がいた。
ここにはいつも、幸せがあった。
辛くて苦しい事、悲しい事もすべてが幸せだったと感じる。
ここにはあった、幸せな家族。
ただ、戻りたかった。
幸せだった普通の生活に。

ただ、幸せになりたかった。
特別なものなんて望んでない、
ただ、家族が一緒にいる。
そんな当たり前の、そんな普通の生活、
それだけを望んでいたのに。
それ以上のことは望まない。
また、家族がこの家で一緒にいる事を、
どうして許してくれないの？
何がいけなかったの？
何が悪かったの？
私がヤタガラス様を信じなかったから？
私が祟りを信じなかったから？
私がお父さんを裏切ったから？
私が、幸せを望んだから？
「なにが、いけなかったの？」
爪が迫る。
私は叫んだ。
ごめんなさい、涙を流した。
何が悪かったの、微笑んだ。
そして、叫んだ。

――いつまで祟るの。と。

命が壊されるまで泣き叫んだ。

『あやめ！　あやめ！　あやめ――――ッ』

スピーカから聞こえる友達の声。

それが今では遠い、

幽かな、幸せだったのだと、最後に気づいた。

第一章　赤い祟り（了）

カクレアソビ／幕間

九月二十二日、深夜未明。

嵐は過ぎ去ったように淑やかな風と雨、そして、人々の眠りを守るかのような静寂が多い住宅街は朝まで穏やかな時間が訪れる、はずだった。

住宅街の一角で、色褪せた赤色の灯りが回っている。

榊邸前の道路には数台のモノクロの警察車両が停車している。まるでその家へ、野次馬の侵入を遮るかのように同じ色の車が群れをなして止まっている。その中に、群がる物との地位の違いを誇示するかのように、真っ赤なスポーツカーが一台、榊邸にもっとも違い位置に停車していた。警察車両の群れの中で、それはあまりにも堂々と有る。誰一人として文句を言うはずもなければ、言えるはずもない。

「ふぅー。まったく、箱詰めの次は首無しか」

悪態をつきながら車の持ち主、鬼束虎子（おにつかこ）は運転席に乗り込んだ。

「呪われてるんじゃないのか、この町は」

薄ら笑いを浮かべながら、鬼束虎子は助手席へ視線を向けた。

助手席に、奥津城絵馬が座っていた。

顔は俯き、藍色に濡れたジーンズの上で握りしめた両手をじっと見つめていた。長い髪は風呂上がりのように濡れ、革製のシートに雫が滑る。

それに一瞥して、鬼束は窓をあけ、近くにいた制服警官を呼び止めてタオルを要求した。呼び止められた警官は緊張したのか、慌ててタオルをどこからか調達して鬼束に手渡し、敬礼をして去った。

「ほら拭け。シートにカビが生える」

乱暴に絵馬の頭にタオルを投げる。絵馬はそれに手を伸ばすこともなく、同じ姿勢のまま沈黙を続けた。

鬼束は、あからさまにため息をついてフロントガラス越しに、右往左往と動き回る警察官を眺めた。頭上では合皮の屋根に雨粒が当たって弾ける音がリズミカルに流れている。

雨音は緩やかなリズムを奏でている。

細かな水の群れは、優しく落ちて、弾けて散る。

落下の悲鳴も、空気との摩擦も、衝突の炸裂も、

誰かを優しく慰めるように、偽善的なほど穏やかだった。

鬼束虎子は眠たげにため息をつき、目を瞑ってここ二時間ほどの情報を頭の中で整理した。

制服警察と鑑識員が到着したのはつい先ほど。今も榊邸内では捜査が続けられている。

そして、鬼束もさっきまでその捜査に参加していた。それでも、現時点で大まかに分かっている情報を入手し、今後の捜査についての指示をしたらすぐに、自分の車に戻ってきた。

「そろそろ落ち着いたか」

鬼束は目をあけて、そのままの視線で訊いた。

「あやめは……？」

絵馬が囁くような小さな声で喋った。

車体で奏でる雨音に遮られてしまいそうな声に、鬼束は視線はそちらに向けられた。

「あやめ……、見つかったの？」消え入るような声。

それに対して鬼束は首を振って、まだだとハッキリと答えた。

「少なくとも家の中には居ないようだ。家に居るのは、母親の首無し死体だけだ。……ああ、そうだ。母親の首なら発見されたぞ」

鬼束は正面を向いたまま言った。

「首は、鳥の森神社の鳥居の側で発見された」

そのを聞いた瞬間、絵馬の顔の筋肉が痙攣したように微動した。

「例のごとく匣に入っていた。今はまだ鑑識が調べている途中だが、十中八九、あれの首だろうよ。私も確認したが、生前の顔とそう変化していない新しいものだ。放置されて、そうだな数時間程度が良いところだろう」

憮然とした口調で語る鬼束。絵馬は口惜しげ睨んで俯いた。
「あやめのお父さんは？　……家族が突然居なくなったなんて知ったら……可哀想」
絵馬の弱々しい呟きに、鬼束は、それはないなと告げ、
「榊あやめの父親、婿養子の榊宗一郎なら、数時間前に死んだよ」
そう、飄々と返した。
絵馬は驚き顔を上げ、真偽を確かめるかの様に、じっと鬼束の横顔を見つめたが、表情は感情の揺らぎなどで変化されず一定だった。
「午後九時三十分頃だ。伏木駅のホームから線路内へ落下、そのまま電車に轢かれ、ほぼ即死のようだ。荷物から榊宗一郎の身分証と、奇跡的に原型をとどめていた頭部から、本人だと確認がとれている。監視カメラの映像に不振人物が写っているから、事故ではなく、事件だと私は思う。なにせな、榊宗一郎の鞄の中から、これが発見された。なんだか分かるか？」
鬼束はおもむろにスーツの内ポケットからビニル袋を取り出した。手の平大ほどのビニル袋の中には、透明のガラス瓶。さらにその瓶の中には半分赤いカプセルの錠剤が入っていた。
それを目の前まで近づけさせると、絵馬は目を見開いてそれを凝視して一瞬息を呑んだ。
「これ……あやめが飲んでた薬……？」
絵馬が半信半疑に答えると、鬼束は感心したように息を漏らしシニカルな笑みを浮かべた。
「ほぉ。娘にまでにな。中々、悪党じゃないか」
「それ、なんの薬なの？」
「ああ、これは薬といっても市販されている物でもなければ薬局などで商法される薬でもない、いけないオクスリさ」
「覚醒剤、なの。それ」
「ま、素人にはその認識でも構わないがね。これは最近この辺りで出回っている、オリジナルのものだ。これは幻覚性と依存性と、記憶障害まで起こす、それこそ病的なクスリ……いや、魔的といった方が洒落ているかもな。通称、ネバー・モアと言われている。流通量は極めて微量だが、依存性が非常に高く、それこそ売人は神様扱いさ。そんなドラッグが榊宗一郎の鞄の中から発見された。そして、娘も服用している疑いがあり、か。見識が来る前に簡単な調べてみたんだが、玄関で、これとよく似たカプセルを数錠発見した。今、鑑識に調べさせているが、間違えなくネバー・モアだろう。いつあそこに落ちたかはしらないが、日常的に誰かが服用していたことは、容易に想像はつく」
鬼束はビニル袋を再びスーツの内ポケットに納めて、窓から榊邸を見つめて呟いた。

「これで、榊家は一家絶滅だ」
ため息混じりの呟きに、絵馬は握りしめた拳を振り上げようとしたが、鬼束がそれを視線で殺した。
しばらくそのまま睨み合う。憤怒に満ちた視線をぶつける絵馬に対して、鬼束は涼しげにシニカルな微笑みを浮かべて見下した。
「あやめは、どこに行ったの？」
先ほどよりも明確な発音で問う。
それに対して、鬼束はやや目を細めた。
「同じ事を何度も尋ねるな。それに、質問してばかりではなく、こちらの質問にも答えろ。まずは、おまえが榊あやめと最後に電話した時に、榊あやめが自白した話だが。昨日、母親が祖母を刺殺し、死体を解体した後に匣に詰め鳥の森に放置した、だったな。確かに、榊あやめがそういったんだな」
虚偽や黙秘は許さないと睨むように、絵馬を見下す。
絵馬は、そうよ、とそれだけ答えて頷いた。
「そうか……。じゃあ次に数時間前、榊あやめは母親と共に鳥の森神社に向かった。だが母親は姿を消した。そして帰宅すると、リビングで母親の首のない死体を発見した。そうだったな」
「ええ、そうよ」
「本当に、榊あやめが、そう言ったんだな」
「そうよ。あやめが、言ってた。泣きながら……、言ってた」
言い終えると絵馬は、歯を食いしばり膝の上で拳をぎゅっと握りしめた。微かに肩も震えている。言語化出来ない感情か、声にし難い感情がきっと彼女の中で渦巻いているのだろう。
鬼束は一切の揺らぎを表すことなく、腕を組んでシートに深く座り直した。そして、妙だな、と一言呟き足を組み、バックミラーへ視線を向けた鬼束は一度目を瞑り、整理した情報を引き出して語りだした。
「今朝、鳥の森で発見された死体。検死の結果、死亡推定日時が大まかだが判明した。いいかよく聞け。死体は、殺害から少なくとも二・三日は経過している。昨日殺害されてたって事はないだろ」
「……そんな。だって、あやめが……」
唖然と見つめる絵馬にはお構いなしに、鬼束はさらに続ける。
「次に。祖母は母親によって刺殺されたと言ったな。だがな、発見された死体の腹部、胸部は殺害後に解体された時の傷しかない、内臓なんてホルマリン漬けにして飾りたいなんて変態ジジイが言ってたぐらいさ。直接の死因はな、頭部挫傷、後頭部を鈍器で殴られたか。刺殺ではなく撲殺だ。さらにまだ不自然なある。榊あやめは、今夜、鳥の森神社から帰宅して、リビングにあった死体を発見した、と云っていたんだな」

絵馬に問いかけるように、彼女を見据えたが、その視線はただ威嚇しているような鋭さだった。
絵馬は声もだせず、辛うじて微かに頷いた。
「なるほど……。それを聞いて、おまえは何か疑問に思わなかったか。なぜ、榊あやめが鳥の森神社を訪れたのかと」
「それは……、私かシキに会いに来たからじゃ……」
「それもあっただろうよ。でもね、どうやら榊あやめにはもう一つ、いや、こちらが本来の目的であって、それはオマケなんだろうよ。いいか、聞き返すなよ。さっき言った榊あやめの母親の死体、その首が発見されたのはな、鳥の森神社の鳥居のそばだ」
蠢動(しゅんどう)する絵馬の視線。彼女の感情が入り乱れ暴れているのだろう。その収束を待つほど、鬼束虎子の気は長くはない。
「ここに来る前に私が発見した。今詳しく調べさせているが、匣の形状は鳥の森で発見された二つの匣と同じものだよ。つまりね、鳥居のそばにあった匣も、榊家によるものだという可能性が極めて高い。もっとも、私は二つの死体は、同一犯によるものだと確信しているんだがね」
私が何を言いたいのか分かるか、と鬼束は絵馬を見据えた。
絵馬は目を瞑り、ぎりと歯を咬んだ。
まるで異なる事件が、同じ町、同じ家で起きているように思えて、それを容易く解消できるはずの結論を認めることが、どうしても出来なかった。
「わからない……理由が、わからないわよ」
冷えきった鬼束の視線。
「犯人逮捕において『証拠』と『動機』というものを、警察は重要視している。だがな、私は、動機など、どうでもいいと思ってる。そんなもの、きっと本人だって定かじゃないさ。警察が気にする事じゃない、そんなもの逮捕した後にでも、検察か精神医にでもまかせておけばいいんだよ。さしたる動機がなかろうと、人は人を殺す。それこそな衝動的に殺すこともあるし、私なんか考えつきもしない、些細な事が殺害理由になることだってある。狂人になればそれが顕著になるだろうし、殺人が体質になった化け物を、私は見たことがある。ほら、オマエの身内にもいるだろ。存在自体が人を殺す、という死神がさ」
「……あんただって、殺人狂じゃない」
絵馬はそっぽを向き、吐き捨てるように呟いた。
「まさか、火器狂なのは認めてやるが、殺人は今のところないぞ。話がずれてしまうな。榊あやめが、母親と祖母を殺害に関与しているというのは、本人も自白している事のようだ」

「……あやめは、隠し事はできても嘘が出来るほど器用なこじゃないもの。本当は、それだって。信じられない……。ううん、あやめが勘違いしているだけで、間違いだってまだ信じたい。だから、それをハッキリさせたかったのに……あやめも、被害者なのよ」

躊躇いながら言葉は発し、鬼束の凶行を抑制するように厳しい口調で絵馬は言う。

鬼束は、そうだな、と頷き、運転席側の窓を開けた。近くに立っていた警察官を呼び寄せ、車を出すから道をあけろと命令した。

「確かに、榊あやめも被害者になるかもしれん。姿をくらましているのか、それとも攫われたか、どちらにしても、こちらとしても、重要参考人が行方不明なのは、面倒な仕事が増えて溜まらん。ただでさえ、今回の事件はどうも、まだ正体が見えんというのに」

忌々しげに、組んでいた足を解きシートを調整してハンドルを握った。

「不可解な事件が増える一方だ。せめて榊家の事件は早々に仕舞うしたい。絵馬。榊あやめは、他に何か言っていなかったか。誰かに、狙われているような事を」

「……そういえば言ってた。声がするって」

「声、だと……」

鬼束は腕を組んで、集積された情報を検索するように目を瞑った。

絵馬は前を向いて、たまに上目になり思い出しながら続けた。

「そう。いつまで、その声が聞こえるって怯えて……」

「いつまで……、だと」

見開かれた鬼束の目。閃きが悪寒となる。

静かだった鬼束の声が急に、たわけ、と荒ぶる。

「なぜそういう重要な事を黙ってたんだ、貴様は。クソッ。あのガキ、やっぱりこの結末も分かってたんじゃないか。なのになぜ明神と手嶋だけを……いや、だが、なるほどだ。これで榊家の事件は、ほぼ片付いたようなものだな」

「片付いたって、あやめがどこにいるか分かったっていうの」

「いや、皆目不明だが、榊あやめを攫った奴は検討がついた。というより、それの相手をするのは私ではない、というのが分かった。シキの所へ戻るぞ」

「ちょっと待って。なんでシキが！」

フロントガラス越しに、道を塞いでいた警察車両が動き出す。赤いテールランプが、まるで赤信号のように、アクセルを踏み出そうとする鬼束の足を止める。

「犯人逮捕は警察だが、妖怪怪奇だの祟りや呪いだのは、専門家に任せるものだ。相手が妖怪なら、相手するのは私じゃない」

振り向き、ニヒルに笑った。

「いつまで、ってのは妖怪らしい。妖怪や化け物の類が相手なら、私よりもシキの方が近い。それに、私に話した事をシキに話してみろ。きっと、私と同じ結論に達するはずだ。もっとも、私の結論も奴の話を聞いてから導かれたものだがな。榊家の事件は、どんな結末になるか知らんが、結論は出ている」

道が開く。

狭い住宅街の道には、野次馬と道ばたで恐縮するように停車された警察車両によってさらに狭くはなっていたが、車一台通るには問題はない。

「榊あやめは嘘などついてはいないとして。だが、私の情報も事実。となれば、それはもう、結論は一つしかないだろ」

赤い車のヘッドライトが照らす。

鬼束は、薄暗い道の果てを見た。

エンジンが唸るその車は、閉ざされた匣のようだ。

匣の中には二人の女。

「どういう事。結論って何よ。あやめが嘘をつくはずがない。でもアンタの情報も事実なら、食い違いだらけじゃない。矛盾してる」

そう食い違いが多いのだ。

祖母が殺害された日が違う。

祖母が殺害された方法が違う。

祖母が遺棄された日が違う。

母親が殺害された時間が違う。

母親が生きていた時間が違う。

榊あやめの告白が、事実と異なる。

だが、榊あやめは嘘はついていない。

それならば、やはり、告白か事実、

そのどちらかが偽であるはず。

だが、榊あやめの告白も真であり、

かつ、鬼束虎子が得た情報も真であるとするならば、

それは物語が二つあるということになる。

客観的観測事実に基づく、物語。

榊あやめの主観に基づく、物語。

その二つの物語が、一つの家で発生した。

矛盾が生じる。

矛盾などあってはならない。

世界は矛盾を許容しない。

「至って簡単な事だ。シキならきっと、こう云うだろうよ」

アクセルが踏み込まれた。

咆吼(ほうく)をあげるおうに爆音を発する。

初速より一気に最高速度へ駆け上がる加速。

加速する。
闇へ向かって加速する。
赤い匣は、今、白い死神のもとへと走り出した。
「――――真実は、一つじゃない」
そして、或(あ)る家族の悲劇に幕は下ろされ、
惨劇は未だ姿見せぬ月の下に、色を代えて廻り続ける。

幕間（了）